

325  
441

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





825
143

空水物語



特276  
419

325-143

雲  
水  
物  
語

釋 宗演 老師序  
菅原時保 老師序  
平福百穗君 挿畫



青  
龍  
道  
人  
著

光  
融  
館  
藏  
版







筆尙和匠仙



## 序

青龍道人座下、暫らく音容に接せず、眠食無恙暮し居られ候哉、婆心常に岳麓の雲を戀ふ、座下多年收得底の水牯牛近來益々純和に趣き候事と存し乍蔭相喜び居り候、扱て座下手稿の雲水物語は、嘗て「禪宗」誌上に連載の折り悉く通讀、始の程は此漢饒舌、例の兩片皮を鼓して天下の惡智識を愚弄するものとなし、且つ讀み且つ笑ひ次第に讀み將ち去るに隨て蔗味漸く加はり我亦覺ぬず雲水物語中の一人となり、



過去二三十年前の舊夢を一時に再現致し申候、蓋雲水境涯の有難きところは、其志氣の高邁、口體の素朴にあり、淡交水の如く、去就物と拘はらず、維道惟求、乃ち明師を訪ふときは千里を遠しとせずして走り、又良友を尋ぬるときは一錫杓に雲山を超ゆ、無邊の風月は眼中的の眼、不盡の乾坤は燈外の燈にて、日本の領分は天竺の横町に達せざれとも衲僧の脚跟は二鍊圍山の頂を攀づ、或は江西看月の佳話を半碗の冷茶に賞し、或は鰲山阻雪の芳躅を一枚の柏蒲團

に偲ぶ、思て此に至れば、今尙半死の病骨忽ち熱血を潮して、大に昔時に若返る心地致候、道人の雲水物語は、其言文を修飾せざる所、事實を流露する處に妙味ありと存候、嗚呼雲水行脚は禪林の生命、宗門の活力なり、之に因て身體を鍛鍊し、之に依て性情を砥礪す、今や祖庭眞風將に地に墜んとするの秋に丁て相共に斯道を提撕して、佛祖の惠命を永却に傳へんこそ千祈萬禱此事に候、古偈に曰く勿謂接賢窮、身窮道不窮、草鞋猛似虎、拄杖活如龍、渴飲曹



溪水、飢呑栗棘蓬、銅頭鐵額漢、盡在我山中、眞に  
是れ雲水の眞境界なり、何れ不日御面會の節餘情可  
申述候 草々敬申

明治辛亥七月

楞伽杜多

啓上

青龍道人

一一空下

序

雲か雲か雲幕々、水か水か水浚々、此の雲此の水、  
常に天を覆へ恒に地に満、

道人曾て雲水となり東に奔り西に走る、余も又曾て  
雲水となり南に去り北に來る、道人今雲水にあらず  
富岳の影に潜伏し、余も今雲水にあらず相海の濱に  
偶居す、

兩箇其名雲水たらずと雖も其實依然として雲水たり、  
是れ之の雲水一は變じて雲水物語となり、一は轉じ



て雲水小序となる、必竟如何、  
雲在嶺頭閑不徹、 水流崑下太忙生、

明治四十四年八月

曇華拜白

雲水物語目次

- 一 嵯峨の月
- 二 御悟を教へてやる
- 三 日面佛月面佛
- 四 彼の犬を逐つて見よ
- 五 死んで来い
- 六 もつと大い處がある
- 七 飯盗人
- 八 飯器に水を盛る
- 九 逆境の妙味
- 一〇 私鉢と木賃宿

一頁 三 四 五 七 八 九 二 三 〇



目次

一一 あまりーつらい唐辛  
 一二 本師の慈悲  
 一三 羅山和尚の再行脚  
 一四 此處は泣くところ  
 一五 老師様が先に泣かれた  
 一六 ウン／＼  
 一七 阿彌陀如來は孫杓子  
 一八 禾山和尚の機用  
 一九 ワハ、アとは何んじや  
 二〇 天台笠と頭陀囊  
 二一 形の峩山  
 二二 被布や靴には逢はぬ

二

二五  
 二九  
 三二  
 三三  
 三四  
 三四  
 三五  
 三七  
 三七  
 三八  
 四〇  
 四〇

二三 天台笠で嬾の處へ  
 二四 西國順禮  
 二五 引摺り出す  
 二六 道友の力  
 二七 大堰川の氷中に座す  
 二八 隻手ウ／＼  
 二九 獨りを愼む  
 三〇 禪狂僧  
 三一 説教師  
 三二 老師  
 三三 麥粥の交情  
 三四 優待されて油斷がならぬ

三

四一  
 四二  
 四七  
 四九  
 五〇  
 五二  
 五三  
 五四  
 五八  
 五九  
 六一  
 六三



目次

三五 ヤア達者か  
 三六 西笑の傘一本  
 三七 ケロックな  
 三八 咄這馬鹿坊主  
 三九 あたい是れで三つ  
 四〇 是れ地獄是れ極樂  
 四一 如何なるか別法寺  
 四二 乃公は恥づかしい  
 四三 サア乃公の舞臺ぞ  
 四四 折々かはる人の心を  
 四五 日本の僧侶で御座る  
 四六 そんなこと言ふて居つては

四

六四  
 六五  
 六八  
 七二  
 七三  
 七六  
 七七  
 七八  
 七九  
 八三  
 九六  
 九九

目次

四七 國家大平の御祈願  
 四八 舊時の觀を爲すこと乍れ  
 四九 廬山の半面觀  
 五〇 如何是湖中景  
 五一 柳は綠花は紅  
 五二 そう理屈を言ふものでない  
 五三 一寸來い  
 五四 不曾彈動一條絃  
 五五 今に始めるぞ  
 五六 雲水の天一坊  
 五七 嚴師の慈悲  
 五八 ヲー寒むく

五

九九  
 一〇二  
 一〇六  
 一〇六  
 一〇八  
 一〇九  
 一一〇  
 一一六  
 一二四  
 一二六  
 一三七  
 一四八



五九	雪中の門宿	一五四
六〇	尻の穴をなめる	一五六
六一	坐睡	一五七
六二	薬しやぼんを喰ふ	一五九
六三	歩行にして水牛に乗る	一五九
六四	鯉が座敷へ躍り込む	一六二
六五	輻鈍の辨當	一六四
六六	寶泰寺の布嶽和尚	一六六
六七	初發心の菩薩も十日目には凡夫に劣る	一六七
六八	信仰の感化	一七一
六九	道人が雲水中	一七三
七〇	相國寺の東嶽老師は	一七五

七一	風呂敷包を持って入室	一七六
七二	何ぢや此ざまは	一七六
七三	人を使ふには	一七七
七四	投宿の作法	一七八

雲水物語目次終



# 雲水物語

青龍道人

## 一 嵯峨の月

藤陰窮僻人來らず、世を棄て、出家し、世に捨てられて仕様事なしに、獨り香を  
燒きて、靜坐し乍らも、内心實に無聊に苦しんで居る瀬山和尚、張三李四何でも  
來い、山僧か不平を洩らし呉れんと、大に人待ち顔の處へ、柴門の剝啄、常に聞  
く百姓の權六とは異なれり、又一夜大臣の銅臭ある紈袴子にもあらず、耳を側て  
、先づ其馨咳に何を踊らし、窓を闔て之れを見れば、げに十年前洛西嵯峨天龍寺  
に留錫中、嘗て月夜石上の塵を拂つて昔し藥山和尚は、雲開け月の出づるを見て、  
忽然大悟拍手大笑したら、其聲濃陽の東、九十里に聞へたと云ふ話もあるから



乃公等とても今夜の月明で、悟られそうなものだ、イヤ腹が空つて来た、イヤ眠たくなつたなど嬉しい事も悲しい事も互に語り合ふて辛酸を共にせし獅子窟中の舊知已



活西月

を知る底の最も親しい道友であつた、倉皇相迎へて衣帯を控くを知らず、履を蹴

で、平常の肝膽を傾出せしも決して相識らずと他人顔せず、同床に臥して、被底の穿てる

つて赤脚で飛出し、顔々相對し、ヤア〜とばかりにて寒暄をも叙せず、マア寐轉んで談せやと、誠に苦樂を共にせし心友は、幾時に成つても道情は變らぬ、即ち寒燈を挑げて、一夜眠りを忘れて過ぎ越し方や、未だこぬ先の忘想まで昔話しの懺悔、

二 御悟りを教へてやる

貴公も知つて居ろうが彼の頭の禿た文老と云つた男なア、あれど、たしか今の相國寺の獨山和尚だつたが、彼等が嵯峨に居つた時、いつでも大接心前に成ると、「典老々々明日から愈々大接心が始まるぞ然かし又貴公が直日(堂長の職名)に叱られたり引すり出されたりすると思ふと氣の毒でならぬから今日は乃公が一番御悟りを教へてやろう、マアこつちへ來い」と云つて、嵐山の方へ連れて行つて、五厘の餅を三箇宛買つて、其餅を食ひながら、楓の中を婆娑々々散歩してきて歸り途に「典さん、如何だい今日こそ甘い御悟りが解つたるふ」と云はれて典老は「乃

御悟りを教へてやる



公は只腹が空つて居たから餅が甘かつただけだつた」と答へると、フ、ンと笑つて、「御悟りと云ふ物は、先づ其んなことかなア」などとひやかして叱つて居たが、

禿の文老と云ふ男は、誠に御悟りを鼻に掛けて乃公等を虐待めたものだ、今は如何して居るだらふ乎なあ。

られた時、乃公が文老に慨嘆して談した事がある、それは昔し江戸の至道庵で、東嶺和尚が彼の公案を提唱せられたとき、白木屋の遊様が、座下にあつて忽然大



三 日面佛  
月面佛

其の禿文の事で思ひ出したが、龍淵老師が碧巖録の提唱で馬師不安の因縁を講せ

悟したと云ふのに吾々は骨折の足らぬの乎、何返聞きても猫に小判とは残念ぢやなアと云ふたら、禿文がすぐ、「あれで大悟せぬ者は余程の鈍物ぢや」とぬかすゆへ、乃公は覺へず叱笑して、「馬鹿坊主疑言をぬかすな、今日の講座で幾人悟つた、ソ一云ふ貴公は即今何と悟つた」と云いながら、あんまり忌々しいから、把住して詰問したら、赤い顔して禪堂へ狐鼠々々と戻つた事が有つたよ。

四 彼の犬を逐つて見よ

ソ一云へば、乃公にも其れと同じ様な事が有つたよ、或る時東司の南の日向で虱を取つて居たら、僧堂の犬が尾を振つて來た、其處へ又文老が漂然と來たから、犬を見て嘆息した、嗚呼々々昔し趙州和尚の時分、這箇の狗子が世界に無かつたら、狗子に佛性ありや否や州云無、など云ふ公案も無くて、天下太平で有つたらふに今や

「參禪ハ須ラク祖師ノ關ヲ透ルベシ、妙悟ハ心路ヲ窮メテ絶セン事ヲ要ス、心路

日面佛月面佛、彼の犬を逐つて見よ



ヲ絶セズンバ、盡ク是レ依草附木ノ精靈ナリ、且ラク道へ、如何ナルカ是レ祖師ノ關、只者一箇無ノ字、乃チ宗門ノ一關ナリ、通身ニ箇ノ疑團ヲ起シテ、箇ノ無ノ字ニ參ゼヨ、晝夜提撕シテ、虚無ノ會ヲ作ス事ナカレ、有無ノ會ヲ作ス事ナカレ」

など、云はれて、參禪すれば打ちのめされ、堂内へ歸れば直日に叱られる、天地廣しと雖、錐を卓するの餘地もない程、智慧囊を振つて見解を呈しても不是々々と許り云はれてさ、

「ソ一御悟りが開きたいなら、教へて遣ろふか、何の造作もないことだ、ソレソレ



思ふと狗などは、天下太平で、實に羨やましいと乃公が云ふたら、彼の文老が云ふのにはソレソレ

其犬を逐つて見ろ」とぬかす故、乃公は「馬鹿を云ふなよ、犬を逐つて見性が出るならば犬殺しは、大善智識ぢやないか」と怒つてやつたことがある、夜も深けたから、晩茶でも一杯呑ふ乎

五 死んで来い

今夜は道人が一つ二つ懺悔談しを致そふ、參禪と云ふ事は始めの程は、何の事とも譯が分らぬので、老師の處へ、甘い理屈を考へて行つて、半分ばかりも喋々と辨じ出すと、恐ろしい目玉で、ウーン、又講釋をぬかすかと云ひ乍ら、いつでも、「死んで来い々々々々」と云はれる、或時參禪して、拜をするや、否や、已れはウーンと云つて死人の真似をして、白い目を剝いて、引つくり返つて倒れた、スルと老師は、呵々大笑して「死ぬ事は其れでよいが、趙州の無字は如何した」と云はれる故、一端死ぬには死んだものの、又狐鼠々々と起きて、歸りにかゝると、和尚が又「其れ見ろ、生きて居る」と、又笑はれたが、實に冷汗八石であつたよ、



六 もつと大い處がある

峨山老師に  
始めて參禪  
した時は、  
實に荒膽を  
ぬかれた心  
地がしたよ  
只ださい恐  
い々々々、  
思つて居る  
のに、大き  
な體格の和



尙で、恐ろ  
しい目付き  
で、じろり  
つと人を睨  
み付けて、  
禪板を握り  
込んで、今  
にも打ちそ  
ふな風で、  
ゴツさりと  
大きな座蒲

團へ、坐り込んで、室内へ這入るや否や、「サア如何ちや」と切り込まれる、其處  
で、愚圖々々ツと小さい聲で見解を呈すると、和尚はかぶりを振つて、「いや〜  
もつと大きい處があるぞよ」と云はれる、是れは何でも、大きい聲で云へばよい  
のだなと思つて、段々大きい聲をする、大きい聲を出せば出す程、いや〜もつ  
と大きい處ろがあると云はれる、予も絶體體命で、怒鳴り聲を揚げて、同じ言を  
繰り返へしたら、「馬鹿坊主、八ヶ間敷い」と、云ひながら、打つこと一棒ちや、  
獨參場へ戻つた時の、間の悪るさ、今でも身が振るへる様だよ。

七 飯盗人

コヲ云ふ懺悔談も致さねば分らぬが、伊勢の保兄と、尾州の眞老と、住兄と、美  
濃の因老と予と都合五人で、天龍の曹源池の畔で、朦朧たる月夜の晩に、天台の  
羅漢の様に、彼地の巖の上、此地の石の上と、思ひ〜に、解定後に成つてから  
出て来て、始めは、皆な息を凝らして靜座して居つたが、方丈の時計が、チンと、

もつと大い所がある、飯盗人



一時鳴つた、スルと誰云ふとなく、嗚呼腹がへつたと、云いだすと、乃公も腹がへつた、乃公もくくと、木の影や、巖の影から、喋り出して、決局何か食いたひと云ふ相談が起つたが、何もない、何んにしても、晝の四時半頃に、藥石（晩食の事）を食つて、其から茶一杯呑むのでなし、藥石も亦麥ばかりのチャブの御粥だから、實に腹がへるは當然である、其れから典座寮（炊事場）に其日は職人用の半麥飯があるだろふから盗みに行こふ乎と云ふ相談に成つて、鬮を引いたら、勢州の保兄と尾州の住兄が當選した、二人は頭を掻きながら、典座寮へ行つたが、その後で真と因と予と三人が、どうか首尾よく盗んで来てくれよばよいがと、手に汗握つて待て居ると、住兄がセツと溜息して歸つて来た、三人の者は口を揃へて、どをぢやくと云ふと住兄の報告がまづい、乃公は外面に立つて見張りをして居、保兄が中へ這入つた、這入つたと思ふと、間もなく副司寮（軍隊で云へば經理部長）の透兄の聲でコラくと誰何した、乃公は多分、保兄は副司

寮の透兄に捕へられたのだと思ふから、今逃げて来た處だと云ふ、そこで予等三人の者も、大に氣をもんで、心配して相談中、大入道の保兄が、ノソリと落付いてから、實に驚いて居た所だよと云ふと、保兄が云く「副司寮の透兄が何んだか、



戻つて来たが、手には何にも持て居らぬ一マアどふしたのだ、住兄が今走つて逃げて来た



ムニ〜と寢言を云つたら、住兄が薪を蹴るやら鍋を踏むやらして逃げ出した、其の物音で、典座寮でも目を醒ましたらしかつたゆへ、乃公は何にも盗まずに戻つて来た」と云ふので、一同が落膽しながらも、腹の皮をよつて笑つた、寢て居る透兄、起きて居る住兄を走らしたとでも言ふべきか

#### 八 飯器に水を盛る

此頃も沼津の東方寺へ遊びに行つて、若い時の懺悔談に、今の飯盗の失敗談をやらかしたら、東方寺の台巖和尚が、手を拍て談した事がある、台巖和尚も、其頃天龍に居つて、恰ど典座を勤めて居つた、峨山老師の頃ではあり禪堂常住で、八九十人も、雲水が居る時で、人増せは水増せ、食なくとも法ある處には住せよ、と云ふので、法令は嚴重だ、作務(作業)は骨が折れる、食ふ物は、麥粘りの薄い、天井の映る様な御粥だから、實に堪へられない譯だ、或時大工が一月ばかり来て居た時、職人へでもやつと半麥飯であつたが、其殘飯を少しでも翌朝の御粥に

入れて、大衆に供養しよふと思つて、毎晩釣棚へ上げて置くと、いつでも盗まれて仕舞から、或晩空櫃へ、水を一杯盛り切に入れて、平常の通り上げて置いたら、夜の一時頃に、チャブ〜ザア〜と云ふ音がするわい、乃公も此寒いに水を被つて修行するとは、感心な男もあればあるものと思ひながら、障子の影で見て居つたら、誰れか衣を着て頭をかくして狐鼠々々逃げて行く様子だ、其姿を見て、乃公は覺へず涙が零れたよ、其人は郷里では、財産家で、寺も一等地の、立派な住職でありながら、自分で志願で、修行に來て居るのだが、彼時分の枯淡生活では、サゾ腹も減つたらふと思つて、實に察した事があつたよ。

#### 九 逆境の妙味

乃公は小僧の時分、あんまり師匠に可愛がられない方であつた爲め、鞋資などは始終困り通しであつた、今では鞋資ではない、汽車賃だの學資だのと云はなければ、雲衲方に分らぬ位のだが、乃公が美濃の靈松院の學林に留錫して居つた頃、

飯器に水を盛る、逆境の妙味



其學林は名は學林でも、宛然で僧堂の通りで、托鉢もやる、作務もやる、朝暮の勤行も仲々嚴重で、食物などは朝夕が、引割麥の米入らずのチャヅ〜で、晝の齊座は、引割の素麥で随分枯淡な、ありがたい學林であつた、今では衛生とか何とか云ふ六ヶしい事が出来たので、やれ非文明的の行爲だの、やれ野蠻だのと、世の風潮にたしまはされて、堂々たる専門道場ですら、雨の降る日は托鉢に出ないで、堂内に寐て居つたり、麥ばかりでは記憶力がなくなるの、朝が早いと睡眠不足で營養不良になるの、何のかの小言ばかり云ふ様になつたが、吾々が靈松院の學林生活に比較したら、今の修行の道場は、乞食と華族様ほどの相違があるうかと思ふ、然し人間は、逆境に遭遇して、此の精神を修養して置く事は、必要だと思ふよ、百姓でも、苦勞して財産を拵らへた者は、皆な吾々が雲水中の困難以上の經驗をして居る、此頃も此寺の青龍檀中で田淵と云ふ男が來て涙を流して話しするのを聞くと、私は今の家へ養子に來た時は百姓の道具さへ借りて仕事

を爲る程の貧乏で御座いました、それ故食ふ物も、麥やら芋やらばかりで、米を取る百姓でありながら、米の味を知らない程でありましたのに、今朝も小兒が薩摩芋を喰ふて居るのを見ると、頭や尻に、喰へる處のある物を、ポツポツと放り投げて仕舞ひますので、如何にも勿體ない事だと思ひました、然かし時節が時節なれば是非がありません、東京の萬年町とか云ふ極く貧乏な町では、薩摩芋の頭や尻を喰つて生活して居る人があると云ふ事を聞いて居ります、私共は、まだ〜喰い物を捨て、虚榮を張る程の百姓ではありません、其れも肥料になる處へでも捨てるならばだが、火の中へ放り込むのを見て、實に呆れて仕舞ましたと云ふて居たが、其田淵と云ふは極く律義者で、維新の頃から村役も勤める、村會議員にも、最初から隱居する迄、選舉せられて、此寺の檀徒總代も維新以來今日迄勤めて居る、其れで自分の子ばかり十人あるが皆な無事で、それ〜相當の處へ縁付きて、此村でも今は中以上の御大盡だ、それが薩摩芋の喰い方が粗末であつて、



冥加を知らない子供には困ると云つて、涙をこぼして居つた、其れも決して吝嗇から云ふのではない、若い時から苦勞した逆境の妙味だと思ふよ、伊深の泰龍老師は大根鉢の翌日、庫裡の横手の往來に大根葉が一葉捨て、あつたのを拾ろつて來て昨日大根の方付をした者は誰れだとに請暇(ひまを出すこと)を申付られたが、餘り泰龍和尚の爲され方が、嚴重だと



知客寮へ尋ねられた、それから段々其人を調べて、いよゝく解つたら、遂に其者

云ふので、知客寮、侍者寮、役位の者總掛りて留錫を願ひ出で、「彼の人は、平素綿密(品行の良い事)で修行も出来る人ですから、何卒今度だけは御許しく下さい」と嘆願すると、和尚は恐ろしい顔付で、「ソーデ御座るか、然し綿密の修行する人が百姓の汗せ水しぼつて耕作して呉れた信施を粗末にするとは何のことだ、假令赤葉一枚でも捨て置く様な人は、何が出来ても老僧の處に居つて貰つては、佛祖へ對して濟まぬわい」と云ふて、ごふしても許されなかつたと云ふが、皆是れ逆境と戰つて、道學修行せられた力だろふと思ふよ、ソー云ふ風だつたから、泰龍門下に峩山の如き、大義の如き、晦谷の如き、豪傑が出来たのだろふと思ふが、乃公等は是れを思ふと逆境と云ふた處が又苦勞と云ふた處が、知れたものだ、今の靈松院の學林に、留錫して居つた時分、年に六圓の學資だつた、其れで教科書も買はにやならぬ、入米も爲る(賄料の事)、衣だけは師匠が別に買つて呉れたが、如何に物價が安直な時でも、随分つらかつた、耻かしいことだが、其の時



分は親里も銀行が破産した爲めに、赤貧洗ふが如き有様で、着物一枚の心配も出  
来ないと云ふ始末だつた、或る冬、あんまり寒いので、一枚の絆天を、着物にし  
て貰らいたいと云つて、本光庵と云ふ庵主の處へ持つて行つて頼んだら、絆天に  
裁つてあ

るから、  
着物には  
成らぬと  
云ふて笑  
はれて、



嚴冬三月  
雪のひと  
い彼の寒  
國で平袖  
の單へ編  
絆と、裕

せと今の絆天とで暮らした、夏になると袷の裏表が二枚の單物に化けると云  
ふ仕末で、今思つても涙がこぼれる程であつたよ、其頃岐阜から名古屋迄汽車賃  
拾九錢ばかりであつたが、其れにすら困つて、靈松院から名古屋迄一文なしで歸

つた事があつたが、親々は可愛い吾子が久々で戻つたといふので、自分たちは  
御粥を食して、乃公には學林の食物は枯淡だからと云つて、土鍋で白飯を炊いて  
振舞はれた、乃公は、いかにも兩親に氣の毒でならないから、「お母さん、私はど  
ふも此御飯は勿體なくて戴けませぬ」と云ふと、母は袖を顔にあて、さめ、  
と泣きて、「世が世なら、こんな悲しい事もあるまいに、有爲轉變は是非がない、  
幸に御前は出家の身だから、御釋迦様の御修行なされた事を思つて、どんなつら  
い辛抱もして、ゑらい和尚になつてお呉れよ、ソッとして學林の食物がわるいせい  
か、大分瘦せて見へるから、二三日は、ドンナたいしい物でも御前の嗜な物を拵  
へてあげやうゆへ、安心して遊んでお出で」と云はれたとき、親の慈悲と云ふも  
のはありがたい物だ、こんな貧乏して居ながらも、吾が子の立身するのを樂みに  
して御座るかと思つて胸一杯になつた事がある、田舎の貧乏と違つて町の貧乏と  
來たら、熱い御茶も呑む事は出来ぬ、汁の實の大根が一本五錢だ、それを貳錢五



厘宛二度の御菜にすると云ふ始末、一度湯をわかすには炭が壹錢五厘かゝるの、飯を一度炊くには薪が五錢なければ炊れぬと云ふ様な事を實驗して學林へ戻つてからは、嗚呼ありがたい、勿體ない、斯處に居れば直段を知らずに三度の食事を爲して居るのだ、僧侶の衣食住は縦令い寺の財産にしても、元は信施の蓄積だ、今の學林でも禪堂でも町家の貧乏人が、自計自活の中で、悪る口云いながらも、門に立つて托鉢すれば施して呉れる、何んでも吾々僧侶は、どんな衣服を着用しても、どんな大伽藍に住職しても、どんな美食に飽き足つて居ても、此貧乏人が薩摩芋の尻や頭で生活して居る困難者から、血の出る様な一文二文の信施で生活して居るのだから、物の冥加を思ふて、金品を粗末にしては濟まぬと云ふ事を忘れてはならぬと思ふたよ、又忘れぬよふにするのは逆境と戦つた妙味ぢやと思ふよ

## 一〇 私鉢と木賃宿

其れは貴公の談す通りだ、乃公も先頃信州の木曾へ行つたら、馬籠の永昌が、昔

し話をしたが、ウンあの西澤義明と云つた和尚だな、仲々布教にも熱心で、ソ〜手も能く書く、今では清洲と云つて居る、相當に學問もあり、辯才もあり、修行中仕合せがわるくて、禪堂には居らなんだが、師匠が、古風な人であつたので、ドコトなく禪堂に五六年も居つた程の境界を持て居たよ、御悟りくさい處がなくて、其所信を實行して居る所などは仲々感心な者だつた、其れも靈松院の萬友和尚の感化と本師の薰陶だわい、其の永昌和尚が學林に居た時、師匠から「制間には托鉢を爲して、鞋資を貰らいあつめて、學問をするがよい、獨園和尚は萬里先生の塾に留學中は、每晚按摩に歩るいて、師匠や親元の世話にならずに、學問した人だから、其刻苦光明實に恐るべき盛徳に成られて、明治維新佛教の元勳と云へば、天下に知らぬ者は無い位の人となられた、貴様も師匠や親元を力にせず、學林の制間には、托鉢をしろ」と云はれて、正直に何でも托鉢をやらねば、ゑらい者には成れぬと思つて、或時、知客寮へ私鉢に参りたいからと願つて出た





ら其時分隆兄と云つて意地の悪い男が、知客寮の當番で、托鉢の印鑑を取上げ、  
 暫暇を許して呉れぬから、止むを得ず友人の印鑑を借りて、師匠から暫暇願を貰  
 つて一月ばかり私鉢をやらかした、辻堂へ寝て見たり、木賃宿へも泊つたことがあ  
 るが木賃宿の境界も、一度はやつて見ると面白いよ、乃公も嘗て尾張の津嶋で、  
 近藤祖田和尚と仲間だつたが木賃宿へ泊つたことがある、先づ一晚幾計錢で泊め  
 るかと云ふと、明治二十一年の頃だつたが、八錢から拾錢だ、其宿の入り口には  
 煙管仕換の道具がある、跛足の乞食車がある、裏の方には、小兒のおしめや、お  
 まるや、齒の無い下駄や、炭俵の破れが、寒い時分で、ジメ／＼浸めつて居る處  
 へ散亂して在る、井戸端に便所がある、便所の壁が、半分落ちて、上の方は、壁  
 が白くて中程は赤土で、床の所は竹が出て、扉は板が半分破損して居ると云ふ實  
 に目もあてられぬ其汚らしさ、井戸の水を汲んで、洗足して座敷へ上ると、床の  
 間に軸がある、應擧の石板摺りの虎が鼠に小便かけられて三所ろばかり破れたの



が一軸懸つてある、其隣りに金毘羅様の大札が油紙に包んで、鈴が一所に縛つて首に掛ける様にして紐をつけて釘に掛けてある、其側に雑巾の様な首に掛る囊もある、畳は破れて藁ばかりだ、床の間の隅に虱が微塵と一所になつて二三疋行列して居る、其内に晩食だ、しほがれ聲の婆が「サア〜御客衆御膳だ」と云ふ、どふするのかと思ふと、勝手の方で、金毘羅参りの髯武者、片目の跛足の親爺、兩足棒になつて居る癩病婆などが八九人、膳をならべて、味噌汁に香の物位の御馳走で喰つて居たが、さて其かけ椀、かけ膳、折れた箸と來ては生れて始てのことであるから、咽へは通らず、寢道具は、又布のひら〜して居る綿のある處と、袷の處とがあつて、窓のあいて居ると云ふ四布蒲團一枚であつたから、氣持がわるくて、夜通し寢ずに静座した事があつた、以來修學中、つらい悲しい時には、いつも雨の降る日を托鉢して、尾張の津嶋の此木賃宿に泊つた時の境界と比較してはまだ〜上等だと思つて諦らめて居つたが、人間は何んでも其分に安んじ、其分

を樂むと云ふ事が必要だよ其かと云ふて小成に安んせよと云ふではないのさ、

## 一 一 あまり〜つらい唐辛

投宿につひて談がはづんだから、猶ほ一とつ投宿の談をする、美濃から京都へ往來した人は、江州八幡の東漸寺へ投宿した人もあるだろふ、道人が十九の時前回到談した道中の序ひで天野靜山松下道鳳と都合三人で京都から歸り路に今の東漸寺へ投宿を願つた處が當時の住職は中〜法荷擔の和尚で育英の事にも盡力する人で有つたから投宿などは幾人でも許す、其のかわり野宿同様と心得べしと云ふ前置の口上を聴かして許すすのだ、其れ故へ寒がるふが腹がへるふが小言は云はれぬ譯である、道人が三人で投宿したのは二月十九日頃の極寒の時であつたが、蒲團もなければ食物もない、其れでも宜しくばと云はれて、本堂の吹さらしの處へ、袈裟文庫をならべて、坐禪してすはり込んで居ると、晩食を喰べよと云はれて、庫裡へ行つて見ると、薄いた粥がひと鍋と、旨まひ香の物がひと鉢と其れへ



大土瓶に茶が一杯熱く沸かしてある、其粥も旨ひ、其香の物も旨ひ、旨ひは旨ひが、其粥は軽く三杯喰ふと、モ一無くなる様に、チャンと上手にたひてある、雲水中ではあり、其日の點心は天津の町を托鉢し、三人で七錢ばかり貰らつて、一杯一錢の餛飩を二杯宛食ふて、残り一錢三厘で、焼芋を食ふたのみであるから、腹はもふがつくして居る、其から小僧さんを頼んで、大土瓶へ晩茶のたかわりを貰らつては、香の物を食ふては茶、茶を呑むでは香の物を食ふて、茶腹も一ツ時の腹をこしらわて本堂へ戻つた、晝は凜々と衲衣を引裂く様な寒むひ風であつたが、其風が晩方静かになるとちらちら雪が降りだした、夜八時頃にはボタ／＼と大雪に成つて來たが、廣ひ本堂に行燈の火もなひ處で、三人が宿無し猫の様に寒さうに衣の袖をかき合せてチヨコナンと坐つて居る、そろ／＼腹はへつて來る、茶腹で小便は出る、八丁程南を東海道の流車がピーと泣く様に聞へる、雪隠へ行かうと思つて戸を開けば、暗とも思はれぬ程まつ白ろに雪が降り積つて、風は雪

を吹ひて顔へなげ付ける、息が止まりそふだ、流車が鐵橋を渡る音がゴーと聞へる、嗚呼旅は面白ひと云ふのは錢のある人の云ふことだ、あの流車へチヨイと乗れば今晚の内に親々の在ます名古屋へ行つて、あた／＼かひ餛飩でもよばれて、あた／＼かひ蒲團で寐られるのだが、悲しひ事に本來無一物、早く夜がなければよひがと思つた、其内に小僧さんが薄ひ三布蒲團を一枚と、四布蒲團を一枚かして呉れた、大きな三人坊主に煎餅蒲團二枚では何の詮もなひ、止むを得ず道人と道風と疊の上へだき合に成つて、四布蒲團を靜山に掛けて貰らつて、袈裟文庫や、木魚や磬子を、蒲團の隅／＼へおせて、たもしにして、猫の子が寐た様になつて寐た、靜山は徹夜坐睡してしまつた、今此談を書てさへ寒毛卓立する程の寒ひ投宿であつた、朝も早くから起て、チャン／＼半鐘を打れるので、あわて、木魚を元の座へなほすやら、磬子を引ツくりかへすやらして、雪で顔をぬぐつて御經を讀むた、粥座にも前晩の通り、軽く三杯の御粥で、大方は茶で腹をこしらへて暇乞ひした



が、其日は又非常な好天氣で、雪がとけてグチャ／＼泥路を歩るひて行くど、向ふの方を七味屋が妙な聲で、

あまひ——からひ 七味——唐辛

と云ひながら賣つてあるく、其れが如何にも

あまひ——ひ、つら——ひ 七味唐辛

と、云ふ様に聞へると云ふので、静山が妙な丸るひ聲で「あまーりつらーひ七味唐辛」と云ひ出した、そんなつまらぬ言をしやべり／＼一日あるひて、其晩が前回の半宿りで鳥居本で一夜をあかしたのである。

其から十年目に道人が再び僧堂を暫暇して、又縁あつて其東漸寺へ投宿を願ふ事に成つて投宿帳を見ると、天龍峨山老師、東福の東昱老師、天龍の台嶽老師、相國の獨山老師、紀州の最勝和尚、現國泰の龍水老師など、何れも天下の歴々が、吾れ／＼同様、此寺で、此座敷で、此膳で、此蒲團で、一夜の雲水漂泊の夢を結ばれ

たのかと思つたら、今昔の感に堪へなんだ、然も道人は十年前三人で投宿した、今話す通りに、雪の爲めに苦しみ、二度目の晩は、又雨が降る、覺へず肅然として

十有年前宿此房 嚴冬雪夜學神光

今霄何事又逢雨 滴瀝聲々惹恨長

と云ふ閑忘想と、又題東漸寺雲水記として

一千五百有餘人 西泊東漂雲水人

來往點心投宿客 卷中多是舊知人

と云ふつまらぬ寢言を書ひた、其雲水記が二百枚からの大冊であつた、三杯の薄粥でも、斯く迄多くの雲水に供養するは、仲／＼容易な事ではない。

一一 本師の慈悲

先達紀州の方へ遊びに行つたが、最勝寺の默老や觀福寺の忍老などが、今は立派



な和尚となつて、田邊門中では二人ながら仲々評判がよい、修行した人らしくやつて居るので、乃公も久々で逢つて實に嬉しかった、顔を見ると、まあごをじやと云ふ風で、海雲山月の情に堪へなんだよ。

忍老は關守祖棟と云ふて天龍では柱曆と云ふ綽名のあつた男だつたが、あの忍老は西牟婁郡西富田村の聖福寺に住職して居るが、若氣の至りで、去年は一寸失敗したけれど、幸いに、師匠の御慈悲で無事に濟だと云ふ懺悔談をしたが、誠に師匠のありがたい談がある、其本師觀福寺の今の關守祖梁和尚は、末世に珍らしい、行狀の正しい、道學兼備の懇篤な人だが、忍老が檀中との相談で、愈々嬾を貰らふと云ふ事に成つて本師の觀福寺へ檀徒總代が、其旨御承知を願いたいと言ふて行つたが、師匠は仲々承知するどころか衣の袖を顔にあて、熱き涙に咽びながら、總代人に説諭をして呉れた其説諭に、「今の時節は、妻帯するも、肉食するも檀中の貴殿方が、御承知ならば、誰れに耻ずる處も無い譯だが、私しも不徳ながら、

今日迄無事に勤めて來たと云ふのも、只々妻帯噉肉を慎んで參りましたから、人さまにも和尚らしく、尊敬も受けて居り彼(忍老)も私しの弟子と云ふので聖福寺の檀中も、可愛がつてくださるのじやろふと思ふ、此義ばかりは、御釋迦様や、達磨様が千人揃つて來て嬾持たせよと、御進めに成りましても、不承知で御座ります、祖棟も、學問があるではなし才藝が有るではなし、何にも出來ない其填合せにせめて妻帯噉肉なりとも、慎むで人様に親切にして呉れたらと蔭ながら案じて居たが、まあ住職以來七年間今日迄は、僧堂に修行して居たらしく勤めて居りますから、大勢の小僧の中でも彼れ獨りはと心潜かに喜んでをつた詮いもない、其様な了簡になりましたか、師弟の縁も是限りじや、今迄の綿密も、皆偽せ物じやつたか」と云つて泣かれたので、檀徒總代の返辭如何にと、待つて居た忍老は今この恐ろしい挨拶を聞いて、實にありがたいやら、驚くやらで、早速師匠の處へ、詫に行くに師匠が又泣ひて云ふのに、貴様が今毒藥を呑まうと致す處を、師匠と



して、親として、乃公が傍觀して居られるか居られぬか考へて見て呉れよ、貴様も峩山老師の御世話にも成つたのじやから、何は出来なくても、嬬だけは持つてくれるなど云はれて實に師匠の道情の厚いには感涙に咽んだと、談して居つた。マア忍老も、そんな工合で、今年三十三歳だが、仲々法義を厚く、人我の見を捨て、檀中を濟度して居るので、村の小兒に聞いても、堅田に過ぎた物は聖福寺の和尚様じやと云ふて居る位で、近々檀中の寄附で庫裡の再建も出来ること云ふ模様じや、勤めても慎みたいは女じやのう。

## 一三 羅山和尚の再行脚

近代卓州家の名匠と云へば先づ羅山和尚だど人の云ふ位ひ、高德な道力家だつたが、和尚が久留米の梅林へ住職して、多くの雲水を接待して御座つたとき、或る年有馬公の義玄院様が御登化になつて、巍々堂々たる御儀式で、葬禮が執行せられた、菩提寺の上方であるから、和尚が引導申上られたのだ、和尚も胸中寸絲掛

けすで、自分も道力家のつもりで慎んで焼香せられたが、如何にも莊嚴なる式場で、覺へず、腋の下から汗が流れた、平常の機用も總て用不着であつたと云ふので、大衆に其慚愧談をして、其より毎月肥後の見性寺に御座つた蘇山老師の處へ、七年間通參せられたと云ふが、古人の法に對して慎重なる、求道の爲めには寺務の忙がしいも、世間の體裁も顧みないで、七里もある處を、毎月通參せられたことは實に恐れ入つた話したのう。

## 一四 此處は泣くところ

古人は正直なありがたい處がある、近代で有名な、越溪老師は、天性豪邁な氣風であつたが、維新の頃、大いに在家說法が必用であること云ふので、當時龍關和尚が會下に居つたを幸ひ、始終説教の草稿を書いて貰らつて、彼の豪邁な和尚が、ムニヤ／＼と講座の下で朗讀をやられた、だから、面白くも悲しくも何ともない、或日因縁談の愁嘆の處を讀んで行く内に、傍註へ龍關和尚が、此處は泣く處と



書いて置くと、其傍註も、一緒に大きな聲で、此處は泣く處ど、サツサと讀んでしまつて、聽衆の顔をチロツと見渡して云く、龍關が此談を爲ると、皆の者は能く泣くが私が話すとい向泣かぬのう。

一五 老師様が先へ泣れた

尾洲清州の長光寺で越溪老師の垂戒會があつた時、例の因縁談をやられたが、聽衆には何の事とも解らぬので、皆、ボカンとして老師の顔を見て居つた、すると説教後に老師が或る居士へ「あんな悲しい談を聽いて何故泣かなんだのか」と云れると、居士は「私も泣く筈でしたが、談の解らぬ先に老師が泣ひて御座つたゆへ、何が悲しいのかと考へて居るうちモウ泣けなくなつて仕舞ひました」と云はれた。

一六 ウン〜

今の鎌倉の老師の談しに「乃公が若い時分、越溪和尚の會下で妙心の前管長たりし虎關老師(小林宗補)と同參で尾洲の長光寺へ評席で行て居た時、清見寺の拍禪和

尚が、會中の賀儀に來て、始終清見寺の自慢談しを爲て寺をかぶつて居る、誠にイヤ味のある和尚で、談の返辭は、いつでもウン〜と云ふて居るから、乃公と虎關和尚が、あなたは、誰れと談しをしてもウン〜と云ひますネエと注意したら、ソ〜共清見寺あたりでは、誰れにもウン〜だと云ふゆへ、乃公と虎關和尚とが、今度は拍禪和尚が何を云ふてもこちらでもウン〜と返辭をしてやつたら和尚が怒り出して何んだ貴公等はまだ雲水の身であり乍らウン〜とぬかしてと云はれるから、私しらは誰れの談をしてもウン〜じやわいと云ふてやつたと云ふ事であるが、如何にも、面白い話した。

一七 阿彌陀如來は孫杓子

禾山和尚は若い時分隨分口の悪い人だつたが、雲水中いつでも門徒宗の坊主に逢ふ必とす阿彌陀如來は孫杓子餘さず洩さすくい取るとの御誓願とはチト御慾が深いちや御座らぬか、ワハ、と言ふて冷笑したが、同行しても、其度ひ毎に

老師が先へ泣かれた、ウン〜、阿彌陀如來は孫杓子





實にひやくと思つたよ。(前項の老師談)

一八 禾山和尚の機用

禾山和尚は晦巖和尚の氣風を學んで居るから、時々人の肝膽を寒からしむる様な事を能くやらかして仲々面白い處があつた、彼の大内青巒居士が、四國へ各宗寺院の特請で行つて會場の寺へ着した、各宗寺院は俗人でも布教師として請待したのだから、廣書院へ毛氈を敷いて大いに恭敬禮拜して居つた、處へ今の禾山和尚が出て來て、書院の真中に仁王立ちに立つて一喝して云く、何んじや貴様は、俗人じやないか、居士の分際で、老々大々として、下がれと、怒鳴り付けた處が、居士も亦エライ、是れはどうも失禮致しましたと、座蒲團からすべりおりて挨拶した、すると禾山和尚は大笑して、まあ其れがあたりまいじやと、胸襟を開いて談笑したが、禾山和尚仲々、喰へない和尚じやわい。

一九 ワハ、アとは何んじや

阿彌陀如來は孫拘子、禾山和尚の機用、ワハ、アとは何んじや



もふ一つ禾山の談しがある、禾山和尚が金剛山の福司在番の時、宇和嶋侯の法事が有つたさうだ、いつでも、屋敷の賄係へ、目録を以て、法事の費用を貰らに行くのだが、其が又何時でも、米が何俵では多いとか味噌が貫では多いとか云ふて削減されるので、宇和嶋侯の法事と云へば、福司察在番が損をすると云ふことにきまつて居ると云ふので、和尚は、大袈裟な豫算の目録を持參して、例の通、賄係に面會して、今月何日には、御何代の法事に付きまして、諸入費を受取りに參りましたと申出ると賄係りの士が「何んじや、ウーン、金剛山の法事がワハ、ア」と冷笑した、すると和尚は一喝して「何がワハ、じや、貴公等も其通りに、何んじや、宇和嶋の賄士いめがワハ、アと笑はれたらごんな心持がする、ちと慎んだがよからう」と云ふて、遂に目録の通り、嚙を入れさせずに諸入費を受取つて來た。

二〇 天台笠と頭陀囊

義山和尚の天台笠と頭陀囊は大に評判であつたが、會下の雲水に亦其の形だけ真

似して居る坊主があるのでたかしい、そふ云ふ乃公等も到底先師の眞意は解らぬのだが、義山和尚が建仁寺で五山會議の時、前田誠節に途中で逢ひ、誠節が和尚に對して、「禎兄(義山の諱)貴公も能い加減に足を洗はんか」と云ふと、和尚が、「何んじや、此笠と頭陀が、雲水じやと云ふの乎實は乃公は慾が深いのでなア貴公の様に、右のまい、乃公は其様な不自由の事は、嫌いじや、敵が來ても兩手、人が物を呉れても、兩手じや、仲々都合が好いぞよ」と云ふた談しを、乃公も和尚から聞ひて居つた。





## 二二 形の峩山

其から乃公も、天台笠と頭陀囊さへ持つて往來すれば、人が感心するかと思つて、住職以來、當分は檀用にも私用にも、形の峩山を氣取つて見たが、一休の眞似して和尙逐出されで腹のない乃公等は十人並の風をせぬと、却つて先師の誹謗を招く事があるよ。

## 二三 被布や鞆には逢はぬ

是れも其人は尊き心掛けで、峩山も定中に喜んで居るだらうと思ふが、或る峩山下の一人で仲々、古風を慕ふて、蝙蝠傘や、洋服や、帽子や、被布や靴履く人には逢はぬと云ふ頑固の男があるが、それは其れで好い、どこ〜迄も古風でやるがよい、然かし只西洋嫌ひで唐本でなければ讀まぬとか、今の時節が氣に入らぬから西洋の眞似した汽車には乗らぬとか、大阪へ行くにも、汽船は西洋臭ひと云ふて三十石で下るとか、郵便も西洋の眞似じやから八百文で御飛脚を出すとか、峩

山和尙はそんな馬鹿頑固な和尙では無かつたのに、此人は半面の峩山を眞似して居るのじやと云ふ人があつたが、然し此等の人は末世に得がたい尊い人物じや。

## 二三 天台笠で嬬の處へ

此れは昔し談しじやが、仲々の禪道家で寺持つと直に嬬持つて、夫婦仲好く暮らして居ると、或日其師兄が來て、檀中世話人を集めて、「御前等は、知るまいが、此處の和尙は老師の處で、活如來同様の修業を爲て居つたのじやから、仲々嬬なご持たせる人ではないぞ」と怒鳴り込んだ、すると世話人は平身低頭して、そ、う云ふ貴い和尙様とも存せず、嬬の御世話を致して申譯がないと、嬬に離縁を申込んだ、流石に御悟を開らき、百萬の軍勢にも驚かぬ、千貫の砲彈が頭上に破裂しても、泰然自若の大和尙でも、柔かい白、赤いやさしい女が、惜別一滴の涙には、平常の大機大用も神通の妙智力も、總に用不着となつて、一夜泣明したが、背に腹は換へられぬと云ふので、表面離縁して〇〇町へ、別居さして、例の天台笠と

形の峩山、被布や鞆には逢はぬ、天台笠で嬬の處へ



頭陀袋に、脚絆草鞋で雨の日も、風の日も、嬾の處へ通参したと云ふが此處に到つて形ばかりの禪道家も亦極に達して寧ろ滑稽である、然も其和尚と云ふは、戯談も云はぬと云ふ正直な綿密家であるので一段たかしく見へたさうだ。

## 二四 西國順禮

雲水由來、與世共不進、與世同不退、走る汽車にも、通よふ便利の汽船にも乗らずして、漂々乎と去來自由なるが神機妙用だときめ込で、一蓋の網代笠と、一枚の雨合羽を圓覺伽藍とし、袈裟文庫を本堂に、持た鉢盂を庫裡として、終日行いて嘗て行かすと、やせ我慢にも七寸の草鞋に五尺大の身をのせて、明治三十二年八月の半より、大和、紀州、河内、和泉の四ヶ國を、まるで吾寺の裏庭でも徘徊する心地にて、雪、巖、欽の三同行と云ふ程の價值はないが、同じ穴藏の雲水連にて、三十三所の救世殿を順拜する覺悟で、元より衆に求めず法に求めず佛に求めず、只是の如く順拜したが、十ヶ所の難所は濟まして、九月の十六日に一度嗟

峨へ歸つたところ、丹波の惠鶴老兄、豊後の豊山老兄は國元よりの用事が出來て、あとの二十一ヶ所は後の樂みにして置くとの事なれば、予は孤雲漂然、再び天龍を辭して、其日は妙心の靈雲に投宿し、あけての十七日は京市中にて旅の用意なごとのへ、俗縁なる木村孝則の宅に宿つた。

十八日晴、東福寺宗務本院に、故恭宗和尚を訪らい、明暗教會の虛無僧認可證を請受けて、ホル〜と片言まじりの曲を奏し、鞋資に困難せし時は、ホル〜と托鉢よりも興味あらんと、笑つて恭宗和尚と通天橋畔の水聲を聞いて、且つ吹き且つ談じて定に入りしは夜半の十時であつた

受てまつ手をすれ〜に散る楓

はせを

十九日曇天、六時頃、恭宗和尚へ別れを告げて出で立ちぬ、月輪殿下兼實公の御廟を拜し、皇太后陛下御好みの庭なる寢覺の瀧を、朝日橋渡りつゝ右にながめ、皇室歴世の靈牌所なる泉涌寺を拜禮して、今熊野てふ十一番の札所に納經して、





門前の順禮道を東へ差して二丁程上り、三丁程東北へ下れば、<sup>〇</sup>迂<sup>〇</sup>り石街道なり、  
其より、花山寺を禮參す、花山寺の南に、花山法皇御落飾の舊跡と記せる古色蒼  
然たる華頂山元慶寺てふ寺あり、是なん前太平記に、一年去り月往くも弘徽殿の御  
事覺し忘るゝ隙もなく彌増に成る御煩襟に夜の御殿にのみ引籠らせ給ひ萬機を聞  
し召事もなく時を得て咲く花の色香も艶に綻びたるも朕が憂を知らざるやと強顔  
ものに思しめし、

色香をば思ひも入れず梅の花

常ならぬ世によそへてぞ見る

と御口吟ありけるも、御悲みの數々なるべし、彼の菩提の爲にもとて、晝夜不怠  
讀誦在けるが、彌々發心日々に進みて、本意を遂させ玉はんと思召し設けたれ共、  
近臣の諫を憚り思食て、終に御色にも出させ不給しが、斯て失せ玉いし人の其月  
比日比共なりしかば、佛事供養營せ玉い、寛和二年六月二十二日の夜半、一天萬



乘の帝は、泥土の途を御徒歩にて、藏人道兼と僧の嚴久ばかりを召れ貞觀殿の小門より、密かに出御あらせられし」てふ舊跡かこ、いと古への偲ばれて、萬感雲の如く湧きぬ、花山寺は又大圓寶鑑愚堂國師の塔所にして、住職塔主もなく、見る影もなきありさまに荒れはて、是れが白隱正宗國師の法祖々父にして、時の太上天皇後水尾院の玉座の側らに、鼯聲雷の如く困睡して天下を驚かし、後西院天皇の勅詔を蒙り、禁闕に於て吾宗門上の大事を拈奏して

夫○一○大○事○因○縁○ハ○輕○紅○輕○襪○地○ヲ○踏○ン○テ○痛○ミ○ヲ○怕○ル○ノ○論○ニ○ア○ラ○ズ○直○ニ○須○ク○深○ク  
 容○信○ヲ○發○シ○テ○著○實○ニ○省○察○シ○玉○フ○ベシ○自○然○ニ○道○德○ノ○域○ニ○到○ラ○ン、伏○シ○テ○冀○ク○ハ○廣  
 大○ノ○慈○心○ヲ○恢○弘○シ○テ、億○兆○ノ○黎○庶○ヲ○覆○燴○シ○玉○ワ○ン○事○ヲ○若○又○高○ク○尊○位○ニ○居○シ○テ○日  
 用○專○ラ○驕○倨○邪○僻○ノ○情○ニ○任○ズ○ル○ト○キ○ン○バ○則○チ○其○地○獄○ノ○業○ヲ○感○ス○ル○殆○ド○卑○賤○ノ○者○ニ  
 劣○リ○玉○ン、譬○ヘ○ハ○高○ヨリ○墜○ル○必○ズ○命○ヲ○殞○ス○ル○ニ○而○モ○低○キ○ヨリ○ス○ル○者○ハ○此○累○ハ○鮮  
 キ○ガ○如○シ

と、一天萬乘の君に對し奉りて、勁正如上の進講せられ、帝は肅容拳々として深く以て然りと宣らせ玉いしと云ふ吾門不世出の英傑なる愚堂國師の本瑞塔である乎と長嘆大息焼香參禮し、敗れたる主なき本堂の椽に予は袈裟文庫をわろして、靜坐すること多時なりき。

二五 引づり出す

予は天性魯鈍にして修道の爲めには馬鹿な無駄骨を折つた、然かしまあ始めの間が、正直で、ありがたい可愛らしい處がある、天龍へ最初掛錫した當時、愈々明後日から大接心と云ふ時、嵯峨の獨山法兄と、紀州の叟兄と予と三人で、麥頭を勤めた(一日に三人にて五斗の荒麥を擣きあげる作務)、其時予は獨山法兄に諮問した、「何んでも大接心になると、直日や、侍者寮が引づり出すと云ふが、綿密に勉強する者を引づり出す乎、放逸にして懶惰の者を引づり出す乎」と、法兄答へて云く、勿論放逸にして懶惰の者を引づり出して參禪を激勵すと、それで愈々明



朝から大接心と成つた、新曆十一月十四日の晩、入制の茶禮やら其の垂誠を聞いてから、恰ど舊十月の五日頃で、鎌を磨きすました様なすこい絃月が、嵐山の頂きに輝いてをる、臥單に就いてから、予は雪隠の裏へ出て、丹誠を凝らして、天地に禮拜して、三世の諸佛と天地の神靈に祈願した、「私しは性來小智小根でありますから萬一此大接心に、發明する處がないと、到底禪宗坊主では居りませぬ、必ず生涯をあやまりますから、ごうぞ悟らしてください」と云て、天地に參拜した、實に今思ふと、自分ながら涙がこぼれる位だ、毎晩天地に其通り參拜しては大方丈裏の曹源池へ行つて、巖上に夜座して、晝は堂内で大衆と同じく綿密に骨折つた、處が、獨山が例の引づり出される方で、能く見れば刻苦勉強する者だけを最も厚き道情を以て、直日が引立て呉れるらしい、其から愈々辛苦し、愈々勉強して靜座工夫したが、仲々出來ない、然し新參の内から、あゝ骨折る氣になつたのは獨山法兄の賜だつた、予は引づり出されまいと思つて一生懸命に骨折つて其が爲

めに却て引づり出された。

## 二六 道友の力

予は誠に懶惰で、禪僧には最も忌む處のヲシヤベリであるので、誠に役位の老兄たちには惡まれて、席順なども、末單の方にはばかり置かれた、其時分には殘念だと思つたが、修行するには誠にありがたかつた、紀州の默老と云ふは、仲々願心の堅固な男で、一棒に打てども願みぬと云ふ實着な落着いた性質で、そうして極く寡言な、名の通りの默老であつたが、あの默老と、予は非常に意氣投合して、毎晩御互いに起し合ふては一と冬九十日、如何なる雨雪の夜でも、解定カイテイ(消燈臥寐)後に山へ行て十二時過ぎまでは、必ず樹下石上で練丹した、覺へず昏睡すれば、互ひに起し合ては、古人の刻苦せられた談をして、今一と座り靜座しやうかいと云ふては相提携し、相策勵しては骨折つたが、仲々見性も成佛も迷も悟も何んにも譯は分らぬ、只日夜、直日と、老師に、怒鳴られては、打擲されるばかりだ。



道場に四五十人程長連床に膝をならべて居つたが、チャアン、チャアンと云ふ參禪の喚鐘が鳴ると、黙老が又引づり出されて泣きながら入室するだらうと思ひ乍ら見て居ると、黙老は又予の方を振向て顔見合せて泣く、嗚呼なせ斯ふ出来ぬのだらう、どうして悟れぬのだらうと思ふと眞に熱い涙が流れて、衣の袖の濡れるも知らぬ位いの事があつた、そうして黙老や俊老が、蔭に陽に予の爲めに、訓誡して、呉れた道友の情は今も忘れぬ。

二七 大堰川の氷中に座す

愈々其冬制、雪安居も、末へになり、入制、臘八、冬至、制末と段々大接心の度毎に、激勵され憤發もしたが、何の得る處もない、今度の接心が、もう泣き分れと云ふ制末の大接心には、何でも大事發明致さねばをかぬと、熱烈な願心で、なかに勇猛の衆生の爲めには、成佛一念にあり如何な一念が隻手音聲か、泣く一念か、笑ふ一念か、擧手の一念か、下足の一念か、揚眉瞬目、一々、隻手音聲、…

……と念佛

婆が唱名する様に  
口に唱へ、心に念  
じ、内外打成一片  
盡乾坤只這の隻手  
無聲の音聲と、理  
屈は分てつ居ても  
さあ隻手音聲をド  
ウ聞たご云れるご  
直に講釋をならべ  
ては叱られる、實  
にくやしい、悲し\*

大堰川の氷中に座す



\*い、いまし

い、殆ど狂者の  
如きありさまに  
なつて、美濃の  
道兄と黙老と予  
と、モー五日も  
六日も、晝夜座  
り通したからば  
けて仕舞ふ、或  
晩、嵐山の麓の  
大堰川へ行て、  
新曆二月始め、  
五一



大寒の頃で、身を裂く様に寒い、何と憤發しても昏睡するので、真裸體に成つて、川岸の氷の中へ、腰から半分入れて、ウーン／＼と、うなりながら座つても其れでも昏睡する、實に予は聲を揚て泣いた、予は十歳の頃から因縁あつて、この公案を授けられ、以來十年多少打座修禪せざるにあらず、嗚呼予は禪僧にして禪を知らずんば荆棘にいばらなく、唐辛の辛味なきが如し、如何にせば、這箇の妙道に悟入するを得んやと、此位いの苦るしみ誰れでも、やつて居るのかなあ、彼れをして涙を流さしむれば、滄海も亦乾きつべし、曾て霜雪の苦に慣れて、揚花の落つるにも亦驚くと云ふは、適箇の境界だと思つたよ。

## 二八 隻手ウー

是れは伊深の禪窟の談したが、獨り馬鹿正直な雲水が居つて、何でも口の先で隻手ウー、隻手ウー、と云つて居れば悟れると思つて、眉に小皺を寄せて、始終隻手ウー、隻手ウーと云ふて、或日大接心中に食堂へ出頭しても例の通り口の中で

云ふて居た、其日は供養があつて、美事小菜が、ズラツト食卓に盛り分けてある、其れを隻手ウー、隻手ウー、と口の中で云ひながら顔をしかめて、小菜の成るべく盛の大きいのを、さがして居つたと云ふ馬鹿な談があるが、何處の僧堂にも大勢の中には面白い人がある、然し皆な、無心にし雲岫を出ると云ふ様な雲水中の境界は實に潔白なありがたい處がある。

## 二九 獨りを慎む

若い時分の談しは随分面白い事がある、乃公が美濃の靈松院の學林に居つた時、貞兄と云ふ三河の人で、非常の綿密家で、感心に勉強する人が居つた、或時暗夜に、乃公がまだ新到の頃だつたが、雪隠へ這入つて居ると、衣を脱がすに小便して居る様子だから、大聲叱呼して、誰だ衣着た儘小便する坊主はと怒鳴つた、するとチビ／＼と爲掛た小便を中止して逃げ出した男の後ろ姿を燈影にすかして見れば親しい今の貞兄だ、覺わすくす／＼笑ひして許してやるから、其儘やれど



小聲で云ふたら、あとで貞兄が云く、あれが貴公であつたから、また幸福であつたが、職員に見付られたら、詫び様もない、暗夜人なき處も、君子は其獨を愼しむと云ふは此處だなど云つて、三嘆した事があつた。

## 三〇 禪狂僧

白隠和尚の會下にも、有名な氣狂い知識が二三人あつたと云ふ事が荆棘叢談に書いてあるが、乃公が天龍に居つた頃、毎年冬になると必ず一人は氣狂が出来た、嵯峨の様な、彼の時分の修行の仕方では、氣の小さい者は、氣ちがいにもなりそふな事であつた、殊に臘八接心などは、師家も役位も雲水も、皆眼をすへて青ざめてかゝつたものだ、七日七夜は、兩便へ往來の外、寸歩も外出は許さず、皆一同、口は、偏團の如く眼を銅鈴の如くにして、晝夜六返宛の參禪には、直日と侍者寮が、惡鬼羅刹の如くせめたてる、入室すれば、和尚がウーンと云てうなりながら、棒を振りまはす、扱て腕力ならば勝もする、理屈や辯舌ならばわくれは取らぬ、が、

読み書きならば此坊主等、師家も役位も一と呑みだぞと、併呑して威張つて居る大學者でも、此處に到つては、チユウの音も出ぬ始末だから、恐ろしい處があるのさ、實に明惠上人の慈訓の如く、「光る物貴くば、螢玉虫貴かるべし、飛ぶ物貴くば、鵝鳥貴かるべし、不食不衣貴くば蛇の冬穴に籠り尾長虫の裸かにて腹這い行も貴かるべし學生貴くば頌詩を作り文を暗誦したる白樂天小野篁などをぞ尊むべき、左れども詩賦の藝を以て、閻老の棒を免るべからず、左れば能僧も徒事なり、更に貴むに足らず、只佛出世の本意を知らん事を勵むべし、文盲無智の姿なりとも是れぞ梵天帝釋も拜し給ふべき」じやと、禪道の修行は、まあこふ云ふ處があるが、人我山の如き世間の學者や、拔山蓋世の豪雄でも手も口も出せぬ、其出せぬ處から、啼くよりは隻手を出せや杜鵑とせめたて、遂いに自ら大機大用の活作略を證知せしむるのだから、其でありがたいのさ、又其れ故に、道の爲めに、身をやつさば、眼をもくじり、鼻をも切り耳をもそぎ、手足をも斷盡すべし、佛



祖不傳の妙道を、修得せんと思はと、殆ど狂人の如くに迄、骨折らにや、仲々妙味が手に入る物ではない。

斯くて、或る年の冬の一夜、大きな聲で、禪堂の方から雪峰々々と怒鳴つて来る者がある、(乃公は當時典座を勤めて居つた\*



\*が竈の前へ来て、「雪峰さんは、どうも御苦勞様でした、さあ〜、是れから私しが、典座を致しますから

今日は緩る々々御休み下さい」と云つて、頻りに、大釜の下へ火を焚いて居る様子だ、障子の影からのぞいて見ると、それが〇〇大學を卒業して人我山の如き、〇〇

と云ふ坊さんで、接心中峩山老師にせめたてられて眼見耳聞の學藝知識は總て間に合はぬし、末世に我程豪い坊主はない己れこそと云ふ洪大なる鼻柱を撃摧せられて、驕心慢心一時に變化して、發狂したのだ、目をすへ込んで、腰掛に腰掛けて、昔しの大將が陣中\*を濟度して呉れんか」と云ふと、オイ来たど飛出して、靜兄は、其狂僧の大坊



の様な體裁で威張つて居るから、乃公は同寮の靜兄と云つて、是れも一寸のぼせて居る坊さんだつたが、それに向て「靜兄々々貴公さん是非彼の氣違い



主を一喝して、邪魔だッのけッと云ひながら、腰掛から引摺りたろして静兄がチヨンと腰掛けて又大威張になつて火を焚きながら、すまし込んで居る、すると今の大狂僧は暫くあきれた風をして見て居つたが、傍らに有つた薪で、静兄の腦天を骨も摧けよと、一棒打のめした、今迄威張つて居つた静兄も、何かは以てたまるべき、あゝ痛い〜と云つて逃げ込で来た時は、麻谷と臨濟の商量よりも恐ろしかつた、其晩乃公が狂僧の見舞に行つて、静兄の頭が、腫れたぞよと云ふたら、大狂僧すまして曰くいや〜腫れる譯はない凹んだ筈だと答へて居つた、此狂禪僧は今は今仲々修行も出来て、一方の重鎮と成つて居るが、眞實求道の爲めには、二祖斷臂のためしもあり、慈明引錐の例もあれども、今時の冷靜な浮薄な世の中から見たら皆な狂體と云ふだろふ、然かし斯道の爲めには、こんな尊い氣狂が、ごし〜出世して天下の人の頭を凹ましてもらいたいものだ。

## 三二 説教師

説教師と云へば、臨濟宗では、不品行な、藝人坊主の代名詞と成つて仕舞つた、中には人格の高い碩學篤行の人もあるが、先づ〜役者のこはいろ説教で、爺婆にただてられて、高座の上では、活如來と仰がれて居るが、扱て其教場を辭して、二三里も行くこと、も一通力を失なつて、破廉耻の所行をして、今迄の活如來が、魚を食ふ、酒を呑む、姦通罪を犯す、いやはや御話にならぬ人が多いので、禪門の説教師は破戒僧の代名詞となつて仕舞つた、乃公もまた其の説教師と云れて居る仲間だから、こふ云ふ小言を云ふ資格はない、然し

## 三三 老師

の尊稱も、稍々説教師と同様に成つて、乃公の舊知にも大善知識が麻の如く粟の如くある、此頃も或る法會へ出頭したら八十五人ばかりの僧侶の中に大善知識が十八人ばかり御回向だ、其十八人の中で、僧俗共に歸依偈仰する人は三人半位で、爾餘は一々印可證明とか云ふ物を、人に見せなければ承知せられぬと云ふ老師



許りだ、其れが又老師々々と呼んで貰らい度いので困る、吾々如き凡僧の目から見ても、たかしい位だから、天下具眼の士人が見たら、さぞ抱腹するだらふと思ふ、昔しは皆大事了畢の後ち、大燈の橋下十五年、關山の伊深に七年、白隱和尚の松蔭時代、何れも馬鹿にされて、馬鹿になつて、上求下化、和光同塵の眞境界を長養せられた結果殊勝求めざれども殊勝自然に到来し、遂に其徳天下の王公を奔走せしむるに到つたのだらふと思ふ、貴公も此頃御知識サンに成つたと云ふが、どうか、いそがすに、道德の其身に充實するを待つて、知識風を吹かして呉れや、第一御師家様の名を汚がすからのふ、此徳ばかりは腕力でも理屈でも勝つ事は出来ぬぞよ、明恵上人の傳記を読んで見ろや、高峰和尚の行録などもそうだよ、山の中へ這入ても、雲袂が梯を掛けて巖穴に參禪する、孤島に隠棲すれば師に糧食を献して、自己は斷食して七日七夜長座不臥、以て弟子とやらん事を請ふて止まらず、是非なく入室を許すと云ふ風であつた、古人法を護惜する斯の如く、求道の

念厚きと斯の如しだ、貴公等の様に、道學兼備の人は今の時節に決して、世間で捨てゝは置かぬから、是非馬鹿になつて、稲光晦跡して、必ずあわてゝ虚名を賣らぬ様にして眞實求道の人を待つて呉れや、そふ云ふ乃公は實に未得信證の大罪人だが、貴公様等は、いやしくも大善知識じや、どうか説教坊主の心事の陋劣な吾れゝ如き凡僧に笑はれぬ様にして呉れや、こないだも乃公が御世話に成つて居る老師に、此頃の様に老師々々と、尊稱をむさぼるいかさま老師が出来ると眞箇の宗匠はまた、稱號を代へにやあ、たかしな者ですネと云つたら、師云く、老師と云ふ事は、耄老した常識のない坊主だと思つて居ればよいはサと云れたがそんな事になつては、誠に嘆げかほしい事だよ。

### 三三 麥粥の交情

談は色々に轉じるが、此頃鈴木信仁居士に、東京で逢ふたら、貴僧も天龍に留錫して居ましたななど、巖山和尚の談がはづんで一日遊びに來いと云ふ事に成つて



一と晩饗應にあづかつた、會合した者は駒込の勝林寺和尚と田中敬宗、由理玄雄の兩禪客と、紀州の堂前無關居士と、もふ一人は元の代議士阿部と云ふ人と乃公と、主人と都合七人だ、何れも、麥粥食ふて、同じ道場で同じ師について同じ棒で打れて、同じく泣き、同じく笑ふた仲間じや、なんでも道情の交誼と云ふ者は、世間の交際と異なつて、實に言外に親密な處がある。

信仁居士の宅は、谷中の天王寺町で、極めて静な處ろだ、床の間に、峩山の軸が掛てある、棒の畫に道得三十棒、不道得三十棒と云ふ讀がして、格別太い棒で、珍らしい上出来である、一同其席に通るや否や、やア〜何んだ今夜は後ろに峩山の棒では油斷が出来ぬぞなど、挨拶もまあそんな事で濟んでそれ〜座に着くと、主人が云く、今日は天龍一流の料理を振舞ふと云ふつもりです、然し麥粥ではないから安心して下さいと云れて一同が笑つて胸をなせた、是れは一と年、先師が道生會へ招かれて東上のみぎり、隨行の祖讓和尚が傳授して呉れた料理法であ

ると云ひながら配膳せられた、一同も身に覺へある御馳走じやと、舌鼓し歎を盡して道情を温めだが、

### 三四 優待されて油斷がならぬ

と云ふ面白い談しを聞いて大笑いを致した、居士が初めて、天龍へ修行に行く時、禪堂では随分、ひどい食い物に、ひどい仕事を致さねばならぬと聞いて、無錢旅行をして道中の修行を致そふと云ふので、流車にも乗らずに寺へ投宿を請ふて、姓名も隠くして参りましたが、中に不實な和尚もあれば、又親切な人もあつて面白い事がありました、京都迄の道中で、一番實情を以て投宿を許されたは、靜岡寶泰寺で御座りました、其頃の住職は長谷川惠徳和尚でありました、其から一番滑稽であつたのは清水の何とか云ふ寺でした、法華宗であつたが、上人も梵妻も非常に親切にして、チャホヤ云ふて呉れるから旅の疲れもあり、着物も汚れて居りますので、頻りに滯留を勧められるまゝ、洗濯などもして呉れたから覺へず



二日ばかり逗留した、愈々出發致そよと、上人や梵妻に寸志を包んで差出したが、それはくゝと喜んで受取りながら、宿屋の勘定書の様な物を出した、見れば、一つ宿料金何拾錢、一つ洗濯賃金何錢と書いて、「手前共では夏に成ると下宿を致しますから、へい、エー、又いつでも御通の際は御立寄を願います」と云ふて、如何にも呆れた事がありました、宿料取られる位なら、私しもへい、くゝとあんまり御禮を云い過ぎたと思つて如何にも滑稽でした、然し雲水旅行と云ふは實に面白いものであります。

## 三五 ヤア達者か

ヤア達者か貴公と別れてから何年目じや、そふか、モ一十五年目か、久しぶりじやのふ、天龍に居つた時、托鉢や日供米集めに、點心場の好いの悪いのと云ひ乍ら、麥粥食ふて居つた様な、奇麗な境涯は又とないのふ、然し、まあ達者で結構じや、やはり嬾は貰ふたか(頭掻きながら答ふ)ウン貰ふてのふ兒が三人ある、女子

二人に男子一人じや、さあこふなると困るぞよ、こふして紫衣で俗人の前は誤魔化しても、寺で佛作の赤兒が三人も四人も、出来ては仲々、今日の活計が骨が折れてのふ、到底布教するの僧侶らしく勤めるなご、云ふ事は六ヶ敷くて、檀中の前へも自然御世辭も云はにやならず、吾等の様な吳下の阿蒙では、やつぱり獨身で居つた方が得策であつたわい、其れは寺に財産があり、自身に活計の出来る僧侶はいざ知らず獨の方が坊主は安樂にやれると思ふわい、貴公はドウカ單丁獨弄で法の爲めに盡して呉れよ、

イヤ己れも貧乏寺で嬾を養ふ財産はなし、坊主以外に内職は知らず、仕方がないから、今日迄は獨身でやつて来たのよ、然しまだ己れも切れば血が出るから鮮妍たる美人を見れば、マサカ鬚坊主の貴公と話しするより好いからのふ、死ぬ迄にやドンナ大失敗を仕出來すかも分らぬぞよ。

## 三六 西笑の傘一本



昔西笑と云ふ和尚は、叡嶽の文殊院に住持して好んで楞嚴經維摩經を讀み、又爾雅を樂しみ天性迂愚にして、詩と酒とが道樂で、下山すれば必ず梅辻春樵と云ふ儒者を訪らい、詩話寢食を忘れて遊び、歸院すれば晝も閉戸して讀經三昧、他更らに世事

を顧みぬ  
と云ふ高  
潔な上人  
であつた  
が、其頃\*



叡嶽の  
僧侶は  
只驕慢  
にして  
讀經讀  
書する

者はだゞに罕れなるのみならず、高木風に折らるゝで、世故に迂愚なる西笑は他の墮落僧の嫉妬を受け遂に「西笑色を好みて破戒せり、宜しく傘一本を與へて之れを追放すべし」と誹謗衆議す、嶽僧の醜評を受ける者は虚實を論せず傘一本を與へて

追放するが先規の嶽戒では是非がない、西笑元より大衆と齒せず、甘じて傘一柄を受けて去る、後ち京都で、彼梅辻春樵先生に逢ふた時に「師は好色破戒の誹謗を受けて嶽戒に依り傘一柄なりと果して信乎」と問はる、答へて曰く信なり、又問ふ今住する處に妻妾ある乎曰く無し、又問ふ然らば何の色をか好むや、曰く凡そ色は春化より艶なるはなし秋葉より實なるはなし、花の艶は嵐山に如くなし、花の美は高雄山に若くなし、豈管に花と葉との色のみならんや山水に山水の色あり、煙霞に煙霞の色あり野嶺皆之れを好む紅裙紫袖の妖童は以て春花秋葉に比す可し峨眉翠黛の娼婦は山水煙霞の色に異ならず西笑最もこの色を好んで擇ぶことなしと春樵曰く師今嶽を去つて江湖に放縱す何ぞ公々然と妻妾を蓄へざるや、西笑佛然として曰其は是れ姪を好む者にして色を好む者にあらず、女子を視て耳目を悦ばすは是を好色となす、女子を蓄へて行を穢がす是れを淫を好むと爲す、衲未だ嘗て淫を好むことあらず、唯だ色を好むのみ、苟しくも淫を好むのみなれば安ぞ必



す嶽僧の爲めに追放せられん嶽僧は色を好む者甚少にして、淫を好む甚だ多し、淫を好む者は口之を言ふを慎みて唯だ人の讖破するを恐る西笑の好色之に異り猶ほ山水煙霞を好むが如し然れども好む所の事公然衆人廣稠坐の中に於ても其色を看て眼に喜び其聲を聽いて耳に楽しむのであると云ふ昔話があるが、西笑は仲々面白い和尚だつたなあ。

## 三七 ケロツクな

先頃乃公の所に大學の書生が来て云のに、今の自然派だとか、肉慾派だとか申ますが、實際東京邊の風俗は御話に成りませぬ、ドウモ吾々血の湧く青年は注意しても血迷い安くて困ります、どうか、修養に資する訓誡を承りたいと云ふから、左様か乃公も青年血氣の頃は随分妄想もかわいたが、達磨禪經の不淨觀品などを拜讀するが好い又鮮妍たる美人も見ただけは決して悪ふはない、然し手には取るなよ、乃公は錦魚が大好きで、池に蓄ふてあるが、彼の水の中で、赤や、白や、

尾の長い奇麗な魚が西に東に、悠々自適、浮いたり、沈んだりして遊んで居る様は實に可愛いうつくしいので、あまり可愛らしさに、手へすくいあげて見て居る間にピク／＼片息に成つて死んで仕舞つた、ソーシテ乃公の手も臭くなつた、人にも笑われた、可愛そふな事したと妄想が増した、然うじや／＼、錦魚を見る様な積りで、世の美人を見て居れば、大間違ひはなかるふと云ふたら、其書生は深く感ずる所があつた風をして歸へつたよ。

貴公も嵯峨に居る時は釋迦も達磨も倒退三千する勢で、乃公を叱り付て、やれ諸佛頂上の禪を修行する者が何んじやいととか、托鉢の戻りが遅かつたと云ふて貴公は乃公を大衆面前で赤耻かゝして、何の妄想錯亂して難用心するか、純一無雜にやれとか、昏鐘から開板迄は死きれとか、修行中に骨折て刻苦して置かぬと寺持つて失敗ぞなご、大言壯語以て乃公等を殺活自在にして引立て呉れたじやないか、其れが何んじや、貴公の今の有様は、乃公の様な凡僧が見ても氣の毒に思



ふぞよ、然も貴公は誰やらの室に入て其堂奥を窮め、其蘊奥を盡し、立派な印證とか印可とかを貰つて、大善知識だと云ふではないか、まあ耻を知れ、何に……何れの御知識も内密犯を爲して外持戒を表して居る……ウ……ン馬鹿ぬかすな、其れは明道の知識にして行道の人ではないわい、貴公が雲水中の元氣を自分にも顧みても解るだろふ、ウン何んじや幾許の修行しても其の忘執が取れない……取れなければ何故取れる迄修行せぬ、馬鹿坊主めが、其忘執の取れない者が何んじや、老々大々と素人に向つては大法螺を吹いて居ると云ふ話だが、貴公が若い自分乃公に御垂誠食わした事があるぞよ、忘れたか、世間の經濟に熱心な者は妻子の愛情も忘れて金錢の増殖を樂む者じや、況や諸佛頂上の禪を修する者が婦女子の爲めにケロくする様で、何の修行が出来る者か、何の道力が充實する者かなぞ、鹿爪らしく云ふた事を忘れたかや、如何に大事了畢の人でも、一點の隙間があれば破戒墮落するは不思議とも思はれぬが、釋迦如來も云れた事がある、

持戒の者は大海を渡るの浮囊じや、針頭程の穴があつても、煩惱の水は浸込んで遂に沈没するからと、一點の油断なく、正念相續の大事を訓戒してあるがのふ、乃公の様な田舎の馬鹿坊主が何を爲た所が、雲助が酒呑んで愚圖を云ふと一般で、墮落しても世間では怪まぬが、もふ兎に角貴公は天下の宗匠じやないか、御鉗鎚を受けた諸方の宗匠方へ何の面目がある、何卒雲水中の元氣と、尊ぶべき行業のありし事を回向返照して呉れや、又諸方の宗匠が、悉く内密犯を爲して、外持戒を表して惡むべき舉動である云ふなら、何故貴公は獨り内外表裏なく、八面玲瓏玉の如く、一點の妄想なき玻璃瓶の様な大善知識とは成らざりし、其様な事では、傘一柄で織僧に追放せられし西笑のフンドシも擔けまいよ……アー犬がすき乎、藝を仕込なら初めが大事だぞよ、始めにワンと、分明に啼かない間に可愛そうだと思つて菓子の片切れでも與へると、もふ其れが病いに成つて、何としても、分明にワンと云わずに和尚の面付を見て尾を振たり、ウー位の事でワンとも



キャンとも徹底せず、腹さ飽けば大事了れりて寝て仕舞ふからなあ。

## 三八 咄這馬鹿坊主

此頃も久さくで獨山法兄に逢ふて一と晩海月山雲の話をしたが、乃公は獨山和尚には怨みも思もあるので、尋常の知友とは一層面白い話のはづんでのふ、いや仲々今時に得難い和尚じや、殊に先賢古徳の風を慕ふて、行業綿密にして、書畫に工み又詩文に妙を得て、誠に文武兩道の達人じや、或人が獨山和尚なあまり頑固だから、もう三年程女郎買の修行さしたいと云ふた老居士があつたが、獨山を贊嘆して餘りなき語じや、面白い評語さ、其暗和尚の談に、彼八幡の伽山和尚は行業純一で道徳天下の王侯を奔走せしめた人であつたが、極く記憶のわるい人で、東京の東禪寺で、或る大名の葬式に大導師を頼まれて、前日から七言絶句を一首作つて、一生懸命で暗誦して居つた、侍者の小僧も聞覺へで暗誦する位であつた、愈々葬式と云ふ時に、或る候爵とやら伯爵とやらのことだから、仲々利口そ

ふな學者も政事家も、奇羅星の様に參列して莊嚴なる式場で、前日から暗誦し置いた偈頌を二句迄唱へると、轉句からさつぱり忘れて仕舞つたので、和尚は、侍者に向つて、其から何と云ふじやと尋ねた、侍者も呆れて、存じませぬと答ふるや否や和尚は、大偶一聲、ウーン、這馬鹿坊主めが、と怒鳴り、左右を顧視して平然と焼香に行れたと云ふ逸話をしてから、二人りで徹夜朝迄一つ話をしては咄馬鹿坊主めがと云つて共に呵々大笑して別れたが、伽山の馬鹿坊主と侍者を怒鳴り廻わした其心地はドラじや、侍者が馬鹿坊主か、伽山が馬鹿坊主か、列座の客が馬鹿坊主か、棺木裡の亡者が馬鹿坊主か、分らぬ處に馬鹿坊主の利口な處が見へるのが實にたまらぬ面白い馬鹿坊主話だ、以來獨山老兄と文書の往復には、末尾必ず咄這馬鹿坊主、と書いて居るが、嬉しい處があるぞよ、ウーン馬鹿坊主めが。

## 三九 あたい是れで三つ

咄這馬鹿坊主、あたい是れで三つ



貴公と嵯峨に居つた頃、松岩寺に愛らしい御小僧が居たなあ、正月元旦に歳旦の詩を管長の前で童也、今年七、未知歳旦詩と幼少ながら大衆面前で臆する色なく吟聲高く唱へたと云ふので皆が可愛がつて居た、或時乃公と石井台巖和尚とモウ一人は記臆して居らぬが、慈濟院で麥頭を仕て(五斗の荒麥を麥粥腹で擣あげる)、腹がへつてたまらぬので、麥手餅をば、雲水中の血の出る様な錢で三人で十錢買つて来て食ふて居つた處へ今年七つの愛らしい小僧が遊びに来た、いかにも小兒だからほしそに見える、三人に十箇あるから、一つ小僧にやれと云ふので、一つやつた、あと三つづゝあるなあど、互に楽しんで居ると、いつの間にか小僧が出して食ふて居た、數が足らぬので、貴公は幾箇、乃公は幾箇と尋問して居ると、横合から、あたい是れで三つとぬかした時は、今の代議士に成り度て運動して落選した候補者よりも不景氣な顔付で、三人が顔見合せて泣かぬばかりであつたが今思ふと可笑いが笑ろふ處じやなかつたぞ、あの小僧が此春丹後の天橋山の大法



あたい是れで三つ

童也今年七  
未知歳旦詩

アタイ是れで  
三つ



會で乃公が説教坊主に頼まれて行つた、隨意座の日に雲滂と天橋へ散歩に行くど切渡の渡しの舟の中で、ヤア間宮さんと一見舊知の如く、乃公の俗姓を呼ぶ雲水があるので、貴禪は何人ぞと問ふたら、私しは今年七つと云ふ詩を吟じて七つの時喝采を博し。あたゝい是れで三つと餓人の食を奪いし天龍山内松岩寺の小僧で御座ると云ふ、覺へずヲ一左様か、大きく成つたなあど、背を撫すれば、あなたも頭が禿げましたネとぬかした、彼れは今年十九歳なりと云ふ後生畏るべし。

#### 四〇 是れ地獄是れ極樂

昔談しだが武田信玄が、禪宗の小僧に逢ふて、地獄極樂はいづくぞと問ひしに、小僧は、くそくらへと答ふ、信玄色をちがへて、悪くき悪口の小僧哉と手をねじつていましめたら、小僧大聲に是れ地獄とやらかした、信玄刀を引き抜いて、小僧に差付て、是れ生か是れ死かと問ふたら、死せる物と答ふ、振あげ打んとすれば、小僧はすかさず、チヨロ〜と逃げ出し、回顧して命わすかの間にありと、云つ

てさつさど行て仕末たと云ふ逸話が蜀山人著書の一話一言にあつたが、わたい是れで三つの坊より手ざわがよい。

#### 四一 如何なるか別法寺

彼の有名な赤松圓心も禪門の修養がありしと聞いたが、赤松は其れが大自慢で、或る禪院へ參つて小僧に、此寺は何と云ふ寺だと云ふたら、別法寺だと云ふので赤松乗り氣に成つて、法に別法なし如何なる乎是れ別法寺と問ふたら、小僧貴殿は何と云ふ人ぞと反問した我れは赤松圓心なりと、語未だ了らざるに小僧松に古今の色なし汝は是れ赤松と答へたら、圓心舌をふるいしなど、野狐禪一派の坊主も居士もこんな作り問答で勝敗を云云して居る連中の氣が知れぬわい、其から思ふと、美濃の大安寺で、先頃死んだ山名の龍泉寺の遷兄や天龍で死んだ俊老の法弟にて祖安と云ふ男があつた、靈松院の學林では、荒木と云ふあだ名があつて今は伊豆の歡喜寺に住職して百丈和尚を氣取つて、作務三昧で住持して居るが、

是れ地獄是れ極樂、如何なるか別法寺



此安老が十六七の時分だ、伊深の泰龍老師が、大安寺へ來られた時、八丁大門と云ふ長い大門を掃除して居つた、安老は小僧で、泰龍老師が何人とも知らない處から、其時分無門闌の話をして、面白い〜と思つて居た時、恰も好し老師が通りかゝつて、ヲイ小僧さん、和尚は寺に居るか、と尋ねられた、安老の小僧は得意に成つて大きな聲で、慕直去とやらかした、老師はい〜と云つて、寺へ着いてから師匠に相見して、貴公の弟子には仲々ゑらい小僧が居るのふと云ふたので和尚赤面して、安老を質すと今の談さ、以來大安寺の慕直小僧と云つて、乃公が美濃に居る時分から評判の笑話であつたが、別法寺の小僧の作り問答よりも活て居るから面白い、今の世間の連中は吾禪を目して、頓智問答か、何かなぞ〜の様に思ふて居る人が多くて困るなあ、問答を上手に爲すが禪學の達人ならば、落語家などにや大善智識がいくらもある。

## 四二 乃公は恥づかしい

相國の獨山老兄が、峩山老師の伴僧當番で東京へ隨行した時、道生會の世話人が來て〇〇老師は講座の上で淨留璃が出る端唄が出る、怒罵呵咄疾風暴雨殆ど端睨すべからすと云慨があるので頗る東京の人氣に適いますから、峩山老師も、少々は目醒しい面白い事や人の悪口など云ふて爲になる様な風に願いたいと云ひしに峩山老師は其時風邪で寐て居られたが、忽ち蒲團を、頭からかぶつて乃公は恥かしく、云ふ甘い事は得やらぬと云れし時、世話人の和尚も赤面して去つたげなが峩山老師を見る様な心地がする。

## 四三 サア乃公の舞臺だぞ

天橋山から歸りに舞鶴の海兵團から講話に來て呉れと云ので、新舞鶴の得月院の玄規和尚が案内で吉田萬籟師が隨行で、大威張に威張つて行つたが、威張と云へは何處の役所でも受付が一番威張る者と見へて、二等水兵が出て來て、大喝一聲、何んじや今説教やるか、左様かどぬかして答禮もせず奥へ這入て行た、乃公

乃公は恥づかしい サア乃公の舞臺だぞ



は腹の中で色々思ふた、全體人間は下層な地位の者程、威張りたがる者じやが、然し當海兵團では

一ツ軍人ハ禮儀ヲ正シクスベシ云云、乃至下級ノ者ニ向ヒ聊モ輕侮驕傲ハ振舞アルベカラズ務メテ懇ニ取扱ヒ慈愛ヲ專一ト心掛ケ

等の御勅諭を無視してあるのか、既に下級の者に對して然り、況や乃公は今日客員ではないか、ヨシ檀上に登らば百萬の英雄豪傑も言下に座斷してやるぞよ、と獨り叱笑して居つた、其内今の兵卒が戻つて、コチラへあがれと號令を掛る様な挨拶だ草履を貸與したまへと云へば無いと云つて平然として居る、團長の室へ行くど大尉で副官らしい男が鼻の先で相手に成つて居る、乃公は又むねが悪く成つて來た、ヨシ此奴も受付男かと思ふて居つた、其内に、副長が中佐で姓名も忘れたが、此人は大分軍人の禮儀を實行し仲々又如才ない、若州邊の出身と見へて宗演老師の事など能く知つて居て慶應義塾にも同時代に居つたなど、色々世間談を

して居る間に講席の用意も出來、一同集れりと云ふ報告があつた、其れでは宜しいと副長中佐嚮導せらる、今の無禮なりし兵卒立つて乃公にも今度は敬禮した、覺へず乃公はクス〜と叱笑した、千八百餘人の水兵が一堂に集つて、副長は檀に立つ一同に乃公を照會して是から有益なる精神講話があるから謹んで聽けつと云ふた、愈々、乃公の舞臺と成つた、寰中は天子の勅察外は將軍の命じや、登壇一番、大喝して怒鳴つた「青龍今日別に奇特の事を以て貴公等に講演を致そふとは思わぬ、又抹香臭さい佛法を信仰せよと依頼も致さぬ、況や念佛、題目唱へよとは決して云わぬぞ、只々貴公等が本分の大事を完全に盡されん事を切望する者である、然し貴公たちは火は自ら熱し水は自ら冷かなりと云ふ事を知つて居る乎假りに即今此講演中、汝の襟首へ一點の煙草の火が上より落下したとすれば如何平然火は自ら熱しとして居る乎、恐らくは顔色を失ふであらふ、又一杓の水を、汝の頭上より洒ぎかけた時、同じく自若として水は自ら冷かなりと云ふて居るの



修養があるかどふじや、蘇東坡の文に、人能く千金の璧を砕くと言ふと雖も、聲を破釜に失ふ無き能わず、人能く虎を搏つと言ふと雖も、色を蜂蟻に失する無き能わずと云ふ語がある、平常は天下の英雄眼中に無しと百萬の軍勢も片腕で撃退する様な座上の豪傑を氣取つて居る奴が、砲彈の破片位が、ビユウと飛んで來たのに、顔色を失ふて、平身低頭した者を乃公は幾人も實驗して居るぞ、貴公等は定めし禪僧の吾輩に叱笑せらるゝ様な小膽なる軍人では無いだろふが、軍人は平素は猫の如くにして一旦緩急あつて敵に向ふの時は、猛虎の群羊を逐ふが如くに勇氣を振つて忠節に死するの覺悟が必要であるぞ、ドヲヤラすると其れが、反比例に、太平の時、日曜などの日は市中で商人や、童蒙婦女に對して猛虎の如くたけりにたけつて蠻勇を振つて居る軍人を目撃する事があるが、實に苦が苦がしきの極である、吾々ですら、一棒食らせ度く思ふが、イヤ〜諸君は 天皇陛下の股肱じや、吾國家の干城であると氣を平にし、涙を呑んで平身低頭して見て通

る事などがあるぞよ」と叱り付け、終りに乃公が從軍中實見せし模範兵の談を爲て聽かしたら、鬼の様な水兵が、涙を垂れて聽いたぞよ、歸り路では逢ふ兵士が皆眞實に敬禮をして、乃公を送つたが、イヤもふ馬鹿々々しい事が多い。

#### 四四 折々かはる人の心を

悪しとも善とも如何に云ひはてん

折々かはる人の心を

空海上人

どうも此歌の通りで折々かわる人の心じやない、折々かわる吾心かなで、乃公が始めて嵯峨へ掛錫したのは二十一の時で、大安寺の俊老と二人、三條の千本通りを歩き乍ら、何でも制中制問追通しで骨折つたら六七年後には大善知識にもなれるだろふから大事了畢迄は暫暇はせまいなど、實に偉い大願心であつたが、俊老は掛錫して十日目に美濃が大地震で、大安寺が全滅だと云ふ電信が來た爲め暫暇して、其年の臘八接心に歸錫した、乃公は好都合に其翌年の雨安居も無事に留錫



して居つたが、授業寺で東嶺和尚の百年忌と、星定隠居の十三年で、大會をやるから何でも歸省して補佐せよとの師命じや、仲々乃公は承知せぬ、元より大事了畢迄は此天龍を一步も動かぬ決心で御座る東嶺星定二大師の報恩は不肖が大事了畢の後致しますから不肖は以來死せる者と諦めて玉わるべくと云ふ回答を嚴師へした、師匠は怒るまい事か、即時に勘當を申付られた、サアこふなると、寄邊なぎさの捨小舟で、舊里は、銀行破産の結果、親兄弟は食ふや食わずで居るのだから仲々鞋資の補助はしてくれず、其れでも一と制間は私鉢などして辛抱したが、段々困つて来た、自分の良心も濟まぬ様な氣がする、乃公が頑張つて歸らない爲めに師兄は妙心の學林から歸省して會前の補佐をして居る、乃公の方は益々風向が好くない、其内に法叔の嶺道和尚から貴公の願心堅固は佛祖も照鑑せらる、ただふが眞實願心堅固なら五十年に一度の報恩に歸らぬと云ふ法はない、本師の嚴命に背むき、宗門中興の東嶺禪師の大遠忌にも來ないと云ふは、衲僧本分の行いで

龍沢寺



折々かばる人の心を



は、あるまい、兎も角歸れ、と云ふ親切な手紙が來た、渡りに舟と乗り込んで先づ今の法叔の處へ行つたら和尚も喜んで、幸ひ明日は澤池で、東嶺和尚の法嗣で名高い願鑑和尚の法事で私しも行くから、法類の者一同で本師へ訛を致そふと云ふ話し、何分宜敷と頼んで、翌日同道して澤池へ行つた、もふ客僧が三人も居る、師兄はもふ新命和尚然として萬事切り廻わして居る、法類五六人で段々師匠へ訛て呉れたが、仲々承知しない、乃公は且過寮で、文庫も解かず、靜坐して、碧巖なごを讀んで居つたが、其夜は心細くも且過へ宿つて、藥石も内々で食わして貰ふた、柏蒲團で寐たが腹が立やら、悲いやら到頭寐られなんだ、其次の日に成つてから、師匠は斷然歸參は許さぬと云ふので、乃公も懷中無一物じや、門を出ればもう乞食せにやならぬが、安名だけは今迄の通りにしてやるから、何處へ行くとも勝手にせよと云ふ本師の回答じや、乃公も師へ對し、龍澤の先代へ對し、報恩の積りで、法叔の勧めに隨つて、遙々京から百里の間、此處迄參りましたが、

其れ迄に本師が嚴重に云わるゝならば、私の志は東嶺禪師も星定先師も定中で照鑑あるべし、私しも婦人の爲めに失敗したではなし、金錢を浪費したと云ふでもなし、酒を呑んだ失敗ではない、只々修行が致したいと云ふ處から、弟子の分にあらね言語を弄して、御返事を申たのが御立腹の根本ですから、されば法類の方々へも長々御法愛を蒙りましたが、此坊主が一人前の坊主に成れましたら、又相替らす宜敷御願ひ申ますと云つて、袈裟文庫を肩にして立關迄出たら、今の法叔の嶺道和尚が涙をポロポロ流がして、マア待て、其れでも鞋資一文なしでは何處へ行つても困る事だし、如何に貴様が悪いにしても師匠も餘りだと云ふので又師匠へ談して呉れた、其れなれば、下男同様に置いてやるから左様心得ろと云ふ嚴命じや、乃公は如何にも袖を嚼んで泣いたぞよ、師匠へ愈々相見が許るして貰へた、師匠は乃公を睨み付て何んじや、其方は少々ばかり修行が出来ると思つて、御師兄様の勉強して御座る邪魔を爲して、師兄が妙心の學林より歸省せ



しは予が歸省せざりし故へ、又何んじや、汽車などに乗つて歸り、さつて、雲水坊主が、汽車に乗るなどは、慮外千萬じや、馬鹿坊主目が、汽車に乗る錢などは、何處から貰へると思ふ、此なまいき小僧が、乃公は尾州の輝東庵へ使僧に行くのに、住職してからであつたが、今の錢にすると貳錢五厘で捨ろい鞋で行つたぞ、(龍澤寺は三嶋町の在だから尾州迄八十里からある) 何事じや、雲水坊主が、汽車に乗るとはど、あまり汽車々々と云ふから私しは下等に乗つて参りましたと云ふと、下等でも徒歩かすに錢を出して來たじやないか、ウーン此馬鹿面めがど、猶更らほげしい御折檻じや、結局下男同様と心得て、汽車賃だけ辨償する様に働けつと云ふ御託宣じや、何程師匠でも酷だと思つたが是非がない、夫から直ぐ、米一石とぐ、外の兄弟弟子は皆な化縁に行くとか乃至來客の應對をして得意に成つて居るのに、乃公獨り、十二月一月と云ふ寒む空らに、眠をきらして全く下男と同様の取扱いをされて居たが、乃公の様な勝氣の者には如何にも殘念で、耻かしくて、悲

しかつたよ、或る時乃公が自分の居間で二分心の洋燈に點火して獨り書見して居つたら、いつの間にか師匠が見付て、油が勿體ない、火の用心がわるいと云つて乃公が御布施の一分で買ふて來た大事のランプを取あげて仕舞つた、大法會も濟み、師兄は學林へ歸校する、客僧も其れれ分散したのに、乃公だけは汽車賃の爲めに前後滿一ヶ年下男同様の奉公したが、其を思ふと、今の諸方の徒弟方は、全然華族様じや、其時乃公は二十三歳だつたがなあ、九歳の時から十八歳迄は錢と云ふ者は貰らわれなかつたのみならず、間食が嚴重で、菓子でも餅でも飯の時の外は食へぬと云ふ習慣であつたから、乃公は今でも餘程空腹にならぬと菓子なぞに手を出した事はない、其から二十三四の頃は、何でも龍澤寺の住職にでも成れば、非常な出世だと思つて居た、二十五歳の時師匠は遷化して、師兄が師匠の遺言で晋山した時には、乃公は羨ましいと思つた、其から今の青龍寺に住名を以てから、一時、建長寺は末寺も少ないから、何でも一番修行して、建長寺派の管





長に成りたいと思ふ野心で樂んで居つた、處が末寺は少々でも、管長に成りたが  
つてる大善知識が他に幾人もある様子だから、到底乃公の處へ御鉢は廻つて來そ  
うもないと、ヤキモキと思つた事もあつたが、又諸方の管長方の御境涯を拜見す  
ると仲々窮屈で骨が折れて御氣の毒な様だ、是れはツマリ吾々無名の方が結句よ  
いかな、止みなん〜と又心が變つて今は早や、鎮西八郎ではないが、予は小僧  
にて可なり決して威張りたいの世間を誤魔化して世に出ようなど云心はなくなつ  
たが、又修行でも之から爲て俗人にでもおだてられたら已れの分にあるまじき野  
心を起す様に成るかも知れぬ、又天來の美女を吾に献する者あつて新婚旅行でも  
爲る心に成るかも知れぬ、實に折り〜かはる吾心哉じや、然かしそれは乃公  
ばかりの心だろふ乎、道は貧道より尊きはなしと云ふ格言があるが、青龍の如き  
は眞に貧乏でありし御蔭で、今日迄無事に勤めて來て、二十五の時此寺へ來たが、  
本堂は漏る、庫裡は無くて、昔しの廊下に、ひさしを出して、庫裡代用じや、住

折々かはる人の心を



職の居間など無論ない、其代用庫裡も雨がダラ洩りで、或る夏晝寐をして居ると、耳の穴へ水が這入たから驚起して見ると、俄かに大雨が降て来たのであつた、其頃下男に菊藏と云奴が居つて或る日鍋や摺り鉢や桶を勝手へならべるから、何を爲るんだと尋ねると、富士山の方で曇つたゆへ、今に雨が降つて來ますそれ故其漏りを受るので御座ると云ふて大笑した事があつたが、其れも借金でも無いのなら、關山國師の様な氣取り方でも爲て居られ又、鴨の長明の方丈記にある様な心地でも居られもしやうが、千圓からの借金で、披露に配る風呂敷手拭の代金迄借金じや、それ計りではない第一新命の掛ける絡子がない、白衣がない、手巾がない、入つては「臺ランプ」一つない、たつた豆ランプが二つじや、耻づかしい事だが郵便を出すのに、三錢の錢がなかつたので本堂の賽錢を集めて出したこともある様な次第で、其夏今の天龍の耕雲老師が富士登山を爲ると云ふて折角の御光來じやつたが着て寝かす蒲團がない、實に嬉しいやら悲しいやらであつた、富士山

へ同道せよと勧められて、登り度いのは山々ながら、○がないので、登られない、其頃丹波の常照寺の弟子で綱兄と云ふのも來た、清拙老兄も來て呉れたが何分今の談だから、鞋資一文進する事も出來ぬ、有つて人に施さぬは別に面白い處があるが、無くて爲すべき義理の出來ぬは實につらい者じや、耕雲老師には一ど方ならぬ法愛を蒙つて居るのじや、汽車賃位は差上ても來遊を願ひ度い處じや、其れを御歸りの時も漸く佐野迄見送つたばかりで、辨當を買ふて差上げる錢がなくて貫物の牡丹餅を持つて間に合せたと云ふ始末であつた、金を借り度ても雲水の新顔で一圓借せる人もない、宛然で遠嶋流罪の坊主も同様な、屋根洩りは借金しても止めるがよいと耕雲老師に勧められて、愈々屋根屋を頼んだ、職人が九人も來てドシ〜仕事を爲て居たが、懐ろにも賽錢箱にも、錢は一文もない、檀徒總代の處へ行つて二拾圓貸與せぬか屋根屋の仕拂ひが出來ぬと云たら、其れは御困りでしよふが私しも錢はありませぬと云ふ無情な挨拶だ、嗚呼そふか、檀中の總



代でも爲て居る其許でさへ今日乃公に對して二拾圓の信用が出来ぬのだなあ、ド  
 フしてそふ乃公を信用して呉れぬの乎と云へば、イヤ信用致さぬ譯ではないと云  
 ふ、段々あとで様子を聞けば、とても青龍寺に生涯居る人ではない、あんなつま  
 らぬ破れ寺に住職する人ではない、直に轉住する人だと思ふて居つたと云ふ始末  
 だ、是非がないから、屋根屋の仕拂ひを猶豫して貰らつて、雲水の風を爲て自分  
 に握り飯を拵へて流車に乗る錢がないので先づ澤池の授業寺へ行つて四五拾圓貸  
 與してほしいと師兄に頼んだら、一文も出来ないと言ふ次第、是非がないから箱  
 根山を徒歩で越して建長寺へ行つて法叔の松本宗信和尚に泣付いたら、有名な紫  
 崎維船和尚が宗務總理で法愛厚く其れは可愛そふだと云ので百圓借用が出来る事  
 に成つた、嬉しさの餘り乃公も其れで仕拂ひも出来るし、寺へ歸つても借金の利  
 子も拂へるから、來た序でだ一と接心修行して行くと云ので、直ぐ圓覺の僧堂へ  
 逗留を願つて一週間接心して歸るや否や籠から手が出る様に百圓の金は消滅して

仕舞つた、實に雲水中  
 の方が安氣だと、泌み  
 〳〵思つたよ、極寒の  
 頃に障子は破れて居る  
 寒風面を拂らい、寒雨  
 枕上に滴り、蒲團は三  
 布に四布が二枚で、綿  
 がぼろ〳〵であるのに  
 廣ひ破れ本堂へ獨り窺  
 ては、實に寒むい、夜  
 深けてから思い廻して  
 涙に枕をぬらした事が  
 折々ある人の心を



青龍山は龍山寺の山

幾度もある、其も只々  
 一身の衣食住だけなら  
 ば幾許の逆境も忍ばる  
 ゝが、世間では青龍寺  
 と云へば財産のある内  
 福な寺だと云ふ評判は  
 するし、田舎寺だから  
 俗人と同じ義理もある  
 進物の應答もせにやな  
 らぬ、借金の催促はさ  
 れる、食わずにや居ら  
 れぬと云ふ時にや、仲



々室内の詮義じや、碧巖に何の則が難透じや、無門關がごふのと威張つても、かゝる境涯にあてはめて僧衲本分の事じやなど、御悟の丸糞たれて見識の亂用して、一喝や棒を振り舞わしても、世間俗情の難透は、高僧知識、清僧偉人と云はるゝ人よりも、却つて吾々如き俗僧の方が苦勞をして居る譯だらふと思ふ。

#### 四五 日本の僧侶で御座る

父の親友に中村修と云ふ老人がある、予が舊里へ双親を訪らふ毎に、往訪來問親子の如き情を以て交つて居る老人だ、北白川宮様始め各宮家の家令を勤め、維新の當時は西郷南洲など、往來せし仲々氣骨ある清廉なる人だが、乃公が舊里へ行くとき此老人に逢ふて懷舊談を聞くのが無二の樂みであつた、其老人の談に妙心の龍泉庵に維新の頃住職して居られた鼎州和尚の如きは、私が知人の出家中でも、偉人だと思ひました、文久三年七月二十四日だと記臆して居りますが、長州藩が朝廷へ恐れ多くも發砲したので、尾州公從一位徳川慶勝様の内意を以て、鼎州和

尙が問罪使として長州の參謀へ談判に向われた、維新の頃は出家ならば御法要であるときへ云へば敵中へも自由に往來が出来た者ですから、何れの藩でも、名僧を依頼して國事に參與せしめた者です、鼎州和尚敵地に入つて言論往來の結果、長州の大將たる穴戸備後、福原越後、國司信濃、此三人の首を斬らして、意氣揚々と引揚げた時の手際は、仲々尋常の者の出来る處ではない、實に禪門の活手段だと吾々も肝膽を寒からしめた、然し、對皇室の都合上、僧侶の身分で國事に奔走する事は道ならぬと云ふので、一と通り裁判になつた、其時は、昔しのお白洲であつたから、諸藩の家老連中が判官でありましたが、鼎州和尚は法服用で、裁判所へづか〜と出頭して、這入るや否や拙僧の座席は何處で御座る、イヤ怪しからぬ、苟くも國君の御靈牌を御祭りする出家が、其藩の家老より末席と云ふ事はあるまいと大喝せられた、すると「本日貴僧は罪人として」と、一人が云ひかゝると、イヤ〜、罪人と成るか成らぬかは裁判の上で決する事だと云ふて、頑



として聞かない、是非なく席を譲つて、各家老の上席にすわらせた、本日御招きの御用は如何なる趣で御座ると和尚から切り掛た、裁判官は「別儀では御座らぬ、先般貴僧は出家の身分でありながら、國事に參與して、人の首を斬らせるとは不都合千萬である、誰人に頼まれてかゝる事を致されしかと、問責したら、鼎州和尚は、何事かと思へば、是れは又如何にも馬鹿々々しき御尋ね哉、拙僧は日本の僧侶で御座る、御國の出家であるから、御國の爲に盡力して朝廷へ無禮など致す者は如何なる者も容捨は相成らぬのであると、怒鳴られたので、尾州公へ紛紜もなく穩便に濟んだ、其の御禮として、龍泉庵へ二十人扶持差上ると云ふ事に成つたが、鼎州和尚は、そんな物は貰らわいでも此坊主は食ふだけあれば宜しいと云ふて受られなんだが、無理にと云ふので、其れなら尾州元祖源敬公の供養でも致してあげると云つて、ろく／＼禮も云はなんだが、誠に、キビ／＼した快心の大禪師でしたよ。

#### 四六 そんなこと言ふて居つては

桐野利秋が獨園禪師に相見して

三千世界の鳥を殺ろし

主と樂寢がして見たい

と云ふ歌を自慢したら、禪師はニヤリと笑つて、桐野さんそんな事を云ふて居つては、天下はとても太平には成りませぬ、獨園ならば

三千世界の鳥と共に

主と添い寝がして見たい

と云われたが、あの坊主は仲々油断のならぬ坊主であつたと、あの元氣な桐野が談して居りましたよ、禪宗の出家にも色々の家風がありますなあ。

#### 四七 國家大平の御祈願

維新の頃は東西共に殺氣天を覆い陰風人に迫り「わらんじは、こふめす物と涙ぐみ

そんなこと言ふて居つては 國家大平の御祈願



云ふ間に響く鐵砲の音」など、云ふ歌も此時であつたが、分けて北白川の宮様は、御年僅か十四にて、御父宮は京都に居らせられる四面敵軍の中で、上野の寺に御住居の頃、寸閑さへあれば、官軍が探偵に来て、天井でも椽の下でも三間鎗で、突き廻わして、宮殿下を搜索すると云ふ次第で、實に御氣の毒でありました、或時殿下へ御讀經が濟んでから、殿下萬一官軍に捕はれ玉い、朝敵の罪を問責せられ玉は、如何に御答へあそばすやと御尋ね申上たら、余は國家太平の御祈願を致して居ると仰せられたが、一同感服致しましたよ、國家太平の御祈願ならば、敵も味方も御座りませぬから、陛下の御とがめもありませぬと申して居りましたが到底上野の寺では、殿下の御身の上が、あぶないと云ふので、通稱コブ寺の自性院修多羅亮榮上人が御預り申上ると云ふ事になつた、此の亮榮上人は、天台宗で仲々豪勇にして思慮のある人で、殿下を、上野から御あづかり申て、恐れ多いが御命には代へられませぬからと云て、小僧と同様にして、御あづかり申た、其頃

官軍の士官が今のコブ寺へ、探偵に廻はつて来て見ると、宮様がごふです、小僧の通りに、淺黄の木綿着物を召して、平民から出家した者と同様な尾葉打枯らし、た御氣の毒な風に姿をやつし、いかにも御やつれなされし御有様で、しどやかに、其士官へ御茶を汲んで、御出しに成つた時、其御姿を御見受申や否や、兩手を疊について、涙をばらばらこぼして、殿下にはかく迄御苦勞あそばす乎、ごふぞ御心を丈夫になして玉はるべし、決して官軍も殿下の御首を頂きは致しませぬ、必ず都の御父大宮様の御そばへ遠からず御連れ申上ます、と云つて亮榮上人と殿下と三人でサメと泣れたと云ふ事を聞きましたが、左こそと思はれる話しさ、其れから殿下が幕府の爲めに朝廷へ御詫下さる事になつて、殿下の御書翰を今の修多羅亮榮上人が捧持して使者と成つて官軍へ行かれた、静岡で西郷に逢ふて、其書翰を渡すと、西郷は殿下の御手紙なればと云ふて、禮を正ふし机を拂つて、其上へ頂いて載せたのを見て、亮榮上人は江戸へ戻つて談された、モ一天下も太平



に治りますと云ふたので、何んで分る乎と云へば、西郷の如き氣の荒い勇者が、あの戦亂の中でも、殿下の御手紙と承つて、禮を正しくして拜受した是れは天下の治る前兆じやと云はれたが、此上人も只人ではなかつたこの談を聞いたが、維新の當時は種々な珍談が澤山あります、まあこんな譯であるから琵琶歌の臺灣入（北白川宮）の曲を聞くに、私しはいつも頭があたりませぬと談した。

#### 四八 舊時の觀を爲すこと乍れ

三日相見せざれば舊時の觀をなす事なかれと云ふ事は男子ばかりではない、井上秀子と云ふ婦人は先年四月三十日、ミネソダ號で米國へ遊學の爲め渡航したと云ふ事が、新聞に出て居つたそふだが、彼の井上秀子は、天龍の峨山和尚に參禪して仲々刻苦した者だ、天龍僧堂へ婦人で參禪したのは井上秀子と、土肥原京子の二人であつた、妙齡の處女と云ふよりは、まあ女壯士と云ふ風であつた、二人共、鈴木無隱居士の照會であつた、なんにでも血の湧く様な青年の雲水許りの中で、

若い婦人が二人で然かも參禪の時は、いつでも横合から飛込で来て喚鐘場へ座つて、サツサと、入室するのが、いかにも悪いやふに思つた、なんじや女の分際で、天下の衲僧と、先後を争ふて入室するなどは、以ての外だ、なご、いましく思つて居つたが、其れが今は女子大學の先生であると來ては豈驚かざるを得んやじや、然し入室は爲ても峨山和尚が、仲々法令無親で、參禪修行の上には、貴賤、老若、男女の差別はないとあつて、随分意地のわるい苦手を食らはすから室内を出る時、いつも疊を敲いて、此糞坊主、目がく〜と泣き〜、退室して永明院と云ふあき寺で、土肥原と二人が、くやし泣きに泣いて坐禪したものであつたが、這裡の消息を井上秀子今は忘却せるや否や、土肥原と云へば、乃公が從軍した時旅順のなまこ山で、第一師團の歩兵第一師團の歩兵第一の三大隊本部へ慰問して一と晩大隊長と大隊付の軍醫二人副官一人都合五人で談笑したが其の時土肥原と云ふ軍醫が、如何にも見た事のある聞いた事のある名だと思ふて、天龍に乃公が

舊時の觀をなすことなけれ



修行中土肥原と云ふて仲々我慢のつよい婦人が參禪したが、貴公に能く似て居つた云ふと、土肥原軍醫は拍手して云く、其れは私の姉でありますと云ふので、土肥原軍醫と爾後戦地では非常に懇意にした、其軍醫も無隠居士の感化を受けて餘程禪風があつてそふして勇敢だと云ふ評判だつた、其のくせ、井上土肥原二人共、乃公は一言も辭ばを交じへた事はなかつたが妙な者さ、兎も角萬縁叢中紅一點で記臆して居る、土肥原は今でも誰やらに參禪して仲々熱心だそふだ、そふして何處乎の學校の教師をして居るそふだ、此等の二人杯は、マア女子參禪者中で道人が知つて居る中では關西關東でも行業動作の綿密な婦人らしい美德を、禪の妙用に依て完全に發展させつゝあるのだろふと思ふて居るが、是れも死んでからでないごほんこの事は分らぬのさ、比丘尼などの坐禪した者と來たら、乃公は大嫌らしいじや、先頃も或處で、乃公が法話をして居ると、講座の下に色袈裟掛て威張つて居る比丘尼がある、其れがもふ乃公の癢にさわる(いらざる事だが)そふし

て其比丘尼が、比丘尼の大叢林を建立するから勸化に附いて呉れと云つて、諸方の金玉のある尊宿を輕視して豪慢に構へて居るさまご云ふたら實に馬鹿らしかつた、其れが何でも或庵寺へ住職して晋山の時に、諸方\*

比丘尼



\*の老宿を請待して、大威張りで主杖だかを振り廻して平仄の間違つた詩だか、偈頌だかを唱へて、主杖でコツンと卓下して其あげくに

舊時の觀ぞなすことなけれ



比丘尼の頭を泥下駄ぬいで打つてやりたいやふな氣がした、ウーン道人も、やつぱり、めくら蛇じや。

四九 廬山の半面觀

或る教育家が、東洋婦人の、姑息にして何んでも引込主義なのは佛教の感化で涅槃寂靜など、云ふ事から自然に今日の如くなつたのであると云はれたが、ナーニ、涅槃寂靜の坐禪した劉鐵磨でも、徳山を餅でいじめた龍潭途上の婆子でも、天龍和尚を發憤させた比丘尼でも、東坡が氣に入りの藝妓琴操でも、白隠下のねさつ、正受老人の婆子、大雅堂の妻、何れも姑息どころか天下の衲僧も、世界の學者も言下にねじ伏せると云ふ恐るべき手腕を具へて居た、これはどうしたものじや、少し考へて貰ひたいネ。

五〇 如何是湖中景

彼の東坡の寵愛せし名妓琴操は頗る佛書に通じ、妙に言辭を解した婦人であつた

と云ふ、一日東坡が西湖に遊び、戯に琴操に告げて曰く、我試みに作さん、汝參禪せよと、琴操敬諾す。

問曰、如何是湖中景

答曰、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色、

問曰、如何是景中人

答曰、裙施六幅湘江水、髻挽巫山一段雲、

問曰、如何是人中景

答曰、隨他楊學士、籠殺鮑將軍、如此究竟如何

東坡曰、門前冷落鞍馬稀、老大嫁爲商人婦、

琴操言下に大悟徹底して遂に剃髮して尼と成るとあるが、琴操も比丘尼にならずと生涯をチャンチャラチャンで輕快に暮したら一層の妙があつたらふに、惜しい事をした、此の琴操の末後は知らぬが、何處かへ庵居でもして、ヲチヨボ口で臨



濟さまが喝とれつしやつて」などゝやりはせんだらふか。

五一 柳は緑、花は紅

京都の祇園町に、藤村勇香とか云ふ娼家があつて、天龍から吾等が托鉢に行くに、屹度錢を呉れて、冬になる。



\*と、必ず呼込んで古る俵を裏庭で焼いてあたらして呉れた婆子があつた

が、時々吾等のあたつて居る處へ来て、前をまくつたりして、股火をあたりながら、柳は緑、花は紅、など獨語した事があつた、吾等も初心の時であり、こんな

婆々に、いじめられては挨拶にも困ると思つて、其からは勧められてもあたらしで貰らいに立寄らなんだが、其の婆子は龍關老師に參禪して居ると云ふ評判であつた、どうも天下の衲僧が、そこらの婆様に一拶やられるなどは、にが／＼しい事さ。

五二 そう理屈を言ふものでない

佛教を信すると厭世になると云ふ事は古るい言草だが、妓王だの妓女だの佛御前などは、佛教を信仰して居らなんだら自殺の仲間であつたらふ、其れが「佛も昔は凡夫なり我等も遂には佛なり」などゝあきらめて、静寂無爲の境に遊んだから死ぬより悲しい不平な中にも、一點の光明を認めて自己心靈の上には寧ろ關白の清盛よりも愉快に生涯を過ごしたのだからと思ふ、其證據には今は宗教を理屈で研究しやふとして居るから満足も安心もできぬので自然に不平のやり道がなく、狂亂顛倒、自殺する者が多いのさ、然れば涅槃寂靜、無爲極樂で精神の修養して

花は緑花は紅、そう理屈を言ふものでない



長壽したがよい乎、狂氣したり自殺をして悲惨の死をこげさした方がよい乎、ををじやろふ。

主杖子曰、そふ禪宗坊主が理屈を云ふものではない

## 五三 一寸来い

美濃の靈松院の學林に留學中は、乃公も二度迄退校された程の腕白者であつたが、其かわり三度賞典も貰つた、其退校された原因は平素校内で演説の練習會があるたびに、乃公は古參の役位を攻撃する演説をやらかして、役位をして居る古參の生徒は随分迷惑して乃公を持てあましたと見へる、古參の生徒は第一位に原圓應、南谷楚芳、織田義精、西尾維一、土岐宗琢など云ふ連中であつた、役位を攻撃すること云ふても小供だから根がつまらぬ談で米の粥を役位が内證で煮て食つたとか、役位も生徒又我々も生徒だから權利も義務も平等にしてほしいとか、上行はざれば下豈に行んやなど、恰も今の社會主義演説を乃公が平素やらかした、

處が其頃は萬友和尚と云て長座不臥で讀經三昧と云ふ行業純白にして活如來だと在家の人は難有がつた位いのやかまし屋が校長であつたから、總てが禪堂風で仲々壓制じや、古參の連中も乃公の様な坊主にはさぞ迷惑したろふ、然し乃公は其頃から口先では風上に炭を散らす様な横着な演説議論しても、決して酒を呑むの魚を食ふの夜る校外に散歩すること云ふ不品行な事は寸毫も致さぬので退校するにも其口實に困つたらしい、生憎其時分一人の賊僧があつた、其賊僧の郷里では今の古參の連中が時々饗應にあづかつて義理があるので、人情退校さすに忍びぬと云ふので、盤溪國師の家風を學んで、有哉無哉にして所置せずをいたが、盗まれた者が承知せぬ、毎日暇さへあれば被害者と其賊僧と喧嘩をする、腕力に訴へて迄いじめるので、賊僧が堪へかねて内々古參の連中へ哀訴したらしい處から、被害者二人の生徒を却て退校さしたと云ふ無法な仕末があつた、公論囂々として校内仲々騒ぐ、乃公は如何にも此の古參の連中の所置がにくいと云ふので、



よせばよかつたが、元明史か何かの文を引例にして賞罰を明らかにせざれば天下亂る、天下の亂るゝは、有司の罪なりなど、漢文に作つて、友人に見せると、うまい〜と云つてただでられる、圖にのつて其文を黒板へ麗々と書いた、友人一同は窃かに快哉と叫んだ、乃公も大得意で居ると、其の晩知客寮から一寸來いと云ふ、何事ならんと行つて見れば、本堂へ赫々と蠟燭を點火して、香番に線香を焼いて、役位一同が一本宛警策を横さまに拈じて、まるで裁判所だ、其處へ乃公が慫慂に低頭すると、西尾維一と云ふ直日だか知客寮であつたが、開口一番、其方は本日黒板へ落書したが如何なる事實をもつて書いたかと裁判官然と威猛高に云から、乃公は今の賊僧の一條公論の囂々たる真相を書たのであると答へたら、今度は織田義精と云が、ウーン何とぬかす生徒の分際で學校の公器へ落書する様な坊主は、校風に適せぬから即座に退校を命ずると云や否や、此の五人が總起立に成て打にかゝる、乃公は大喝一聲、馬鹿さらすな、誰がこんな學校に居てやる

かい、貴様等に退校を命せられなくても乃公の方から居つてやらぬと云ふ勢いでサツサと門を出た、其足で栗野の大龍寺へ駆け付た、モー夜の十二時だ、門を搗いて和尚に御目にかゝりたい、私は今斯く〜の次第で退校を命せられた者であるが、和尚は學務委員と承る宜しく教校の宿弊を革新せられたしと自分の腕白なところは棚へあげて置いて、滔々と辯じ立てたが、和尚はあがれとも云はぬ、其れは兎も角退校されて出ただけは貴禪がわるいのだから、庭詰しても何んでも歸校せよと云つていかにも冷淡な挨拶して、手燭を持つて奥へ這入て仕舞つた、中庭に獨りぼんやり立つて居ても望みは無いと、赤脚にして無提燈でスタ〜と又一里もある處を戻つて、靈松院門前の洗濯屋で無理に頼んで一晩とめて貰らつて、荷物を取まどめて名古屋の舊里へ一と先づ戻つて、父とも相談して酒井惠遠和尚が取締をして居るから酒井の力を借りて大威張で歸校せんと畫策したが、何れへ行ても、退校されて出た以上は、出た者が悪ると云ふ判決で仕方がない、



法叔の犬山町在今井村光陽寺の老僧に相談したらマア、腹は立つても庭詰して歸校した方がよからうと云ふ、乃公も教師の連中には可愛がられて居たし、一般生徒には深厚なる同情を受けて居つたので、頻りに歸校が爲度い心地がして來た、又さうなると、矢も盾もたまらぬ程歸校したい、さうかうする間に大試験は濟んで仕舞つた、制間中(休暇)に歸校を願ふと云ふ目論見で、血の出る様な錢で知客寮へも蒸菓子十五錢ばかりと、靈松院の和尚へも二十錢ばかりの菓子を買ふて賄賂としたが、何の功力もなく、嚴重に庭詰を三日もやらされて、愈々且過と云ふ時は、雪が一尺も降つて身を切る様な寒い時に、靈松院の大門から六七丁もある處より、獨りで松の薪を二百把から運ばされた、知客寮の前を通ると古參の生徒土岐宗琢と云ふ人が寮頭で、大威張で、火鉢にあたり乍ら詩吟などやらかして乃公の贈つた蒸菓子などを食つて居る、其前をクチャ、と雪解の泥路を往返した、彼れも生徒なり我も生徒だが、乃公は口故へにかゝる憂目を見るの乎と、柳

北先生が舌を祭るの文を偲ばせたよ、此時乃公は十八歳であつた、其次には一級二級の講義を聞てあるから三四と聴講して一級から四級迄越級して試験を受けた其時は優等で賞品をもらつた、また慢心して五六と二級の聴講して居つた、大試験の三日前に、再び黑板へ狂詩を作て落書した、普通達名、這學林など、云ふ嘲詩を書いたが元で、再び退校の嚴命を蒙つた、なかに黑板へ落書する様な生徒はいくらもあるのだが、今度も演説の罰があつたのだ、其時は十九歳であつた、前回で懲りて居るから権力のある者には仕方がないと云ふので、伏罪して直に庭詰したが歸校を許るされた時は、モー大試験は決了に成つて、同友は得意に成つて免状を持つて行くのを見て、實に残念であつたが仕方がない、其次學期には七八と聴講して又五から八級迄越級受験して其時も何だか賞典を貰つた、あとは餘程乃公も考へて二度迄退校されたので、先輩古參の前へも反抗せぬ様にして、我儘も云はず、無事に十二級迄卒業したのが二十歳の時であつた、今思ふと、まるで



夢だなあ、原圓應と南谷楚芳の兩法兄は天龍へ同時に掛錫したので、貴公等は學林では評席であつたが、僧堂では同じく新到だから、モ一退校など命するなよ、乃公も落書はモ一慎むわいなご、大笑らしい事もある、織田義精和尚に三四年前に尾州で逢ふた事がある、此人も極温厚な好い和尚だ、西尾惟一和尚は説教師で仲々評判がよいさうちやが、まだ一別以來相見せぬ、土岐宗琢和尚にもまだ逢はぬが、若い時分の同學同修の舊知が一堂に會合して、貴公が乃公がで懐舊懇談會でも催したら、さぞ、雲水物語もはづむだらうと思ふ。

## 五四 不曾彈動一條絃

世間でも出世間でも同じ事で、學生時代はやれ僕の理想とか、社會改善の政策とか公共の爲めに一身を犠牲にしてとか、萬丈の氣虹の如き男も、或學校を卒業して親元からもいつ迄も學資は貰はれず、故郷へ歸つて百姓爲るも氣がきかないと云ふて、下宿に居れば、一杯の水も無代價では呑されず、新聞代も立換へて貰ら

ふ、何博士の處へ叩頭して哀願したが、ウン／＼と空ら返辭したばかりで採用されそうもない、大學の卒業生が副か十五圓の腰辨では世間へ對しても、又四五年間のノートへ對しても勿體ない、じやと云ふて食はずには居られず、學校を卒業當座は何だか自分は非常に偉らい人になつたつもりで居るが、世間では、昨日の書生と同様に待遇して居ると思ふと、世間には盲人ばかりだ、馬鹿ばかりだ、コウ相場をきめて見ると、もふ世間の人と言語を交ゆるも馬鹿々々しくなる、馬鹿々々しいと思つて居るから自然人に對してろく／＼禮儀も爲す、片腕を懐ろにして片手で禮をすます、衆人稠座の前で、師長尊者へ對して輕蔑した態度でもすれば、智慧のない者は偉人だとか、豪傑だとかと推想して呉れると思ふて居るから、益々識者には無禮者と輕蔑される、無智の者には驕慢だときらわれる、いつの間にか學生時代の意志も德行も消散して、尋常一箇の窮措大と成り、其から始めて叩頭屈節禮を厚くして、十人並のパンを食ふて、漸く一人前の露命をつない



で、一生を送ると云ふ人が多い様じや、全國數千の卒業生が書生時代の忘想だか理想だかを實現して、得意の地位に居る者は曉天の星である、道人も雲水中禪堂の隨意座日(休息)に爐を圍んで法螺を吹いて居た時分には、世間の住職して居る尊宿が、皆俗僧に見へて、學問があつても禪道を知らぬ、禪道を知て居つても道力がない、道學兼備でも品行がわるい、辯者でも徳がない、徳者でも才機がないなど、妙に人を輕ろんじて、天上下唯我獨尊をきめ込み、雲居の羅漢で大威張に威張て居つた者だが、愈々寺を持つと、御悟りの丸糞たれて、咄だの喝だの云ふて威張つても、仲々人が尊敬して呉れず、世間の者も檀中の者も、禪學が何んじややら、佛敎が何じややら、チツとも分らぬから、田舎寺で、雲水中の様な氣焰を吐いて威張つても居ろふ者なら、檀中からは直に不信任を申立られる、何處の寺でも今は妻帯して居る、噉肉は平素の事、子供はあると云ふ世の中だ、或る處で二十代位の若年雲水が忘想の中から目をむいて、乃公は大禪道家である乃

公は活如来同様の清僧である、乃公豈に汝輩墮落僧の隊伍ならんやと、晋山草々は、明惠上人も三舍を避くる程の行狀で、境内を掃除するにも、禪堂の四九日任務でも爲る様な風で、口に經典を讀誦しながら帚を動すと云ふ有様で三時の勤行怠りなく、一舉手、一投足、一言一句、一機一境、一靜一動、誠に鬼神も感泣して、還て護法神と化し、佛祖は空中に昭鑑して這箇の清僧を擁護し玉ふと見へ、戒徳の光明忽ち四圍の暗昏を照破し、邪魔の種族と輕蔑したる門中の古老宿も、亦趨て寺門の内外を補佐し奉り、阿闍提なり外道なりと怒罵呵咄したる檀信も、信仰歸依漸く厚く、信男信女居士大姉の聞法入室する者日夕絡繹たりし中に就いて、一人の婦人あり年三十に満たず、清僧と一上下ならん、高等女學校を優等にて卒業せし豪農の一令嬢あり、不幸にして迎へし夫は三年前に天死したり、いたく無常を感じて、日に夜に參禮訪問して這清僧に衣服珍味を供養して歸依の誠意を表す、婦人は天性容姿艶麗にして然も淑徳を備へ貞節なり、清僧は元より婦人と



亦決して俗情を以て交るにあらず、俗愛を以て參問する者にあらず、法を以て彼れを救わんが爲めに菩薩の慈悲を以てすれば、彼れも亦法の爲めに身命を惜まず、決して肉身の清僧を信するにあらず、宛然佛世尊の龍女を教化せるが如く勝鬘、玉耶を濟度せられしも斯やと人の感佩せし程なりしが、婦人元來維摩室中の天女にもあらず、清僧元より只雲居の羅漢にして目蓮の神力なし、慈悲は元より無相眞實無縁の其れにあらず、清僧と大姉は咄々々遂にあわれ神通を失却せる久米の仙人とはなりし、あわれ當時の英雄遠藤盛遠とはなりたり、其清僧如何なる天魔の魅入りしか、情の熱したる結果、其婦人の變心せるを憤り匕首を以て殺害し自己も亦死せんと爲せしが、苦痛に堪へずして、死に到らず、縊死せんと爲せしが心たくれて能はず、淵に沈みしが苦悶の末へ這ひ出し、二夜三日ばかり東西に漂泊して遂に自坊の味噌部屋に潜みて蓆被着て然茫自失し居れりと、豈驚かざるを得んや、皮下に血ある底の禿僧は最も注意して自己に返照すべき話柄である、婆

子燒庵の因縁を徹底了悟して眞境界を修得すれば決して左せる破戒に到らんやと、謂こと勿れ、乃公は大徹大悟徹見明了なり決して任麼の邪道に入らんやと然しながら婆子の娘子に指示して趨住せしめたるが如き、佳人の來て汝の左右に待座して妾は貴帥を愛す、師妾を如何か濟度せんなど、厚顔にも日々に把住するあらば破廉耻なる雲助土工夫の如き者と雖も、枯木寒巖、三冬暖氣なし疾追々々莫得久住と叱咤して打出せんも左はなく霧露の中を行くが如く知らず知らず愛着の痴水に浸染して、昨日の清僧、今日の魔王と成るの類は僧俗共にあり、思ふて此處に到れば、人は逆境に處して食なく三日の間水を飲んで飢を凌ぎたり、身に纏ふ衣なくて泥土の上に横臥して一夜を明したり、懷中半錢の畜へかなくて病めりと雖も一包の薬用も出來ぬといふが如き逆境は、貧民若しくは乞食と雖も能く忍耐する者なり、鞋資がない、麥粥がまずい、托鉢かつらい、參禪が骨が折れる、老師が嚴重だ何の則が難透じやと云ふた處が、油斷なく工夫三昧に入て根機





能く修行すれば智愚賢不肖を論せず、大善智識の境に到るべし左れど暗中左右に佳人あり汝を圍繞して惑わさんと爲し、消費して何等の故障なき曠野に遺金あり、汝の好める酒あり、汝の好める魚肉あり、かゝる悪魔は温顔令色好言を以て云く他別人の耳目なし妾に對しては隔意を要せず、飲まんと欲せば飲み食わんと欲せば宜しく飽満し玉へ佛豈今世に在らんや、師が如き、學一世に廣く、徳天下に高く、今世生身の如來にして萬一にも四大の不調ならば、天下の不幸なり人天大衆の愁ひとする處なり、吾家にては打くつろぎ玉いて、心身を静養めされよと、天神の玉女を佛に献じたるが如き場合に望んでも、佛印の如くに

夜來酒醉上牀眠、不覺琵琶在枕邊、  
傳語翰林蘇學士、不曾彈動一條絃、

など、瀟洒なる心地でかゝる魔境を切ぬけると云ふ事は雲水中に餘程願心が堅固に骨折つてないと出来ぬだらふ



## 五五 今に始めるぞ

天龍僧堂に雲照律師の會下で戒律を學んで來た大真と云ふ人が居つた、丹後の成相山の弟子であつたが、是人の堅忍なる大根機、大願心には驚いた、僧堂へ掛錫するのにも純然たる禪宗の雲水と成つて、庭詰も且過も悉く嚴重に濟まして參堂してからも、二食だ、其れが都合に依ると作業などして朝と晝が麥粥で、晩が米の茶粥があると云ふ時などにも決して晩食は食はぬ、分衛の日は朝三時に粥座をすまして京都市中を托鉢して都合に依ると十二時後に點心場(晝食所)へ行く事がある、十二時が過ぎるとモー飯は食はぬので讀經其他如法に濟まして、同行者の食事中チャンと靜坐して居る、

吾れは月に六度の托鉢も、只此點心場の米の飯が樂みであるのに、大真上人トヲく、麥粥を朝一度食ふて平然として居る、始の間は皆が誹謗し叱笑して、ナアに今に始めるぞ今に三度食ふ様になるぞ「木食や何か夜中に火吹竹」じや、麥

粥麥飯(米入らずの飯)で晩だけ茶粥があると云ふ様な時に二食でたまるものか、馬鹿な事だよ、吾諸佛頂上の禪では、無相心地の大戒と云つて、無量の戒法は心性の一戒にある、食へく、禪堂へ來ては禪堂の法に順應するが雲水の本分じや食へく、頻りに三度食事する事を勧めたが、仲々食はぬ四五年間道人も同時に修行して居つたが決して食はぬ、然して非常に修禪には骨折る、教相なども非常に研究して居るし、雲照律師の感化で、其願心の堅固な事、其意志の強固な事には、到頭大衆も感服して、後には出来るだけ、大真上人の爲めに便宜して、晩の藥石に供養でもある時は氣の毒だと云て、典座寮で内々に齊坐に獨り供養した事がある、峨山老師が遷化の後、伊豫の禾山老師の所へ、但馬の潭志、尾張の慶兄と真上人と三同行で、同時に掛錫して、同時に大事了畢して、真上人は今大阪堀江の了徳院に住職して盛んに法幢を建て宗旨を擧揚して爲人度生して居らる、様子じやが、此人こそ、前記の清僧とは雲泥の差がある、何でも雲水中に、横に咬み



際に咬み、刻苦して修行してないと通力を失ふ者が多い

東萊博議曰「物以順至者必以逆觀、天下禍不生於逆、而生於順、劍楯戈戟未必能敗敵、而金縉玉帛每足以滅人之國、霜雪霾霧未必能生疾、而聲色畝遊每足以損人之軀」

廬山遠公曰「逆境界順境界逆我意者只消一箇忍字、不片時便過若遇順境界則諸事順適我意、如磁石見鐵不覺不知合爲一所、無情之物尙然況全身在塵境中耶、まことに吟味すべき千古の金言であると思ふ。

### 五六 雲水の天一坊

今は昔し道人が雲水中、嵯峨の僧堂から雨安居の制間に、但馬の濱坂地方へ巡錫した、對田の天隣の令徒清拙老兄が來いとの事であつた、そうして滯在中は、説教を頼むと云ふ談であつた、しやべる事なら、十六七歳の頃から、破邪演説でもやつて處々の會堂へ質問に行つたり、劇場で討論を爲た位だから禪堂へ這入てか

らも、隨意座の日に嵐山の溪間の巖角に立て、新到の坊さんや、知己を集めて、講座の眞似をやつたり、説教の稽古を爲た位だから、宜しい開教致しましよふと承知して、先づ天隣寺で二日説教した、上手だとの評判であつたので、御世辭だろふと知りながらも嬉しかつた、其内にあちらからも、こちらからも、申込があつて、三週間許りに、六十何座と云ふ説教を爲た、勿論朝は何所で、晩は何所と云ふ風であつた、天隣寺の前住和尚も道情の厚い方であつた、道人は三週間も出入して世話に成つたから、恰も自分の本師の様な氣がした、山内一同が又親切であつた、今に到るも忘れられぬ、其時説教の練習ながら、遊びに行きたいと云ので急に、保兄(今伊勢に住職の由京都大應寺の弟子)と鶴老の二人を呼び寄せ、毎日々々、三人も大坊主が大飯食つて、説教に行ては戻つて來て本堂の上間から下間を豚小屋の様にして、雜物をちらけて、寢て居る實に氣の毒に思つた、道人はドコ迄も大和尚大和尚で、表面は威張つて居れと云ふ注文じやが、何分丹



後の鶴老は説教は下手でも天龍では高單で助警だ、保兄も道人より年が上だ、如何にも先輩の二老兄を人前で伴僧にすると云事はつらかつた、然し機に臨んでは是非がない、泰雲寺自得軒の兩考和尚は何れも法の爲めに自己を抑損して盡力せられたので、小僧の道人がしやべる、つまらぬ説教でも、伴僧には天下の禿僧が拙老鶴老保兄の三人だ、道人もあまり黒い衣に黒の絡子ではと云處から金襴の絡子を取寄せ、天台笠で優揚として出掛る、前後の隨行や伴僧で、いかにも大善知識の價いが有つたるふ、まあそふ云ふ風で濱坂地方は濟まして、自得、泰雪、天隣の諸老宿に御別れしたが、誠に忘れがたき洪恩を蒙つた、昨春も天隣寺で授戒があるから舊縁を以て隨喜せよと云はれたが、不宗盟ながら行かれなんだ、千古の恨みである、濱坂地方の評判がよかつたと云ので、泰雪和尚の照會で、村岡町でも歸途一日講話を爲るやふにと云ふので、深交ある淨土宗の楞嚴寺へ前から手紙を以て、青龍大和尚を棒大に案内してあるとは道人等夢にも知らず、濱坂か

ら湯村の温泉旅館へ自得軒や泰雲寺和尚の好意で一泊して翌朝春木峠を越して村岡へ着した、同行者は道人と共に都台四人である、楞嚴寺では、非常な高德なる大和尚が來ると思つて、内外大掃除をして、大莊嚴をして門には高張提燈がある、風呂桶なども新調されてある、玄關には毛氈が敷いてある、案内されて本堂へ通ると、上段に緞子の講座蒲團が一枚敷いてあつて、次の間には伴僧用の小座蒲團が三枚敷いてある、是れはと恐縮し乍ら、青龍大和尚ズカと上座へ通ると、執事が道人の袖を引止めて、若しと此方へと云つて次の間へ座せしめた、道人は赤面して伴僧の席へついてと通りの挨拶に及んだ、他の三人は草鞋に雲襦笠、袈裟文庫だ、道人は例の天台笠に頭陀囊に下駄であつたから先へ上つたのだ、ドヤと洗足してあとから來た坊主を見ると、誰も、悉く黒衣の雲水だ、講話して見なければ大和尚と伴僧の區別が出来ないのだから執事の上人一寸面食つた、道人が東司へ行つたあとへ上人が晩茶を持て來て、青龍大和尚はまだ



御着になりませぬか嘸途中で御疲勞な事であらふ」と拙老に尋ねると、拙老は今便所へ行かれし御方が大和尚ですと慇懃に云ふたから、執事の上人、目から火が出た様な顔して勝手へ飛で行つて、實は御伴僧だと思ひまして失禮致しましたと一層禮を厚くしての御詫言、其間に方丈は病中ながら態々相見すると云ふて禮服で御出頭、御講話をなされますかと問へば、實は兩三日前から急患で一昨夜などは徹夜看病人を煩はす程の次第で御座りましたが、大和尚折角の御巡化、せめては因縁の爲めに御泊りだけなりとも願いたいと申して執事の者へ命じては置ましたがイヤも私が臥床して居りますので萬事御不自由の段御許しをど、病體を勤めて道人を欺待せらるゝ道愛の厚きには感泣の外はなかつた、思ふと妙心派の巡教師などが巡教する時、五百ヶ寺の教區で一ヶ寺も開教しないの、投宿も許るさずして末派の寺院が蛇蝎の如くにするのと云ふ風説もあり又説教して巡る巡教師の中には惡徳の人があるからだと聞いても居るが宗旨も違ひ然かも一箇の吾等如き

雲水坊主を斯く迄法愛せらるゝのは誠に感謝の至りに堪へないのである、其から藥石も濟んで晩になると、其寺の客僧が珍談も候はゞ承、度いと云いながら四方山の談が始まつた、客僧の出生地は丹後の竹野郡だとか云い出したら、伴僧の位地にありし鶴老が乘氣になつて法螺を吹はじめた、イヤ其れは〜私も竹野郡であります、ヲ一其れなら貴僧は木津の萬松寺様の御弟子ですか、是れはごうも珍らしい處で拜芝しましたと他郷舊知に逢ふた嬉しさに大和尚の道人へも、ヲイ雄兄貴公と云ふ調子でいつの間にか雲水のする和合になつて仕舞い、はては大和尚の前で寐ころんで談し始めた、道人は如何にも面目を失ふたので、モ一大和尚の看版は取消しにして、次の日の絲井の長者へ投宿は伴僧だけに致そふではないか、いかにも不因徳千萬じや殊に昨夕のする和合では泰雲和尚へ對してもあとで面目ないと云つて金襴の絡子も、絹の白衣も村岡から小包で送つて仕舞つた、絲井の長者へは、青龍大和尚は國元より急電にて、俄かに歸國せられたか



ら伴僧の雲水四人であるが萬々宜敷然かし説教は伴僧でも致しますと云つて投宿致そふ、兼て泰雲より手厚く照會してあるからドウデモ投宿致さねばならぬ、絲井の吉井庄左衛門と云へば但馬中の名家で長者である、一箇人で教會堂を建て三千圓からの布教費基金を寄付したり、越溪禪師、獨園禪師なども度々請待したと云ふ有名な家だから、道人も大和尚ではトテモ勤まりきらぬと斷つた、終日道中で三人にせめられたが斷然承知せぬ、日の暮に絲井の村へ着した、拙老は故郷で様子も知つて居ると云ふので一步先へ行つて青龍大和尚が突然歸國の事、伴僧ばかり四人の事、伴僧でも説教する事の三事を通知して心配せぬ様に投宿だけ頼むと云ふ先觸に行くこと云から、其がよかるふ、宜敷やれと云ので、拙老が先驅に行つて只今青龍大和尚が着されます、和尚は非常に謙遜家で雲水と同様な風をして御座るから萬事雲水の通りにして手輕に投宿を願いたいと云ふ事であつたから一寸御斷りながら御願に出ましたと云ふたので、もう一層の厚遇にて

今此話を筆記するさい不因徳千萬であつたと思ふと、實に寒毛卓豎する程の感がある、吉井の令息が醫科大學へ入學して居られたが幸い暑中休暇で歸省中であつたから禮服用で村はづれ迄御出迎いだ、内外の莊飾等に到る迄細大洩れなく歡迎の誠意があらわれて居る、床の間に大師の眞筆、青磁の香爐、緋縮緬の講座蒲團、浴漕、浴衣悉く新調せられてある、臥具は、獨園教正が宿泊せられし時新調して、道人が第二回目の貴賓として被着するの光榮を得た、蚊帳は絹緞子、臥具は錦繡綾羅を打重ねられて、汗くさい蓬頭垢面の吾々雲水は、實に合掌禮拜して寐る能はずと云ふ程の立派な物であつた、到着の折、道人はドコ迄も伴僧と同様にと云ふので、鶴老や保兄の隣りにチヨコナンと坐つて居ると、背の高い保兄が眞面目に成つて、何卒あちらへと席を譲る、イヤと謙遜する、仲々承知せぬ、拙鶴保の三人が色を成して尊敬する、全然乞食芝居だ、其れを見て、家内中一層に感心せられた、母御が席を隔て、町重な御挨拶、道人一々恐縮して答禮する、



佛前に讀經も濟み、扱て夜間四方山の話の次手、此絲井の近くに、越溪禪師の新道場がある、其寺の弟子に森本文釋と云ふて靈松學林の同窓の友が住職して居る筈だから尋たいと話すど、其れはもふツイ此の近處でありますから毎日の様に御越しに成ります、今朝も大和尚は何日頃に御着になるか、是非相見致したいと云ふて來られましたから、明日は必ず御越しに成りますと申して置きましたこの事に、イヤ其人は同友でもあり格別親しい仲だから今夜散歩ながら尋ねてくると云へば、其れは御止め遊ばせ、先方でも御迷惑ならんと止められる、段々談を聞けば夫は文釋上座の本師で、然も越溪下の評判の大善知識で仲々むつかし家で、今年五十五六の老僧だと聞いて道人驚いた、萬一明朝相見に來られて、此坊主めが高腹空心の雲居の羅漢で老々大々ど何んじやなど、叱られたらどうしよふと、寐ても寐られぬ事になつた、其様な譯だから、綾や緞子の蒲團へねさせて貰ふても、如何にも恥かしく、早く此蒲團へ寐ても天下に耻ない一人の衲僧になりたいと思

つた、夜が明けた、讀經も粥座も濟んだ處へ、只今新道場の老師が相見に參られましたと云ふ、道人ギョツとしたが、まさか逃げる譯にも行かぬ、其れ程惡事を成したのでもない、青龍は若年乍ら住職だ又紫衣の大和尚だ、修行の爲めに今は雲水の姿を爲て居るのだ、何に恐れる處はない、只徳なくしてかゝる手厚き優待を受けるど云ふのが滿面の慚惶じや、如何なる天下の宗匠が來ても何じや、機に臨んでは師に譲らず、サア出て來いと自ら勇氣を出した、汝何れより、天龍に何の言句があるなど、やらかされぬうち、機先を制してやろふ乎など、道人は恰も參禪でも受ける様な氣がした、馬鹿な者だが、然し今思ふど其の正直な心根がやさしい、其の内に今の老師は三間も座敷を隔て、低頭される、道人は上段に緋縮緬の蒲團の上へ麻衣のチリ〜に黒の絡子を掛けて悠然と構へて居る、其老師の顔を見るや否や、道人は伴僧の位地に坐せる保兄に指圖して、コレ〜、一寸蒲團を差上げて下さい、保兄は懃懃に蒲團を上間床の間の前に敷いた、サアこちらへ、へ



イ、サアこちらへ、ヘイ、仲々老師は進まれぬ、道人も更に應答せぬ、老師も是非なく、同室に入り、恐る座蒲を敷かれた、道人始めて座蒲より半分すべり下りて、始めて相見致しますとやらかした、二言三言ばかり談したがあまり喋つてポロを出してはならぬと云ふので、これは能く御尋ねくださいました、エ、色々御談したい事もあるが、今日は生野驛から大阪迄是非参らねば相成らぬ瀛車の都合もあるから是れにて御別れと致します、又御縁も候は、と再會を約して、家内一同へも御いとました、町重に菓子料などを貰らつた、道人消へて無くなりた程恐縮した、今の老師始め、醫科大學の令息も、老母も、番頭も、女中も、ごや、と、村の境い迄見送られた、覺へず其厚情なるに涙をそ、いだ、別れてから、道人は拙老に對し、泰雲和尚は、何と云ふ照會をしたのか、斯く町重にされては困ると云へば、佛法の餘徳じやと云ふ、保兄はあとから道人の袖を引いてあの菓子料は山分けたぞと云ふ、然り實に然りと菓子料を分配して一同が瀛

車賃の補いにして無事に又嵯峨へ掛錫をしたが、絲井の一夜はまるで雲水の天一坊であつた、道人はそう云ふ雲水中から不因徳をしたので、寺持てから、今に不自由して嬾貰ふ事もならず衣の錢にも困ると云ふ次第じや、恐るべき事である。

### 五七 嚴師の慈悲

臨濟和尚が黃檗に參じて六十捧打のめされ、スゴ、道場に戻つて、首座の睦州に對し、「ごうも分りませぬ」と云ふた時の臨濟大師の胸中を追想しては、覺へず涙の衣襟を濕す次第じや、嚴師の慈悲は嚴父の慈悲の其よりも徹骨一番ありがたひ處がある、鎌倉の宗光法兄なども親しく這箇の消息に瞠着して泣いた男だ、宗光師兄は楞迦老師の上足で、海軍中尉で文學士だ、植村宗光と云へば宗門の人は知らなひ者は馬鹿だと云ふ位いに前途有望に思はれた者だ、同じ文學士でも佛飯を費して、嚴師の托鉢錢で學文修業して、大學でも出ると、もふ嚴師の慈悲も何も忘れて仕舞ふ無道心な還俗坊主が多い世の中に、能く植村は出家して呉れたと、予は



感泣した、植村宗光師兄は越後の素封家の二男で、學文して一人前の文學士に成てから出家した人物だ、臨濟宗の坊主のなかに、學問修業して文學士と云ふ者になつて、それから坊主になつて且坊主らしく雲水の修業をして居る宗光師兄の如き求道の念の厚ひ熱烈なる信仰を有する人は、予の如き田舎坊主には不幸にしてこれ迄未だ他に一人も見當らぬ、建長圓覺の僧堂へも、隨分各種の人が參禪する様子で、雲水にも色々の人が居り又俗人でも博士とか學士とか云ふ人たちが、仲々熱心に来るが、禪宗坊主の學者で禪宗坊主らしい行動の人は一人もないのは妙だ、近頃迄妙心の學林の教師をして居つて死んだ藤國太郎の如き男なども佛罰でもあつたか若死したのはあたりまひだと思ふよ、彼れが高等學校の時代から、授業寺の老僧は白から衣鉢の料に事を欠ひても、越宗(國太郎の僧名)に越宗にと慈愛して世話された、其から近頃遷化せられた海晏老師なども、彼の爲めには一と方ならぬ盡力で法愛せられた者だ、彼れも修學中は「へい、へい、私は何處

迄も、大學を卒業したら、禪門の爲めに活動しますから何分宜敷御願ひ申ます」と如何にも、道念の厚ひ風を粧ひくさつてさ、愈々卒業したらドヲダ越宗の僧名は返還して、文學士藤國太郎で御座ると、京都の木屋町邊へ借宅して下宿屋の娘だかを嬪にして、ハイカラ風で妙心の學林へ教師に通勤して居つたらしひが、罰もあたりそふな者さ、予も學校時代の親友であつたから一度尋たいと思つたが、坊主が尋ねると厭やがると云ふ噂を聞ひて遂に尋ねずに仕舞つたが、是れ等は禪宗の飯盜と云ふ奴じや、鎌倉にもそう云不徳義な忘恩奴が一人あるそふだ、圓覺の塔中の小僧で嚴師は身を削る様にして、學資を送つてやつたのに愈々卒業したら都合上僧籍返還だの師弟の絶縁を願ひたいなど、申込んで、今は其奴が或る私立大學の講師になつて、大恩ある師匠が御尋ねに成つても玄關拂ひを喰はして居るげな、そふして大學の講座でも演説でも、口を開けば禪門の短處と弊害のみを指摘して攻撃して何事も勤めて俗漢を粧ふて居ると云ふ話しを聞ひたが、不徳



義ども忘恩奴ども云ひ様のなひ奴じやないか、獅子身中の蟲とは此奴等の事じや、早晚のたり死にでもする奴さ、そふ云ふ不徳義な還俗坊主が、倫理學か何かの本を近頃著述したそふだ、最も倫理學は道德家を作る力はなくして道德の理屈をこねまはす學文だとか言ふことであるから、そんな坊主の倫理の講義は今日の書生には寧ろ氣受がよひのかも知れないが、然しそふ云ふ没道德な奴を教師として尊敬する世の中は馬鹿だ、今の學者は大方こんな者かしらん、

然しそふ云ふ輕薄な世の中に、宗光師兄の如き者があつたから、予は嬉しく思つて居つた、其かと云ふて宗光師兄は失戀でもなひ、失敗でもなひ、厭世でもなひ、唯々求道の爲めに出家したのである、乃公あらずんば禪門を如何せんと云ふ様なそふ云ふきたない名譽心でもないのだ、唯々求道の念厚き事斯の如しで出家したのであるから、予は實に師兄の前途を喜んで居つた、或は親勝りの人物に成つて呉れるだろふと思ふて居つた、宗光師兄と云ふといつも予は天田五郎の鐵眼を聯

想する、宗光師兄は一寸頑固な、氣性は鐵眼に似て居つた、鐵眼も友人には青鬼と云れたと云ふが、宗光師兄も青鬼と云ふて予はあだ名して居つた、予も頑固なので、師兄とは意氣が投合して居つた、宗演老師の法愛を蒙つて予が毎月圓覺へ參禪に行くど、いつも宗光師兄と侍者寮で法螺を吹合ふた者だが、互に相信じ合ふて居つたので、老師に嚴重なる黄檗流の痛捧を喫はされて、侍者寮へ戻つて來て予と對坐して師兄が衣を嚼んで泣く時には、予は……妙に這の宗旨、這の法道の事になるといつも泣けて堪らぬ性質であるので……人が法の爲めに刻苦して泣くと其顔を見ればかりでも涙がこぼれてならぬ、

「泣け〜彼をして涙を流さしむれば蒼海も亦た乾きつべしじや、宗門の大事はそふ云ふ處にありがたい處があるからなあ」、

と彼れを慰めながら、共泣きに泣いた事もあつた、或時なども、宗光師兄に老師が手紙の代筆を命せられた、師命の通りに認めて老師の處へ持つて行くと、



老師は

何んじや此文面は、文學士だなど云ふ者が普通文さへ書けぬのか、馬鹿坊主めが

と叱咤せられて、青鬼の如き宗光師兄は頭を掻ひて叱られたく云ひながら戻つて来て又認めなをして居る、其文面を見れば、我れくの如き者の目から見れば立派な文章だが、其れを老師はガミく〜と嚴責叱咤せられるのだ。

或時も老師が薩摩焼か何かの器で愛頑して居られた久須を、青鬼の宗光師兄が疎忽して打こはした、其壞れた久須を持って、老師の前へ怖る〜行つて平身低頭して詫びた、

つひ疎忽を致しまして御大事の久須を破損致しましたと

語未だ了らざるに老師はウン馬鹿坊主めがケロケロして脚下に氣を付なひからたわいと怒罵された、宗光師兄は肅然として其の壞目を兩方の手で喰付合はして見

て居る、其時の有様などは實に氣毒に思ふた、今の時節に宗光師兄程の學文があつて世間に出て居れば文學士でそふろのと大威張りに威張つて、下女の二人三人も使つて、人に教へて人を叱る力量のある人物が、唯々求道の爲めに功名富貴を捨て、土の如く、其身も亦塵芥の如く恰も下女同様に成り下つて綿々密々に油を捧げてこぼさざるが如く勤めても仲々老師は許るされぬ嚴重な風があつた、其癖陰では老師も暗涙を含んで云れた事もある、いやも今の人は餘程嚴重にしても、疎暴に流れ易く、常識を逸して大機大用と心得たり、亂行頓機を以て宗門向上の境界だと思ふ輩がありますから、可愛そふでも苦言毒舌を以て彼の爲にするのですと、云ひ了つて如何にもいたはしひと云ふ嚴師の心情を流露して予に茶話し玉ひし事もあつた、

日露戦争の頃は、師兄は病氣であつたが、勇心勃々禁じ得ぬのを静養して圓覺に居つたが、參禪しては叱られ、ある朝など方丈の前を掃除して居つたが、青ざめ



た顔をして竹箒を以て天の一方を見て暗涙に咽せんで居つた處を見て、予は嗚呼又慷慨激越して居るのだなと思ふた事もあつた。

談は前後するが、今から八年前の三月三日に、青龍の自坊へ大門の方から大きな體格の雲水坊主が色のあせた木綿衣に袈裟文庫を掛けて莞爾として來る、誰れだと思つたら宗光師兄だ、是から伊豆の田子に楞迦老師の接心があるから行くつもりで來たが、予にも同行せよと云ふて勸める、其れじやあ今日は自坊の大般若會だから貴公も隨喜して明日にしると云ふて、其日は法話などして貰らつて、晩には尊宿の例を以て優待したら、喜んで勿體なひくと云ふて晩に道話をして翌日は大雨が降つたが予も合羽を着て濡れに濡れて天城山の麓の世古村で投宿して、天城山を越して田子の正法院へ同行して一と修行やらかした、其時居士の企望で、予は通俗禪話を爲た、其禪話に臨濟錄の大衆夫れ法の爲めにする者は喪身失命を避けず吾二十年黃檗先師の處にあつて三度佛法的々の大意を問ふて三度打せらる

と云ふ嚴師の慈悲、法道修行の眞趣味を舉揚したら、宗光師兄、座下にあつて落涙嗚咽した、其顔を見て話しながら予も又泣ひた事がある、以來、師兄に會合する毎に、頭を抱ひてごうも貴公の田子の法話には泣かされたと一つ談しであつた、

予が從軍する時も、三島驛まで態々見送られて、今に乃公も行くから戦地で又會見すると云つて握手して分れを惜んだ以後予が從軍中は又骨肉も管ならぬ親交を以て互に通信して居つたが、師兄は愈病氣が全快して陸軍歩兵中尉文學士植村宗光で軍營に入て出征した、予は次で病氣に罹つて本國へ護送せられた、三十七年十二月三十日に廣島へ着してから、北條時敬氏の處へ立寄つたら、昨日植村中尉宗光師は此地を出發したと云ふ話して如何にも残念に思ふた、武帝が達磨に逢はず、千古萬古の恨みだと愚痴を云ふたよりも残念であつた、北條時敬氏に聽けば軍服の下へ緒子を掛けて、拳銃の代りに老師より所賜の鐵如意を持て居つたと聽



ひて、「予はそふ思ふた「師兄はどこ迄も禪宗坊主らしひ男だ」と今時の輕薄なる佛飯を喫して一人前の學者と成つて飯が喰へる様に成れば還俗すると云ふ意志の薄弱な、沒道德な、忘恩奴なる、禽獸にも劣れる、不信仰なる、無道心なる虛榮心の幽靈同様な還俗文學士等には、此植村の鼻糞でも嘗めさせてやりたひよ、ごふした者か眞宗出身の學者は還俗しても佛恩報謝を思ひ、有髮の出家で仲々信念の厚ひ人があるが禪宗坊主の此頃の學者は、妙に坊主らしい人がない、それは嚴師の慈悲が足らぬ加減かしらぬ、又學者坊主の願心の足らぬ加減か分らぬ、其から花田中佐の部下と成つて、別動隊で深く敵地に入つて馬賊の爲めにどうく惨殺せられたと云ふ報知を聞いて、彼の眼光の尖ごひ、青ざめた顔付で敵に柱へ縛り付られて、愈々死ぬると云ふ一刹那には、彼れが胸中はどうなであつたらふ、決して女々敷振舞はなかつたらふが、愈々是れが今生の最後と云ふ時に二十年來、御保育を蒙りし父母よ、出家得度以來熱喝噴拳以て吾れを鉗鎚せら

れし嚴師楞迦老大師よ、生前知己の同火の兄弟よ、宗光は只今斯の蠻賊の刃にかかりて、電光石花春風を斬る底の眞境界に穩座して從容として死に就ます、從軍以來幾多の艱難と戦つて、法戦と實戦の力用をも試みて今はあへなく朔風原頭の露と消へますが多年御慈愛を蒙りし圓覺往來の居士禪姉の方々よ、宗光が生前は一方ならぬ御道愛を蒙りまして今は御國の御爲めに目出度白刃の下に斃るゝ身となりました幸ひに胸中一點の煩悶なく笑つて死ぬる境界を得ましたは偏へに佛祖の深恩と思ひます、嗚呼這箇の眞境界を知己道友に語りて聞かせたひ

と思ひしならん、這裡の消息誰と共にか語らん、言語不通、朱髯綠眼、風俗異種の蠻賊は口々に師兄を憎くしと怒罵せしならん、眼を怒らして師兄を打せしならん、柱にくゝりあげて足にて蹴りしならん、左れどく師兄が從容として悪びれもせず、靜坐瞑目悠然たる穩容を見ては、蠻賊も亦好軍人よ、眞箇の英雄よと、



心ひそかに讚嘆せしならん、語り、ひ置く事のあらば、語り聞せよと蠻賊の間ひし時師兄は定めし君萬歳を祝禱して、父上始め、嚴師老大師の御健在を默禱して、縛を解かれて東方故國に向つて禮三拜して、君恩師恩父母の恩并に佛祖の深恩を泣謝してはらくと溢る涙を、老大師所賜の絡子にてぬぐひ、朗々と四句の願文を高く唱へて、端坐して首をのべしならんと、いつも師兄を想像して、定中に回向して居る次第じやが、今はもふ丹鳳城外信書絶、白浪河北秋夜長じや。

## 五八 ヲ一寒むく

オ一寒々、今から斯う寒くなつちやあ臘八時分はどんなに寒くなるだらう、雲水は如何に抛身捨命が目的だからと云ても矢つ張り肉身が基礎だあな、釋迦如來が一麻一麥で、身をば基石に血の涙で辛苦艱難せられたも一通りの願心ぢやあない、つまり此身の老病死苦が恐しさに思ひ付た仕事だもの、我々の様な饅頭に釣られた、でも坊主とは大體の素志が違ふからな、然し乍ら志しさを釋迦なれば、行

ひも釋迦だ、今の奴等は何かと云と直に古人々々と云て昔の人は生れながら是れを知り是を行つたかの様に云ふが、馬鹿な話した、孔子も學んで知ると苦んで知ると三等の階級を立てたさうだが、禪宗では二等あるのみだ、寒山の如き、巖頭の如きは生れながらに悟た人物だ、趙州なども小僧の時から知て居た仲間らしい、南泉の處へ行て瑞象を見ず即今此臥如來を見るナンて餘程氣があつた者らしい雪峰の如きは學んで知つた人だらうか、半兄今日鼈山成道と連呼したあたりは餘程嬉しかつたと見ゆる、臨濟の如きは實に苦んで知た人だ、三度佛法的々の大意を問て三度打せらるなどこわらい骨折た者だ、まあ禪宗で學んで知るなんて世間の學問とは違ふからね、又學で知つたやつはどうしても一返は苦しみにやあ妙處は得られぬさ、雪峰だつて洞水逆流の邊ではいかにも學で知た者としきア思はれないが鼈山巔上で雪に阻られて巖頭は高枕で寢て居るのに、自分は兀然打座して密々に工夫して居るなどはドーしても苦んで知ろうとする様子があるわい、熟々



考へ見るに、我々は初發の志が全體鈍いからいけない、最初僧堂へ掛錫する時な  
んざあ鈍いなりにも氣ははつて居たなあ、三貫目位の複子を前後ろにして、中庭  
へタノミマセウとやらかした時、知客寮が出て来て當僧堂は作務は多く枯淡だし  
海雲山月はるゝと尋師訪道て參禪刻苦する心算でも、到底辛抱が出来るものか  
去れ、他の明師に參し去れと、門前拂ひをくふた時、否とよ、我は法の爲に  
佛祖へ獻じた體だ、作務や托鉢や枯淡の爲に恐るゝ位るでは掛錫も願はれまい、  
昔、大休さんが古月和尚の印可を受けて熊野山中で聖胎長養するつもりで、堺の  
南宗へ投宿して、且過の壁に樂書してあつた白隠和尚の不入涅槃の偈頌に瞠着し  
て、今迄の御悟りはすつかり住吉灘頭の逆浪にまき去られた心地になつて、トウ  
く駿州迄尋ねて行かれた、處が白隠和尚仲々甘顔はみせぬ、好能くまあ遠方を尋  
ねて来た、然し己れが寺は貧地だから貴様等の様な雪亭の奉公人かトコロテン筒  
の様な糞たれ坊主は一疋もおけぬからどこへなりとも行けどひごい和尚だつたな

あ、其れでも法のためにはるゝと来て參禪もせずにごく歸られるかいと、  
非常に憤發して動かんところから、門前拂ひに逢て裂風猛雨で合羽も笠も吹飛さ  
れる程の日に、托鉢に行てこいと云付られた、此天氣にどなるかと呟やいて居ら  
れた處へ、和尚が見付て天秤棒かついで何を愚圖々々して居る、この位の雨に恐  
れてどうする、馬鹿坊主め打殺してしまうぞと、眼銅鈴の如く、牙劍樹の如き顔  
付きで、百雷の一時に落るが如き大聲で怒鳴つけられ、二人は嚴和尚なる哉乎と  
賞嘆し且つ恐れて、托鉢に行れたなんど、云ふ談を思へば是れしきのことは何で  
もないと、又思ひなほしてすごく知客寮の後とへ戻て庭詰しながら隻手に何の  
聲かある、狗子に何によつてか佛性なきなんて、聞きかぢりの工夫をしたりして  
典座寮や殿司の青小僧らめ、わいらあ七八年前にさう云苦勞をしたぞと云様な面  
付きで得意然と大聲で喋るのがいまししいやら、うらめしいやら、何だつてわ  
らさうに、己れが今に參堂でもしたら貴様等の様な鞍馬山はきめないで、骨折て



みせるぞ、七年か八年の内にやあ、一人前の修行はしてみせるなんて仲々わらい勢ひだつたがなあ、光陰は矢よりもはやいは、ことしは、もう五年目か、耻かしい事だなあ、今迄何を仕て居たかしらん、吾臨濟の門庭何の事かある、諸禪德何邊の事をかなし得たる、祖庭秋晩る、嘆すべく悲むべし、なんて叱られちやあ、思ひなほし思なほしするもの、何の事だらう、所得と云つては我慢と、大食と居眠りと糞落付になつたと、人を併呑する位の事だな、其れも併呑するばつかしで、吐き出す力はない、これはよい、氣に成て居ると、達磨さん九年面壁なんぢやいな位の事だぞ、世間に居れば世辭でも覺ゆるのに、從來の惡智惡見を捨よなんて云はれちやあどをづきまはされて、へんちきな人間になりさうだわい、今頃から學問するも十日の菊だし、又禪堂で殺活自在の妙用がなけりやあ世間の學問したからつて駄目な話だらうふうの、然し世間の學問のない一方向の擔板漢は修行に付いちや直行進前で馬車馬の様にやらかす代り、頑固なにや己れも自分で愛想が

盡きる、此頃も正宗贊の下見の時、五祖こうにん大師と讀むだら、そばから、こうにんぢやないぐにんとよまにやいけないと云はれて、馬鹿云へ弘法大師と云ぢやないか、ぐ法大師と誰が云ふ、ぐ忍か、こう忍か、五祖に聞てみい、貴公等はなんでも、少しばかり文字を知てると思つて、知た顔するが、不立文字と云ぢやないかと立派に一本やらかした積りできばつて居つたが斯う云ふ糞我慢が抑もわるい、そりや向ふの云方も云ひ方だが、己れも上出来ぢやないわい、是れでも、人となせ人、人となれ人で、新到の頃よりは餘程なほつたさうだが、まだ本物ぢやないな、歳の御蔭で近頃は只我を殺して居るので少しはい、様にも思ふが、時々は我慢の死骸が飛出るので、耻かしい事が多い、こんな有様でさて一人前だなんて世間の盲ごもにをだてられたら、随分調子づいてキ印位ゐの事は云れさうだ、困たもんだな、いつそ世間へ出て、最一度學問でもして見やうか、あゝ駄目々々、無業一生莫忘想だ、つまらない話しなア、どれ東司へでも行つて一服吸ふて來ま



しようか。

五九 雪中の門宿

其人の名は忘れたが、先年何んでも野州邊の妙心派で一等地の大和尚で、隨分道念の厚い人で徒弟教育も熱心で、布教も亦熱心な人で\*



雪中の門宿

\*あつたが大に感ずる處がある云ふので、圓覺の僧堂へ雲水と成つて、掛錫を願出た、處

が、制中でもあり、猶又此和尚一筋繩では仕末に困ると見たの乎、例の御定りの三貫目からの複子をウンとこさこさ背負て、タノミマシャウとやらかしたが、役位の者は仲々承知しなひで警策を以て昏鐘頭にたゞき出して了つた、天下の大和尚も禪堂の舊參の雲水が、權理をもつて法令無親に怒鳴るのだから、如何とも口を開く事は出来ないので其大和尚は、霏々たる大雪に然も寒風骨に徹するの時、終日食はずに空腹であるから、ガタ／＼ぶるひがして、齒の根も合はぬ始末だ、嗚呼寺に居れば、御師匠様とか方丈様とか云はれて小僧や檀徒に尊敬せられて何不自由なく暮らされて、今夜の様な寒むひ時は、炬燵にでも這入て寝て居られるの、法、の爲めとは云ひ乍ら、變れば變る浮世だなあ、然かし古人が法の爲めに刻苦致された事を思へば、是れしきの事は九牛の一毛じやと、自ら策勵して、精神は慥かでも、どうしても身體は寒さに堪へられぬ、其内に僧堂の白犬がワン／＼と云ふて、大和尚が門の軒下に呼吸も止りさうな顔を爲し、切齒搔腕して坐



禪して居る處へ来て、膝へもたれて寝て呉れたので、犬の體温で徹夜の凍苦を凌  
ひださうだ、其大和尚は今でも、あの白犬は私しの大恩ある犬だと云ふて窃かに  
其恩を謝して居ると云ふが、美人の體温で一夜をあかして生涯をあやまる人も、  
此犬の體温で一身を救はれたと云ふ大和尚の志願を見たら、頂門の一針に成るだ  
らう、そして此大和尚も雪夜の門宿を生涯忘却しなければ、必ず痛快の事があ  
るだらうと思ふ。

## 六〇 尻の穴をなめる

ちと尾漏な談だが、天龍僧堂にも二疋犬が居て、僧衣さへ着て居れば、どんな人  
にでも尾を振つてつひて行くが、其かはり又洋服を着た者には屹度吠付ひた者だ  
郵便配達などは毎日來ても、毎日吠付かれた、其だからワン〜と十時頃に犬が  
吠へると、アッ郵便かと堂内に居ても思想をかわひた位だ、或年夏の晩方、法堂  
前の松林下を、何處の坊主か二人で、衣を着てブラリ〜御尻迄着物をクルツと

まくつて散歩して行く、其のあとから今の犬が嬉しさうに、尾をふり乍らソツト  
行つて御尻をペロリとなめたら、其坊さんが、飛あがつて驚ひたが、随分、可笑  
かつた、あんまり御行儀がわるひと、こう云ふ事がある。

## 六一 坐睡

道人は坐睡が極下手な方で、睡れば必ず頭が右か左へちぎれる程振れる方だ、説教  
師などが能く云ふ隣り起しと云ふ睡り方だ、坐睡には色々な癖がある者で、片目  
開いて睡る人もあれば、指を一本鼻の穴へ入れて、足の親指をピツク〜と動  
かす癖の人もあつた（此人は今或る本山の御師家に成つて居る）坐睡して大き  
な聲で寢言を言ふ坊主もあれば、又或る僧堂の直日は坐睡して禪床から庭へころ  
げ落ちて其れを知らずに口をへの字にして濟し込んで、土間へ坐つて居つたが、  
目を開いて見たら、兩側の大衆が皆棚へ上つて坐禪して居ると思つて自分を忘れ  
て、コラッ何故みんな棚へなぞあがつて居るのやと云つて、大きな聲で怒鳴つた



ら、大衆がクス／＼笑つたので、始めて氣が付ひて見ると、自分が中庭に落ちて居つたなど云ふ滑稽もある、又妙にうしろへどしやん／＼と引繰り返る癖の人もある、天龍の玄策和尚などは、此引繰り返へる方で、都合に依ると隣の坊さんの頭へ大きな南瓜頭を、コツンとぶちつけて、涎をすゝる處など、來ては、天下の名譽だの、利慾だの、煩惱も妄想も御悟りもあつたもんじやあなひ、又文老と云ふ男は、口を上へ向けて、鐵楞仙人が、瓢箪でも吹出す様に、ホ／＼と云ふて、麝をかい、坐睡をするが癖だつたが、隣單に行兄と云ふ男があつて、袂からソーツと金米糖を一粒出して、好ひ心地に成つて瓢箪を吹出してゐる文老の口の中へホイと放り込んだ、鐵楞仙人驚ひて目を覺まし、行兄を睨み付た、拳固で今にも一つと云ふ一刹那、嚼んで見たら甘かつたので、怒つた顔がやさしく成つて、ソーツと袖の下から手を出して、もふちつと金米糖を呉れど、やらかした處は如何にも腹の皮がよれたよ。

## 六二 藥しやぼんを喰ふ

道人が雲水中は始終、腫物で困つた、其れで常に藥しやぼんを使用して居つたが或日托鉢の晩、入浴してから日没後に雪隠の横で法螺の大將と成つて、五六人の若ひ雲水を相手に頻りに吹ひて居つた處へ、九州の英兄と云ふて隣單の男が來たから、是れを一寸頼むと云ふて、今の藥しやぼんを片付て置ひて呉れと云ふつもりで渡した、その翌朝藥しやぼんを見たら喰ひちぎつてあるから、英兄々々貴公は昨晚乃公の藥しやぼんを喰つたなど尋ねたら、ヲ、夕べのか、貴公が菓子を呉れたと思つて、一と口やつたら、まさかつたはひと云つて、平然として居つた。

## 六三 歩行にして水牛に乗る

清兄と云ふ面白ひ境界の正直な坊さんが居つたが「歩行にして水牛に乗る」と云ふ公案に苦るしんで、何んでも成りきるがよひと思つて、托鉢の序に豆しぼりの手拭を買つて來て、晩の參禪の時其手拭を、ソーツと袂へ入れて、室内へ這入る

藥しやぼんを喰ふ、歩行にして水牛に乗る



や否や、其れで頬被りをして、峩山老師へ横乗りに乗つて、大きな聲で、箱根八里はア……ヨ……と馬子歌をやつて、叱ッ……と、老師の横ッ腹を二つばかり打のめしたら、峩山老師が怒るまひとか、咄這馬鹿坊主咄這の婆羅助坊主と云て打つて透ひ出した、清兄もあんまり叱られたので、一ト月ばかり耻かしくて参禪に行かれぬと云ふて居つた、そふ云ふ道人も南泉斬猫の公案で、和尚が成りきれ……と云つて叱るから、一番趙州に成りきつてやれと思つて、参禪の時、堂内の草履を袂へ入れて行つて、禮拜したて、頓て用意の草履を頭に載せて、室内から出る風をして、是れでもどうじやと坐り込んだら、老師が、ソージャ昔から癩の御マジナイにさう云ふ事をするが、趙州に成りきつた境界はそんな物じやなひ、其れは成りきつたではなひ、真似じやはひと云はれて、實に穴があれば這入りたかつたよ、今は伊豆の邊に住職して居るが、磨子と云ふ男は「隻手」は透過したが隻手の證據が解らぬ何と云つても、幾度参禪しても、證據が解らぬ、其れが

一年や二年の骨折  
 ではなひ、大接心  
 に成ると、狂氣の  
 如く骨を折るが、  
 到底解らぬ妙な物  
 だ、正直な手丈夫  
 な者程、一則の公案  
 にも、一言の撈處  
 にも骨折る者だ、  
 或る時、あんまり  
 悲しく成つて理屈  
 も道理も言ふと\*

歩行にして水中に乘る



も語ることも  
 なくなつたの  
 で、斯の證據  
 と云ふのは、  
 作用で御座り  
 ますかと和尚  
 に尋ねた、ス  
 ルと和尚が、  
 無論貴様のは  
 たらきじやと  
 云れた、貴様  
 のを聞かずに



只は、たらきと云ふ言だけ聞いて、磨子は、和尚の横ッ面を二つばかりぶんなぐつて、角力の手で和尚を後ろへ引繰返へした、スルト和尚が怒つて、磨子の胸倉を取つて打ちにかゝると、磨子は仲々角力の手取りだ、和尚も角力は好事だつたが若い磨子には勝てないので、美事和尚がドタンと投げ付けられた、ソウして磨子は此はたらきでは如何で御座る「隻手の證據」には成りませぬかと云ふたら、和尚今度は禪板を以て、頭から打のめした、磨子もたまらず逃出して禪堂の南の畑へ飛込んだ、和尚は大きな石を拾ろつて、此坊主、此處迄來ひ打殺ろして了ふぞと怒鳴つた、磨子は芋畑の中へ這入て一生懸命に眼をすへて坐つて居る、新到の坊さんは、其れを見て、ガタ／＼身慄ひをして衣の袖を嚼んで泣いて居ると云ふ始末だ、どうも御師家様も樂ではないが、雲水も骨が折れる、然し其れが皆一生懸命だからたつといのさ。

## 六四 鯉が座敷へ躍り込む

美濃の珍老と云ふ男は、なか／＼境界の面白い奴で、〇〇の〇〇寺の弟子だ、小僧の時分に和尚が留守に成つた折、餓鬼大將に成つて、池から大きな鯉をすくつて來て、内所で御馳走をするつもりで、ヤイ／＼騒いで、副司寮迄箆籠へ入れて持込んだ處へ、和尚が突然戻つて來た、小僧一同が椽側へ出て手を付いてへい御歸りなさいとやらかして居る、珍老は餓鬼大將だから氣が氣じやあない、取敢へず風呂敷を鯉の箆籠へかけて置いて迎いに出了た、處が今の鯉めがボタン／＼と座敷をあばれ到頭和尚の通る椽側へと躍り出した、サア和尚が憤怒して、何奴じやこんな鯉をすくつたのは、と怒鳴つた、珍老はぬからぬ顔をしてヲット………ヲット鯉が、こんな座敷へ、どうして躍込んだのでしやうと、愕然した風で云ふと和尚が、とばけるなど云つて横ッ面を一つはつて置いて、サツ／＼と居間へ這入て行かれたが、誤魔化しても、和尚は和尚だと思つて閉口したよと話した事がある。



六五 餛飩の辨當

其の珍老が、僧堂から暫暇して歸國する時、盂蘭盆の展待で、餛飩の残りが澤山



あつたので、典座に頼んで餛飩を菓子折へ入れて、薬瓶へ汁を入れて汽車の中で

持鉢開いて、ツル〜食つたら、乗客が氣狂いだと思つて見て居つたさうだ、此  
 珍老は、抹茶が好事で、何處へ行くにも袈裟文庫へ、くつつけて持つて歩く男だ  
 が、妙に又、不潔な事をかまはぬ男で、修善寺の温泉場で、浴客が體を洗つて居  
 る湯で點茶して、ウマイ〜と云ふて居た位だから、住職してからも、汚穢い事  
 は少しも頓着しない、先年も道人が尋ねたら、ウン久しぶりだのふ、今日はなん  
 にも御馳走がないじや、大根ヲロシでも、こしらへて薬石の菜にするじやと云つ  
 て、九歳ばかりの小僧に、坊や、大根一本畑から採つて来て、ヲロシを拵らへよ  
 と云いつけた、小僧は畑から足の様な太といやつを一本取て来て、ゴチャ〜  
 と洗つて、まだ泥が少々付いて居つてもかまはないで、今の小僧が其大根を兩手  
 でかゝへる様に持つて、ヲロシ板を兩足の踵で踏まへて、ごし〜ヲロスと、猫  
 の糞や、鶏の糞で疊が黒斑に成つて居る其疊の上へごし〜大根をヲロシたと云  
 ふものだ、道人は困つた事だと思つて居ると、珍老は委細なかまいなし疊の上か



ら、箸で皿へ取つて、醬油を掛けてウン仲々ウマイと云ふて食ふて居る、小僧の足の裏の垢も、畑の泥も少々は交つて居る、其れへ、猫の小便、鶏の糞も混じて居る譯だから、どす黒い色をして居る、其れを珍老獨り珍重がつて、喰ふたのは驚いた。

## 六六 寶泰寺の布嶽和尚

布嶽和尚は能く寢言を言ふ男であつたが、伊深に居る時、直日に何とか云ふあはたッ面で、ちんのださめした様な顔して居る男が、一寸學問もあり仲々能く喋べる奴で、其れが大接心中にあんまり意地の悪るい事を喋べるとて、大衆に氣受が能くない處へ、解定後に、其狎のくさめした様な直日が、小便に出掛けると、布嶽が寢處で、大きな聲で「嗚呼直日様の御面相は實に御立派なものじゃ、ムニヤ〜〜」とやらかした、如何な意地の悪るい直日も、寢言じやあ仕方がないから、チエツと舌打して出て行たさうだ、天龍へ布嶽和尚が來てからも、隣單に越

中の超兄と言ふ極正直な男が居つて、托鉢の晩は内解定だから能く坐蒲團を持つて、裏の龜山や曹源池の邊へ行て、天台の羅漢の様に、皆夜坐に行くのだが、内解定の時は、夜坐に行くにしても、内證で行くのだ、所が、超兄も骨折るつもりで、坐蒲團もつて行きは行つたが、寒いやら腹がへるので、直に戻つて來た、すると、布嶽が例の寢言に、大きな聲で「お早ふ御歸り」とやらかした、まだ月が皓々と東の窓を照らして、室内でも禪坐して居る人もある、道人は其れを見て居つたが、超兄が如何にもいま〜しいと云ふ風で、チエツと舌打して亦坐布團を持つて、シヨロ〜と二度目の夜坐と出掛けた處は随分振つた者であつた。

## 六七 初發心の菩薩も十日目には凡夫に劣る

と謂ふは禪僧一般の俚諺だが、昔でも今でも、僧でも俗でも有る通弊じやて、中嶋廣録の山房夜話にも「學人其初心に背かざる者あること鮮なし」と言ふ問端を設けて、難有垂示があるが、其當時一人の老僧があつて懺悔話をした事が書いて



ある

老僧昔俗にありし時、能く法華經四卷を背誦したり、自ら思ふ童顏方服出家の後、必ず其未だ記誦せざる、四卷にも通背すべしと、豈期せんや出家以來既に二十年、惟其未だ記ざるの三卷を廢するのみならず、其已に、暗誦記臆せし四卷だも亦皆忘失すと、之話を聞く者鼻を掩すと云ふことなし（是から中峰和尚の語）因て衆に謂つて曰く、家に在るに當ては、出座の缺る所を負くことを以て毎に其懷抱を虚にす、故に能く朝に思ひ暮に想ふて之れを受くるのみ、既に出家の所期満て、頓に塵累を脱れば、閑情日に逸す、曾て忘るゝことを期せざるに而も之れを忘る、其失する處を原ぬれば、今の參學の者以て異なることなく、且つ四海家無し、一身萬里、其負ふ所の缺る毎に唯禪を會して後ち已んことを欲するのみ

とあつたが、道人等も中峰國師には怒鳴られる方だ、始めて天龍へ掛錫する時は

二十一だつたが、制中も制間も山を下らずに、油断なく刻苦勉勵して、六七年内には大善知識に成る願心で、半年ばかりは随分骨も折つたが、何のことだやら、初發心の菩薩も十日目には凡夫に劣るで、一年たつたかたゝぬ間にモウ既に惡魔外道じや、思出しては參禪し、止めては叱られて修行する、僧堂を出たり這入つたり、油を賣つて禪堂に修行して居つたのか遊んで居つたのか、分らぬ様なことで、十年ばかりは夢と過ぎて仕舞つた、其から又寺を持つことに成つた、寺の持ち始めは又初發心の菩薩で僧堂坊主の通りに、下男と二人で朝は鹽で粥、晝は麥飯、晩は雜炊とさきめて、古人の風を真似て、錢もなひから、歩行で然も毎日圓覺へ接心にも行つたが、始の内は菩薩でも、段々凡夫に成つて來る、其接心も毎月が毎年一度位に減るし、住職早々は朝から味噌汁などがあると下男に、勿體なひ菜は晝のみで宜ろしひと云ふて、豆腐も買はなかつた、元より貧僧でもあつた故だが、其れが段々昔を忘れて、朝から味噌汁か大根か芋か何か御菜が一つほしひと

初發心の菩薩も十日目には凡夫に劣る



云ふ様に成つた、先頃も下男の夫婦者めが、道人に内々で魚を煮て飯を食つて居る、道人には、たつた紅生姜一片で澤庵も出すが世話だと云ふて、なんにも副食物がなひ、さうして下男は和尚さんも魚をあがれば差上りますとぬかすわい、道人がきらいなことを知りながら、意地の悪いことを云ふと思つたら、いまゝしくなつた、腹が立つたが、然し、紅生姜一と切でも、米の白飯を腹一杯食ふのだから、まあゝ我慢しろと思つて朝飯をすましたが、僧堂へ始めて掛錫した時の菩薩心、住職初めの菩薩心、學校へ初めて入校した時の菩薩心、會社へ初めて出勤した時の菩薩心、婿入初めの菩薩心、嫁入始めの菩薩心、まあ何んでも此世へ初めて發生した時の、清新なる活きゝした力のある此菩提心とも菩薩心とも言はるゝありがたい心を忘れると、覺へた御經も忘れて了ふことに成る、道人も二十年前の初發心が相續して居つたら、今頃は偉らい大善知識にでも成つて居つたのだらうが、惜しいことをした、然し死ぬ迄修行の決心でやるつもりだ、死んだら

ら幽霊にでも成つて參禪するわい、さうすれば打れても、痛くなからうと思ふから。

## 六八 信仰の感化

信州諏訪の温泉寺の願王和尚は一世の高徳であつた、雲水中から地藏菩薩が大信心で、地藏菩薩の行ひを行ひとし、地藏の説法を説法し、地藏の慈悲を我慈悲として、寸隙の油断なく信仰した人であつた、當時の人は地藏菩薩の再來ちやと云ふたさうだが、再來ではない生身の地藏菩薩であるちや、雲水中に道中で宿へ泊つた處が、美人が獨り其場へ來て流水落花の風情である、和尚は平然と靜坐してヲンカアゝカピサンマアエーソワカと、珠數つまぐつて禮拜して御座る、すると其美人が西鶴全集にでも書いてある様な事を、和尚に作麼生か如何とやらかしたのだらう、和尚赫と怒つてコラゝ番頭を呼べと云ふ騒ぎに成つた、へいゝと頭を掻き乍ら、何か御用で御座りますかと云つたら、為鹿ア、御用どころでは



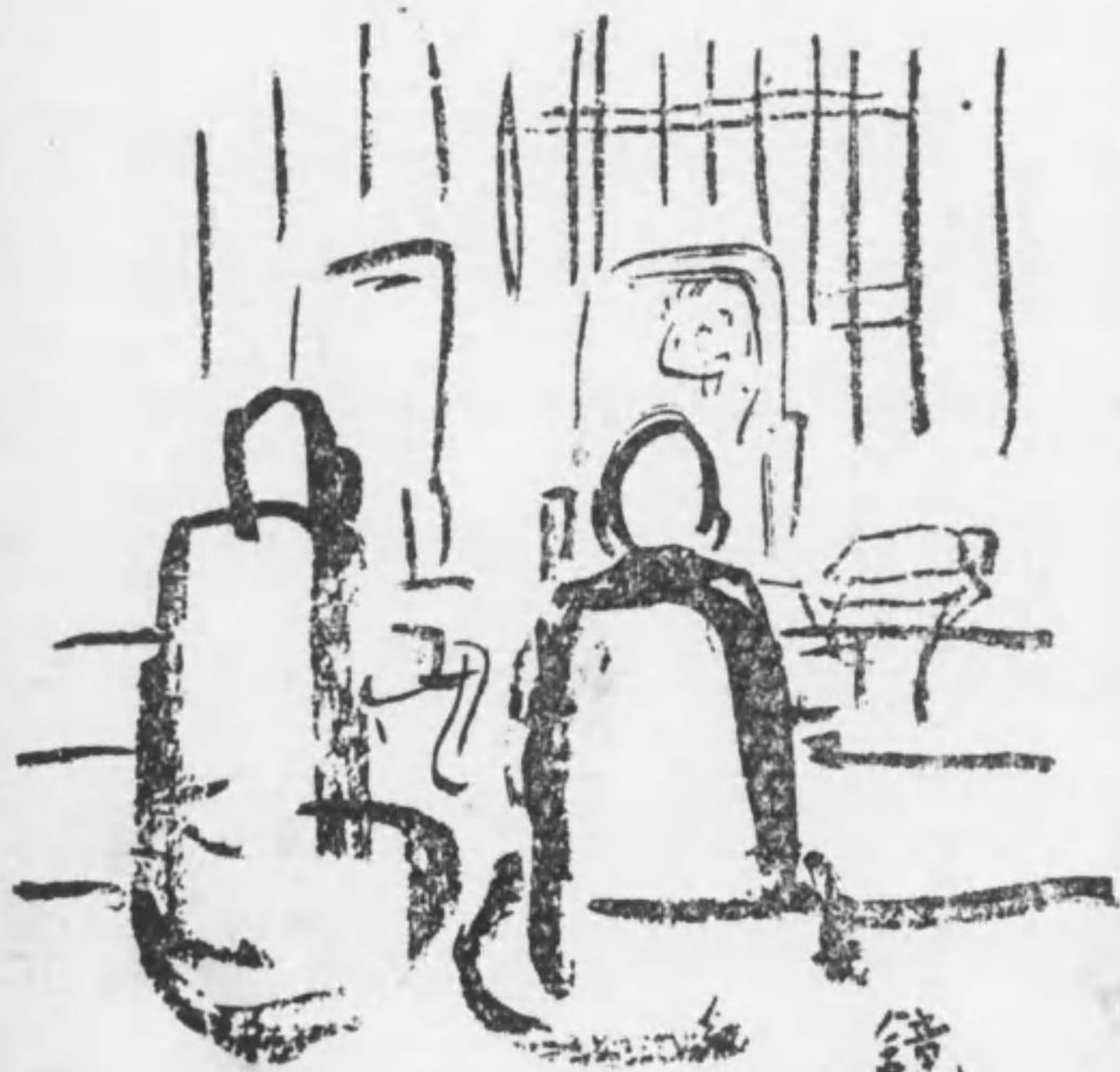
ない、此怪しからん女を引すりだせと云ふ御叱りぢや、イエ其の女は今晚御僧様の女房で御座りますから宜敷と云つて笑らつて居る、和尚益々立腹して段々聞けば、旅宿ではなくて女郎屋であつた、もう仕方がない是れ迄の因縁と諦めて、其れならば女房と云ふ者は乃公の云ふ通りにするだらうな、左様で御座りますとも、然らば此宿に女房になる婦人が幾人居るか、へい六七人居ります、ソウカ然らば一と晩其七人の女房を乃公の云ふ通りに仕事を爲すには日當は幾許らだ、へい七人で三兩と二分で御座ります、然らば乃公は今晚七人ながら皆女房に頼むから此處へ呼べと云つて、七人の女郎を呼び出して、水垢離を行はせて、サア皆此通りにやれと云つて袈裟文庫の中から地藏菩薩の尊像を取出して線香を立て、一心不乱に、陀羅尼を唱へて禮拜をして、女郎にも其通りにやれと云つて、叱り付ては、ヨンカア〜と一唱一禮する殆ど三百禮もしてから女郎に對して、地藏菩薩のありがたい事を話して聞かれた、聞かしてはサア一心に禮拜供養せよと云つ

ては又眞面目に勤めて、二百禮位済むと法話をして聞せられた、中夜に到つて、始の間はゲタ〜笑らふて居つた女郎も眞實菩薩の慈悲を忝く感得して、ありがたく成つて来て、遂には家内中の者が、勿體ない、ありがたいと云ふて發露懺悔し、一同が隨喜禮拜を勤めて曉天に到つた、翌日も滯留を願ふて三兩二分は返済して却て多分の布施を差上げて前夜の失禮を詫びたと云ふ逸話を聞いて居るが信仰の徳と云ふは恐ろしい者ぢや。

## 六九 道人が雲水中

伊勢の若六と云ふ宿屋へ三人で投宿した事がある、元より御客ではない、ロハで泊めて貰うたのだから、三人の同行は下女の部屋へ案内された、其れが、腰窓の處へ大きな鏡臺が置いてある其鏡臺に向つて袈裟文庫を安置して三人が面壁ではない、面鏡をして居ると、始終女中が自分の要事があつて戸棚を開けたり閉めたりして居たが吾等三人が達磨大師坐禪の姿をやつて居る背ろ姿を見てニヤリと笑





鏡中の  
吾

うて、ペロリと舌を出した、其の顔が、前の鏡へ寫つた其時の可笑しさと云つた  
らなかつた、下女は赤面して出て行た事がある、君子は其獨りを慎むべしぢや。

七〇 相國寺の東嶽老師は

中々棒喝のつかい手で、便打室と云ふ位の人だが、ある時、人我山の如く、そし  
て入室して一度打ちのめされて、低頭するや否や、今度は老師の頭を思ひ切りゴ  
ッーンと打ちのめして、其れから自己の見解を呈すると云ふ居厄介な士があつた、  
禮拜しててコッーン「吾輩は……」と云ふ工合で其男が入室すると如何なる便打室  
も御迷惑ながら一つ宛、拳固の御土産を食らはされるが例であつた、或時例の通  
り、コッーン「吾……」と口を開かんと擬せしに、和尚隙かさず、禿頭をモウ一  
つ打てと居士の口の處へ差し付けられた、居士の奴がケロ〜した、すると和尚  
は直に起て居士を打つて〜〜打ちのめして咄して曰く、此腰ぬけ者めが、叱  
咤して逐出したら以來大我慢も取れたと云ふ談しを聞た事がある。



## 七一 風呂敷包を持って入室

或接心會で久參の老婦人で毎會聽講參禪を缺さぬ名望家の北堂がある、毎會侍女を連れて、侍女にも佛縁を結ばさんと、無理にも講座を聽かせて禪門の妙を味はさんとして心掛けて居られた、或時其侍女は始めて御伴をして來たとき、サツパリ様子が分らぬゆへ何處へでも御隠居様のいらつしやる處へ御伴さへすれば好いご心得、參禪とかで老師様の處へ一人宛、何んだか半鐘の小さい様な鐘をカン〜と二つ宛、打つていらつしやるから、私しも風呂敷包や外套を抱へて御伴して參らうとすると、僧堂の者に、ソんな物を持って二人も一處に行く事はならぬと叱られ大に狼狽いたと云ふ女中の失敗談を聞いて大笑ひした事がある。

## 七二 何ぢや此ざまは

道人が十五六の時分典座當番で飯炊きをするといつも師匠が見廻つて來ては能く叱られたが、小僧の時分に叱られた事は覺て居る物で、或時、竈の邊へ師匠が

廻つて來て「何んぢや此ざまは、火の燃わて居る間に斯んな木の葉や、芥は火箸で斯く掻込めば奇麗にも成り、火も能く燃わると云ふ者ぢや、飯が吹き出したら竈の邊は竈の雜巾で飯の汁が堅く皮張らぬ間にふき取て仕舞へばいつも奇麗である物を馬鹿な奴ぢや、釜へ飯粒を一粒でも付けて置くから洗ひ流が澤山出來ると云ふ者ぢや、鍋でも釜でも水を入れる前に能くうつす器へうつして其れから水を入れて洗へば何時でも流し場も奇麗に成つて居ると云ふ物ぢや、大根葉でも香の物の切れ端でも粟一粒でも、皆百姓が粒々辛苦の菩薩ぞよ、勿體ない、こんな水だらけにしては、犬も喜んでは喰はぬぞよ」と云れて、流し箱の穴へ籠をあてがつて其れを自分に雜炊にして食はれた事があつたが、今でも飯炊男の留守に、自炊をして見ると、いつも師匠の目玉が目に見えて、無意識に其通り勤めて食物を籠末にせぬ様に成つて居る、小僧の時分に云はれた事は生涯用不盡ぢや。

## 七三 人を使ふには

風呂敷包を持って入室、何ぢや此ざまは、人を使ふには



飯炊男の菊藏と云ふ奴が何遍云ふても釜を奇麗に爲ぬので、いつも飯粒をどつきり付けては流れ川へザンプと放り込んで置くので、道人が何時でも菊藏に内所で釜の中にヒツ付いて居る飯粒を拾つて喰つて、奇麗に磨がいて元の通り、又川水へヒヤカして置た、六七回其れをやつたら道人の云ふ通りに成る様に成つたが、何でもない事だが人を使ふ者は心得べき事だ。

#### 七四 投宿の作法

朝さくしの粥がたくなり今年米、とは道人が駄句ちやが、雲水中に紀州の方へ三度旅行した、一度は美濃の大安寺の俊老と同行した、紀州の蕪ら坂の麓の寺へ投宿した、一寸此處で雲水が投宿の作法と云ふものを談さう、御投宿などと云へば旅館ならば氣がきいて居るが、雲水の投宿は仲々六かしい作法がある、今では雲水も青天を笠にして富士山を杖にして大地を下駄にして、行きなりはつたり「今宵は此處に、明日は田の中畦枕」など、云ふ、悠々自適、東漂西泊、吟花嘯月、白雲

萬里、天涯の孤客と成つて、恁麼ならば住す不恁麼ならば去ると云ふような書に書いた様な、詩人や茶人が美望する程の境界を修養して居る程の餘地がないから、天下の衲僧を以て自任して居る雲水でも、雲水としての投宿の作法も知らぬ人がある、其れに汽車や汽船の便利もあるから、道中で空しく光陰を費やすよりも、寸時も早く目的の道場へ掛錫して辨道に骨折ると云ふ事に成つたのは、然し喜ぶべき事だ、だが雲水としての趣味は、一夏九十日の間、道場で刻苦勉勵して夏間の休みに西國順禮するとか、叡山で獨接心を爲るとか、五山十刹を拜塔するとか、何とか目的を立て悠々閑日月を樂むと云ふは、仲々以て世間の人の想像も及ばぬ妙味がある、先づ投宿を願ふには成るべく早いがよい、其れかと云ふて、二時や三時も早過ぎるが、大抵四時から六時頃迄が投宿を願ふ時機としてある、斷るにも、未だ早いから斷はることも、又は昏鐘鳴後だから斷ることも云つて謝絶する、頼む方でも、早ければまだ少々時間は早う御座りますが今日は格別疲勞しま



いたからとか、當山から先は途中投宿の御寺がないからとか何とか云ふて頼むので、時間が遅くなつて晩の鐘が鳴つてから後ならば、昏鐘鳴後恐れ入りますが投宿を御願ひ致しますと云ふのだ、勿論複子と云つて、荷物は袈裟文庫に持鉢と合羽と頭陀囊と網代笠、足には白の脚絆をつけて門へ這入ると、笠を手に持つて、合羽は背ろ荷にして、袈裟文庫へ持鉢を出臍の様にひつ付けて、頭陀囊は袈裟文庫の下に成る様にして玄關より外に行く處がない寺は、玄關へ行くのだが、可成は内玄關か勝手の上り口へ腰を掛けて、笠は庭の隅に置いて、袈裟文庫へ頭をつけて、タノ……ミマシャウ……と、やらかすのだ、あんまり大きな聲で怒鳴ると、納所坊主や小僧や嬬が、愕つくりして出て來ないから、中聲でタノ……ミマシャウとやらかすだ、殊に依ると乞食の様に思つて御断りだよとぬかして娘や嬬が無愛想に云ふ者もあるから、そう云ふ時には、靜に頭をあげて、一夜の露を、凌がしてよと、只管らに頼むのだ、然し正式に應接の坊主が出て來れば

天竺國横町雲水寺孤雲の弟子、漂然と申者で御座りますが、御勞煩ながら今晚投宿を御願致します

と斯ふ云ふ風に、國郡村と寺號と師匠と自分の名を云ふて頼むのだ、而うすると野宿同様でも宜敷ば御泊りなさいと云ふて、洗足の水を取つて呉れるから、先づ左の足の草鞋からぬいで、右の草鞋と合せて、くるくると縛つて、勿論衣の玉だすきをかけて、足を洗らつた其水は少して持てたらば、自分に捨て盥も片付けて玉だすきをはづして、玄關なら敷臺へ、内玄關なら上り口の敷臺へちやんと坐はつて居るのだ、頭陀囊は自分に持つて居るがよい、取次が袈裟文庫を持つて、どうぞ此方へ御通りなさいと案内する、座敷へ這入つて袈裟文庫を置いて呉れた處へ坐はつて、持鉢の風呂敷を開らいて、袈裟文庫へ掛けて、先づ袈裟文庫へ向つて三拜了つて、徐ろに脚絆をぬぐがよい、脚絆を早く取ると餘分に疲勞れるものだ、脚絆を片付けて袈裟文庫に對面して居ると、今の取次が盆に晩茶を汲ん



で座敷へ這入て来るから、其足音に氣を付て、出入口の方へ向なほつて坐るのだ坐ると其時が初對面の挨拶だ、汲んで呉れた茶を呑んで了ふと、雲水記と云ふて宿帳を付ける、帳簿と硯箱を差向けてどうぞ宜敷と取次が低頭する、此方らも應對して謹んで書くのだ、此時でもあんまり筆をひねくつたり、墨を付けては雲水記の上まで以て來て、頭をかしげて、舌をペロ／＼して口なめすりして、又墨を付たりして居るは不作法だから、成るべく靜かに落ち付いて

京都嵯峨天龍寺塔中鹿王院義堂徒 昌禎

とこんな風に書くのだが、中には縣から郡村大字法脈及原籍迄も書かせる處がある、今の専門道場は其委しく書く方だが何でも前例の通りに準じて、書くのだ、記して了まつたら雲水記を向うへむけて硯の蓋をして取次の方へ返して宜しくと云ふ挨拶をするのだ、何事も主人の方で尋ねない事はあまり喋べらぬがよい、さうして相見香と云ふて、白檀の三錢か五錢分程半紙で包んで紅唐紙を、三分位に

切つて、水引の代りに帯にして、同じ半紙を二寸位に切つて、謹上と上の方へ二字大きく書いて、何々九拜と下の方へ書くのだが、九拜と謹上が一號活字なら、自分の名は四號活字位に書いて、拜標として其へ挿挿んで、今の晩茶の盆へ載せて御寸隙がありましたら堂頭様に相見を御願ひ致したいと云ふて取次に頼んで置く、取次は其相見香を受取つて、御緩つくり御休みなさいと云つて袈裟子を靜かに閉めて出て行く、此方は又元の通り袈裟文庫と對座して、達磨大師坐禪の形と成つて其れから空想にふける、其時の境界は道人今猶忘れる事が出来ない程面白い愉快なものだ、別段御世辭を云ふ必要もなければ、四隣寂として人語を聞かず、あゝ先づ、今夜も野宿をせず此寺へ泊めて貰はれたはい、扱て今夜藥石（晩飯の事）は何を呉れるだらうなど、妄想をかはいて坐つて居る内に、御開浴をなさいと云ふ聲が聞けるハイ難有う御座りますと、靜かに立つて、案内者に尾いて行くと、浴室には跋駄婆羅菩薩が安置してあるから、其前で三拜して衣掛があ



れば衣を掛けて、着物は必ず袖疊みにして、懐中物などは必ず腹帯か袖へ入れて仕舞つて置く事だ、其から布褌なども、必ず人目にかゝらぬ處へ置くだ、愈湯へ這入る時も、能く前を洗つて這入るだ、體を洗らふには、浴槽の外で洗ひ流がすだ、洗ひ流すにしても、ダブ／＼水を疎末にせぬ様に心掛ねばならぬ、浴室から出る時も静かにして下駄の音などを成るべくさせぬ様にして元の座敷へ戻る、手拭を掛けて置くにも露が垂れても差支のない處へ掛けて置くだ、其から藥石を召しあがれど取次が云ふて呉れると、持鉢を以て案内の取次に尾ひて行く、此處だ美濃の俊老が其茶袋を嚼んだと云ふのは、例の蕪坂の麓の寺で、膳がある、香の物が鉢にある、鍋に茶粥が煮てあるを以て其茶粥の中に餅が入れてあるのだと思つて、俊老が茶袋を椀へ盛り込んで、横にかみ堅に嚼みして見ても、餅の味が出ない、能く／＼見たら、晩茶を布巾にしばつて茶を煮だした茶がらであつたなど云ふは頗る滑稽だ。

其から粥を啜るにも、ハッフ／＼／＼などと啜つては相成らぬ、香の物を食ふにもガリ／＼ポリ／＼と馬が牧草を喰ふ様な食ひ方をしては成らぬ、食つて了つたら、膳も何もかも奇麗に拭いて、成るべく當住へ手敷を掛けぬ様に心掛るが雲水の本義だ、元の通り椀と箸を洗つて、持鉢を形付て、又た袈裟文庫の前へ行つて坐つて居るのだ、町の衆や職人が、飯を食つた時の様に大きな聲で御馳走さんで御座りましたなど云ふ世間の御世辭は無用ぢや、下女か下男が膳を下げに来たら、御世話になりますなど云ふ誠心からの禮は云ふが通常ぢや、然し其れも大きい聲で云ふては不法である、總て戸障子の開閉は坐つて爲るのである、座敷へ戻つて暫らくすると今晚方丈が相見致す筈で御座りますが、何れ明朝に致しますとか、若しくは今晚相見致しますとか云ふて来る、其時は正式だと袈裟をかけて方丈の室の入り口で三拜して無言で低頭して、低頭した儘エー今晚は御勞煩にあづかりましてありがとうございますと御座りますと申上る、和尚の目の玉を、見ぬくも此處だし、雲



水の目の玉を見ぬかれるも此處だ、碧巖録や葛藤集にある公案は此の初相見の時の一機一境一挨拶一言一句即ち古人の言論往來だ、縦令へば汝何より來る、黄檗より來る、黄檗に何の言句がありしなどと食つてかゝつたも此相見の時の出來事だが、そんな六ヶしい事は今はせぬ、其れはくゝ萬事御不自由で御座りまじやうが、御つかれであらうから明朝は行事懈怠にして、緩るくゝ御眠みなさいと和尚が仕舞ひに云ふて呉れ、ば、朝は寝忘れても宜しいが、其挨拶がないと、半鐘が鳴れば起きて行事の讀經を共に勤めるのだ、讀經の時も下間の方に座して小聲で讀經するのだ、晩に寐るにも、袈裟文庫の仕末をして寐るだが、兎も角、雲水の面白いと云ふのは、此投宿などしてぶら／＼漂泊して制間に順禮するので、如何にも雲水の真味があるが、眞實に橋錢一文も無しでは面白い處か苦るしみである、雲水の印鑑とも證明書とも云ふべき安名と、今では戸籍の謄本を以て居ぬと、何處へ行つても不都合な事が多い、其れから一寸苟且に道中を爲るにしても

麻袈裟、麻衣、木綿の白單衣、白足袋、何時死んでも棺桶の代金として昔は三兩位袈裟文庫に張り付けて師匠が用意して出した者だが、今では便利だから五圓もあれば涅槃金(葬式用費)も澤山だ、紙に墨筆、清心丹か寶丹と、雨の用意の合羽と、持鉢、是れだけは如何なる場合も雲水として出掛る以上は背負て出なければ雲水として投宿は許されない、今では網代笠を流車に乗るに邪魔だと云ふて厭ふが、然し邪魔に成るのは網代笠よりも、寧ろ自己の我儘其ものだ、錢さへあればあれも欲しい是れも欲しいと一寺の住職の様な氣に成つて華奢に成ることだ、雲水の邪魔に成るのは修行純一ならぬのが、網代笠よりも邪魔に成る、第一汽車に乗る體が邪魔に成る、道人などは、天台笠が好きで、あの笠を被ぶつて出ると、いつも身錢もいらねば心も落付くし、道人は如何なる風もするが網代笠で汽車にも電車にも乗る、乗ると第一乗合の人が馬鹿にして乞食でも乗込んだ様に輕蔑するけれども其れが又好い修行に成るのだ、八幡の伽山老師が大徳の管長に成つてからも、網



代笠を持つて二等の汽車へ乗り込んだ、すると乗合の人が、若し坊さん、此處は御前の乗る處ぢやないよと氣を付けて呉れた、其れはく老僧の間違でありましたかと、三等の方へ行きにかゝつたら、驛長が知つて居つて、管長様其處で宜敷いよと云ふて御世話をしてあげた故、其人は座に堪へなると云ふ逸話もある、雲水の價値は網代笠にある、どうも洋傘に袈裟文庫では畫にも成らぬし、又蝙蝠傘は手へ持つ必要があるし、汽車の内へも能く忘れるし、何れにしても、道中は手に無一物が樂だ、

談が横道へ曲がつたが其から、投宿した朝は布團を片付けて、箒を借りて後を掃除して、何もかも座敷の隅へ片付けて置くのだ、粥座(朝飯)の新らしい粥なら食經を讀むんで喫粥する、残飯残粥や雑炊の時は般若心經一卷を口誦して食ふのだ、讀經にしても調子はづれの御經を讀んでは相成らぬ、食事が済んで座敷へ戻ると番茶を汲んで取次が御随意に御出掛なさいと云ふて、俗に云ふて茶をくんで前途

を祝福して呉れる、此時相見香の返禮に、拾錢も草鞋錢を呉れ、ば、天へも上る程嬉しいのだが、ひどい寺になると泊めても呉れぬのだから、其れ迄忘想かはくは





ちと慾が深かすぎる譯だ、まあこんなつまらぬ事も、初めて雲水に成つて出掛け  
る人の幾分か参考になれば結構ぢや。

雲水物語終

明治四十四年九月十五日印刷

「雲水物語奥付」

明治四十四年九月十日發行

定價五十錢

著述者 青龍道人

發行者 今立裕

印刷者 小笠原芳

印刷所 正直堂

複製  
不許

發行所

東京市神田區  
駿河臺袋町壹

光融館

電話本局二九九九番  
振替東京二三一三番











高津泊樹齋密校訂 ○松崎覺本師參訂編輯  
●天桂唱碧巖錄講義(五) 定價 八角  
●天桂唱碧巖錄講義(六) 定價 八角  
●天桂唱碧巖錄講義(七) 定價 八角  
●天桂唱碧巖錄講義(八) 定價 八角  
●天桂唱碧巖錄講義(九) 定價 八角  
●天桂唱碧巖錄講義(十) 定價 八角

●臨濟錄講義(新) 定價 八角  
●臨濟錄講義(舊) 定價 八角  
●臨濟錄講義(再) 定價 八角  
●臨濟錄講義(三) 定價 八角  
●臨濟錄講義(四) 定價 八角  
●臨濟錄講義(五) 定價 八角  
●臨濟錄講義(六) 定價 八角  
●臨濟錄講義(七) 定價 八角  
●臨濟錄講義(八) 定價 八角  
●臨濟錄講義(九) 定價 八角  
●臨濟錄講義(十) 定價 八角

●碧巖錄十則講義(三) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(四) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(五) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(六) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(七) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(八) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(九) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(十) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(十一) 定價 八角  
●碧巖錄十則講義(十二) 定價 八角

●寒山詩講義(六) 定價 八角  
●寒山詩講義(七) 定價 八角  
●寒山詩講義(八) 定價 八角  
●寒山詩講義(九) 定價 八角  
●寒山詩講義(十) 定價 八角  
●寒山詩講義(十一) 定價 八角  
●寒山詩講義(十二) 定價 八角  
●寒山詩講義(十三) 定價 八角  
●寒山詩講義(十四) 定價 八角  
●寒山詩講義(十五) 定價 八角  
●寒山詩講義(十六) 定價 八角

●從容錄講話 定價 八角  
●從容錄講話(再) 定價 八角  
●從容錄講話(三) 定價 八角  
●從容錄講話(四) 定價 八角  
●從容錄講話(五) 定價 八角  
●從容錄講話(六) 定價 八角  
●從容錄講話(七) 定價 八角  
●從容錄講話(八) 定價 八角  
●從容錄講話(九) 定價 八角  
●從容錄講話(十) 定價 八角

●馮山警策講義(新) 定價 八角  
●馮山警策講義(舊) 定價 八角  
●馮山警策講義(再) 定價 八角  
●馮山警策講義(三) 定價 八角  
●馮山警策講義(四) 定價 八角  
●馮山警策講義(五) 定價 八角  
●馮山警策講義(六) 定價 八角  
●馮山警策講義(七) 定價 八角  
●馮山警策講義(八) 定價 八角  
●馮山警策講義(九) 定價 八角  
●馮山警策講義(十) 定價 八角

●無門關講義(再) 定價 八角  
●無門關講義(三) 定價 八角  
●無門關講義(四) 定價 八角  
●無門關講義(五) 定價 八角  
●無門關講義(六) 定價 八角  
●無門關講義(七) 定價 八角  
●無門關講義(八) 定價 八角  
●無門關講義(九) 定價 八角  
●無門關講義(十) 定價 八角  
●無門關講義(十一) 定價 八角  
●無門關講義(十二) 定價 八角

●普勸坐禪儀講義(五) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(六) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(七) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(八) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(九) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十一) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十二) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十三) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十四) 定價 八角  
●普勸坐禪儀講義(十五) 定價 八角

●山田孝道師講義  
●山田孝道師講義(再)  
●山田孝道師講義(三)  
●山田孝道師講義(四)  
●山田孝道師講義(五)  
●山田孝道師講義(六)  
●山田孝道師講義(七)  
●山田孝道師講義(八)  
●山田孝道師講義(九)  
●山田孝道師講義(十)  
●山田孝道師講義(十一)  
●山田孝道師講義(十二)  
●山田孝道師講義(十三)  
●山田孝道師講義(十四)  
●山田孝道師講義(十五)



































終

